
ISとオーズと転生した男

ホープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISとオースと転生した男

【Nコード】

N4063W

【作者名】

ホープ

【あらすじ】

とある事件により死亡した青年・鷹代映司。次に目覚めたときにはIS学園にいた。かくして物語は始まる

ISとメダルと転生少年（前書き）

書くたくなつたので書いてみた

ISとメダルと転生少年

「ISか・・・」

俺は先生の後ろをついていきながら呟いた

女性にしか扱うことができない兵器

くしくも俺はそれを扱う術をこの世界ではない場所で手にした

そして、本来なら俺は大学を卒業して社会へでる歳だったが、今は

見ての通り、16歳の一介の高校生

そもそもなぜこうなったかというと

それは俺の初めての死から始まった

「あなたは死にました」

第一声はこうだった

眼鏡をかけた背中に翼の生えた髪の高い天使？は言った

「・・・」

「驚いて開いた口も塞がらないか・・・」

「嘘だろ・・・」

「現実だ」

「そんな・・・翼を生やした痛い設定を考えてる人に拉致られた？」

「つつこむべきは違つところだと思ひますが、」

「イタイイタイ」

「あなたは天使からの厚意を無駄にするつもりですか？」

「わかりましたよ。厨二病患者の戯言に付き合っ
てやりますよ」

「・・・もういいです」

眼鏡をかけた天使？はため息をついた

「鷹代映司くん。君にはISの世界に転生してもらいます」
たかしろ

「は？」

IS？ラノベの？

「一応私のもてるすべてを使ってあなたの要求を聞き入れたい
と思います」

「はあ・・・」

「では、最初にどのようなISを使いたいですか？」

そうか。これは夢か。そうだよ。ありえないよな。翼が生えた人
なんて、ラノベの世界に行けるって。

よし、そうとわかればなんでもやっちゃおう！

「オーズがいいかな」

最近見たあの最終回涙が出たな・・・

「・・・オーズか。都合がいいな」

天使？が密かに何かとんでもないことを言ったがなんだ？

「わかった。君の使用するISはオーズに設定する」

すると、手にオーズドライバーと腕輪がはめられた

「それじゃあいい人生を」

その言葉のあと視界が真っ黒になり
現在に至るわけだ

「鷹代、私がいいと言うまでここで待っている」

そういつて織斑千冬先生は教室に入った

その直後、中からスパァン！！と誰かが叩かれる音がした

しばらくしたあと、入ってこいと言われ中に入ると、聞いていた通り女子だらけだ

そして、視線が集中しまくってる

「えと・・・鷹代映司です。よろしくお願いします。」

沈黙する一同

ヤバッしくったか？と思うと

「「「「「キヤーーーーー！！」「」」」」

黄色い声援が返ってきて唾然とする映司

そこで織斑先生の一喝がとび、再び静かになる場

「鷹代、お前の席は織斑の後ろだ」

「はい」

そそくさと座る俺だった

「織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ」

「鷹代映司だ。よろしく一夏」

S H Rを終えたあと、一夏と簡単に挨拶をした

そのあとに一夏はポニーテールの女子生徒に連れられていった

一人になった俺はしばらく寝ることにした

「・・・であるからしてISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり・・・」

なにも知らずにIS学園に来たが、話を聞いてるとそれについての知識が頭に巡ってくる

さすがは天使もどきこころへんの情報管理はしっかりしてるな

すると、副担任の山田先生が俺の前に座る一夏の拳動不審に気づいて話し掛けた

「織斑くん。何かわからないところがあつたら訊いてくださいね。」

なにせ私は先生ですから」

「……まさか一夏、この程度のこともわからないのか？
その疑問は、的中することになった

「ほとんど全部わかりません」

バカだ。こいつ

かくいう俺も数秒前までさっぱりだったんだけどな
すると、織斑先生が一夏に聞いた

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パン！！

案の定名簿で叩かれた一夏だった

授業を終え、一夏と話していると

「ちょっと、よろしくって？」

「へ？」

「……」

呼ばれたような気がしたので後ろを振り向きと外国人特有の青色の
目で地毛である金髪は若干ロールがかっていた

そして、なにより高貴オーラを放っていてなんだかあまり相手にしたくないタイプに出会ったなと心のなかで呟いた

「訊いてます？返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど・・・どういう用件だ？」

一夏が応対してる間にどこかへ行くかと思う映司

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも栄光なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

セシリア・オルコット？おかしい。彼女についての知識が巡らないまさか、あの天使もどき、IS学園の生徒に関する知識だけ詰めなかったな

そうこうしていると、二人の話は先に進んでいた

「代表候補生って、何？」

その言葉にクラスの子が数人こけた
バシンとハリセンで一夏の頭を叩く俺

「イツツ、いきなりなにするんだよ！」

「一夏・・・それぐらい分かれ」

「じゃあ代表候補生ってなにか教えてくれよ」

「聞いた通り、その国に選ばれたエリートだ」

もっとも簡単な言葉で一夏に教えると

「そう！エリートなのですわ！」

さっきまでのこの世の終わりを見てもおかしくない目をしていたセシリア・オルコットが復活した

「ですから、わたくしのような選ばれた人間と、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸福なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・馬鹿にしていますの？」

なんだか不穏な空気が漂い始めたなと俺は素直に思ったそのとき
キーンコーンカーンコーン

「っ・・・！またあとで来ますわ！逃げないことね！そちらのあなたもよ！よくつて！？」

なぜ俺もカウントされた？なにもしていないのに
理不尽だ俺は心のなかで呟いた

ISとメダルと転生少年（後書き）

いかがだったでしょうか？

面白ければ幸いです

主人公設定

鷹代映司

年齢：16歳

たいした欲望がなく、毎日を自由気ままに生きることの好きな少年。実年齢は二十なのだが、とある事件に巻き込まれ死亡。それを胡散臭い天使により転生。ラノベのことをある程度知っていて最初その話が出てきたときは、冗談だと思っていた。鋭い洞察力と観察力をもっていて恋愛相談以外なら頼れる存在。使用ISはオーズ。オーズに使用するメダルは専用のケースにセットされていて、映司の意思で場所が遠くてもメダルが転送される。オーズドライバーは腰のホルダーにセットされていて変身時にはそこから取って変身する

オーズ

天使が用意した映司の専用機。フル・スキン 全身装甲タイプで、メダルを付け替えることで様々な姿に変わり闘う

メダル

通常はどんなものにも耐えられるケースの中にしまわれていて、映司の腕輪を介して繋がっている。映司の持っているメダルは紫のメダルを抜いた全て。

決闘とカンと天使もどき（前書き）

短い・・・

決闘とカンと天使もどき

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

俺たちのクラスでは今、クラス対抗戦にでるクラス代表を決めている最中

それに真っ先に推薦されたのは世にも珍しい世界に二人しかいないISを動かせられる男の一人、織斑一夏だった

「お、俺!?!」

自分が推薦されて驚く一夏
しかし、心配するな一夏

「私は、鷹代くんがいいと思います!」

そりゃそうだな、世の中にはISを動かせらる男は二人
その二人に期待しないのは無理だろうからな
すでに諦めモードの俺は腹くくるかと思っっていると

「待つてください!納得がいきませんわ!」

パンツと机を叩いて立ち上がるセシリア・オルコット
クラス代表を代わってくれるならありがたい

「そのような選出は認められません!大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ!わたくしに、セシリア・オルコットにそのような侮辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

これが女尊男卑ってやつなのか？

思いつきり悪口なんですけど

とりあえず耳塞いどこ

耳を塞いでしばらくするとセシリア・オルコットが何かを喋った瞬間、一夏が立ち上がる

なんだ？と耳から手をどけると

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

クラス代表の話題はどうした

なんだかセシリア・オルコットはその言葉にわなわなしてるけど、なんでこうなったかわからない

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

たった数秒耳を塞いでただけなのに話がヤバい方向にいつてない？

「決闘ですわ！」

なっ！？どうしてこうなったる！？

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

一夏も一夏で勝手に決闘を了承する

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い
え、奴隷にしますわよ」

「悔るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

こうしてセシリア・オルコットvs一夏の決闘が行われることになった

「一夏。頑張れよ」

一応友人からエールを送る
すると

「あなたもわたくしと勝負しますのよ」

とんだ迷惑だ

授業後、一夏は机の上にぐったりうなだれていた

「大丈夫か〜一夏〜」

一応声をかける

「ああ、織斑くんに鷹代くん。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

副担任の山田先生が書類を片手に立っていた
なんだ？

「えっとですね。寮の部屋が決まりました」

そう言っつて俺たちに部屋番号の紙とキーをよこす山田先生だった

そのあと、一夏と山田先生は何か喋っていた荷物もその部屋に置いてあるらしいけど、俺は気にすることなく1026室へ向かった
今さらだが、俺の荷物つてあつたっけ?と思う

部屋の鍵を開けて中に入ると大きなカバンが1つとビジネスマンが持ち運ぶようなカバンが1つ床に置いてあつた
ひらがなで鷹代映司と書かれた名札付きで

「あの天使もどきに次会つたら一発殴ろう」

俺はすぐにその恥ずかしい名札を取ってゴミ箱に捨てた後、ビジネスマン風のカバンを開けた

中には赤・青・黄・緑の他7つのジュース缶が入っていた

俺はその中から1つ選んだ

側面にはバツタカンと書かれていた

俺はそれのプルトップを開けるとバツタカンが跳び跳ね変形した

「やっぱりカンドロイドか・・・」

変形したそれを机の上に置く

俺は再び開いたカバンの方を向いているいろ探る

「・・・鷹代映司くん?」

この声は今一番殴りたい奴の声だ

「・・・」

『無視するのやめてください・・・訊いてます?』

「・・・」

『あつもしかして名札のことでした?どうでしたかあー 閉じな
いでください!お願いします!』

うるさいバツタカンを待機状態にしようとしたが相手の必死の叫び
に待機状態にするのをやめた

「一体なんの用だ」

カンドロイドが入っていたカバンを閉じ、大きいカバンのファスナ
ーを開く

中には着替えの他さまざま生活必需品が入っていた
その中に電子ロックされたケースがあった

『コアメダルが入ったそのケースについての話です』

「なに?」

俺と金ドリと専用機

『そのケースはこの世界の技術のどれをもつてしても壊すことのできないようにしてあります。メダルはそれほど重要なものなのでよ』

あの天使もどきはそう言つて別の空間からバツタカンに指示を出す指示を受けたバツタカンは床を跳び跳ね俺の肩に乗る

ケースの中は左右縦四列横三列にタカ・クジャク・コンドル・ライオン・トラ・チーター・クワガタ・カマキリ・バツタ・サイ・ゴリラ・ゾウ・シャチ・ウナギ・タコ・コブラ・カメ・ワニとメダルが並んでいた

「これをどうやって使うんだ？」

さすがに持ち歩くと危険だ

落とすと変身できなくなるし、置いておくと盗まれるかもしれない

『そのケースは今電源を切っている腕輪と伝導しています。腕輪はあなたの意思を感じてメダルを転送させます。それに防犯対策にはカンドロイドがありますしそこに置いていつでも大丈夫じゃないんでしょっか』

ならいつか

俺はケースを閉じ腕輪を起動させる

その信号を受け取ったケースは自動的に電子ロックされた

『あと、現在輸送中ですがオーズ専用の武器も近頃到着します。—

週間後の決闘には間に合いませんが』

オーズ専用の武器か・・・つまり、あれか
バツカンを待機状態に戻してカバンに閉まった
なんだか閉めちゃらめーとか聞こえたが無視した
そして、時計を見ると時刻はちょうど夕食の時間だった
夕食を食べに一年用の食堂に向かうことにした
部屋を出ると隣の部屋に女子が密集していて俺の姿を見つけた瞬間、
織斑さんの部屋の隣は鷹代さんの部屋！いい情報を手に入れたわ！
とかいろいろ言っていた

午前八時

俺は健康的な朝を迎えて一年用の食堂で朝食を食べていた
今日の朝食の料理は蕎麦二十段重ねだ
すでに半分以上をたいらげていた

「やつぱ蕎麦が一番！」

ちなみに、俺は現在一人席
みんな俺の食べてる量に若干引き気味のご様子だからだ
まあ、俺は気にしないけど
一夏といえば現在ポニーテールの同居人＋女子生徒三名
あと、一人誰か入れば席は完全に埋まる状態だったがそこに行く気
にはならなかった

そんなことを考えていると、蕎麦を完食してしまった
トレイは四つほどあるので席を一回往復することになった
そして、そこで不運な出来事が起きた

「あつ、・・・」

同じくトレイを返却するセシリア・オルコットと鉢合わせしたのだ
昨日なぜか俺まで勝負の相手にされて俺と一夏とセシリア・オルコ
ットの間にはちょっととした溝があるから気まずい

「お、おはよう」

挨拶は礼儀だ

気まずくてもやる

しかし、

「・・・」

完全にスルーされた

「おい！待てよ！セシリア・オルコット！」

セシリア・オルコットの後ろを追いかける俺

「イギリス人は挨拶もできないのか！」

つい先走ってしまった

その言葉を聞いてセシリア・オルコットは歩みを止める

「あなたがたはそうやってわたくしの祖国を侮辱するのがお好きな
ようですね！！」

完全にお怒りのセシリア・オルコットさん

まあ昨日一夏にあんなこと言われてるからな

「すまん」

「一応侮辱したことに謝ると」

「あなたは彼とは違ってすぐに謝るのですね」

なぜかジト目で見られる

「まあ、悪かったのは俺だったからな。それよりセシリア・オルコット。なんで俺を無視した？」

「あなたは敵に向かって気安く話しかけます？」

「しないな。だけど、それはお前と俺が敵同士の場合だろ。俺はお前を敵とは思っていない」

「あら、わたくしは少なくともあなた方を敵だと思っと思っていますがなにか？」

こりゃダメだな

せめてセシリア・オルコットの怒りを静めて和解しようとしたんだが

「それではわたくしはこれで」

そう言ってさっさとどこかへ行ってしまおうセシリア・オルコットだった

とある放課中に一夏の専用機が用意されることがわかったあとの休み時間

セシリア・オルコットは俺たちの席の前にまた現れた

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとはおもっていませんでしたよけど」

本当に安心してんのか？と率直に思う俺だが

「まあ？一応勝負はみえていますけど？さすがにフェアではありませんものね」

もう勝った気であるセシリア・オルコットだがまあ、それが普通かと俺は思うが一夏は頭の上に？マークを浮かべ

「？なんで？」

その疑問に俺は説明した

「一夏。お前が相手にするのは代表候補生だぞ。その国に選ばれた奴が訓練機みたいな大量生産されてるISを使うわけないだろ」

「じゃあセシリアは専用機持ちなのか？」

「その通りですわ」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったただけだけど。どうすげーのかはわからないが。それより映司。お前もISは専用機なのか？」

あつ、そういえば適当にオーズで頼むっていったけどあれはこの世界でISと呼べるのか？

一応あの天使もどきはこの世界の人からはISとして認識されるらしいが……

「一応……な」

歯切れの悪い返事だと自分でも思う

「そうですか。あなたも専用機ですか。まあ、勝つのはわたくしですが。」

そう言い残してその場を去っていったセシリア・オルコットだった

「箒」

「……」

「篠ノ之さん、飯食いにいこうぜ」

一夏が昨日言っていた幼なじみ篠ノ之箒に話しかける
珍しいな

俺は二人の邪魔にならないように静かにその場をあとにした

「隣空いてるな」

そうやって俺は昼食を食べているセシリア・オルコットの隣に座る

「なっ、なぜあなたが許可もなく私の隣の席に座るのですか!？」

当然怒られたが

「寂しそうに飯を食ってたからだよ」

そうやって俺は懐から携帯食品力〇リーメイトを出す

「朝はあれだけ食べていたのにお昼はそれだけですの？」

信じられないものを見る目で見られた不名誉だ

「朝はたくさん食う分、昼と夜は少ないんだよ」

何たって昨日はご飯と漬け物だけでお腹がいっぱいだったからな

「そんなことよりなぜあなたは懲りずにわたくしの前に現れるのですか？」

「当然・・・なんだっけ？」

本来の目的を忘れてしまった

「あなた・・・まさか、」

セシリア・オルコットがなにかに気づいたご様子
しかし、それは違うような気がする

「あなた・・・わたくしのことを好いているのですか？」

うん、違った

「なんで貶されてるのにお前を好きになる？俺はDMか」

「あら、違いますの？残念」

なんかんだセシリア・オルコット
今朝とは態度が全く違うじゃないか

「わたくしは食べ終えましたのでこれにて」

トレイを持って立ち上がり、何かを思い出したように付け足した

「以後わたしくしにつきまとわらないでください。変な噂が流れる
のは嫌なので」

以後俺たちは決闘の日がくるまで一切喋ることはなかった

俺と金下りと専用機（後書き）

次回ぐらいにやっとEISが出る予定です

オーズと決闘と唯一の欲望

「どういうことだ」

「いや、どういふことって言われても・・・」

現在は放課後の剣道場

一夏が篠ノ之箒にISのことを教えてほしいといふのでその特訓をしていたはずだった

ちなみに、俺は単なる興味本意だ

「どうしてここまで弱くなってる!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「・・・中学は何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

「
なおす」

「はい？」

「鍛え直す! IS以前の問題だ!これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる!」

「え。それはちょっと長いような　ていうかISのことをだな」

「だから、それ以前の問題だと言っている!」

はたから見ても篠ノ之箒は一夏に怒ってる
御愁傷様。一夏

「じゃあ俺はこれで」

「映司！どこ行くんだよ！置いて行かないでくれ！」

一夏の悲痛な叫びが聞こえたがここは心を鬼にしてその場をあとにした

一週間後

一夏は特訓？の日々を乗り越え現在はピットで一夏の専用機『白式』（ひまへつぎ）に装着しているところだ

ちなみに、セシリア・オルコットと闘う順番は一夏、俺の順

一夏がセシリア・オルコットに勝てば俺と一夏が対戦するという風になっている

「じゃあ行ってくる」

一夏は箒、織斑先生、山田先生、俺に告げて行った
数十分後

試合終了のブザーとともに一夏がピットに戻ってきた

「……すまん」

開口一番にそれだった

「ISの特性もわからずに使うからだ馬鹿者」

「負け犬」

織斑先生と篠ノ之箒から厳しい批判がとぶ
ちなみに、一夏の負けた理由はIS一巻もしくはアニメで補完して
ください

「さてと、男の名誉挽回といきますか」

「映司、頼んだぞ」

「ああ、任せとけ」

俺はすれ違い様に一夏とハイタッチをしてピットへ行った

「俺も練習の成果を見せますか」

腰からオーズドライバーを出し腰に巻く
すると、腕輪に彫られた3つの輪が輝く
腕輪から勢いよく三枚のコアメダルが翔ぶ
それを掴み、緑のメダルから順にベルトに差し込む

最後にベルトの側面に取り付けられたオースキャナーを掴みメダル
が差し込まれた部分オーカテドラルを傾け、それにスキャナーを通す

「変身」

《タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ》

奇妙な歌が流れた後、フル・スキン全身装甲型のIS、上下三色のオーズが現れた

「さていくか」

オーズになった俺はピットを走りだし、ピットから出た
そこには空中で待機しているセシリア・オルコットが待っていた

（あれがセシリア・オルコットの専用機『ブルーティアーズ』か・
・）

「・・・」

「物思いにふけるのもいいが俺との試合を忘れるなよ」

その声が届いたらしくこちらを見た

「随分と個性的なISですわね」

「開口一番がそれかよ」

そう言っつて構える

「いきますわ！」

セシリア・オルコットの細い青いものが四つ舞い、レーザーを放つ
それを全て避ける

そして、すぐにメダルを入れ換える

《クワガタ・ウナギ・ゾウ！》

全くもって異質な亜種コンボだな

「なっ！？武装が変わった！？」

驚くセシリア・オルコットを無視してウナギウィップをセシリア・オルコットの『ミサイル弾道型』のブルーティアーズを太股ごと巻き付ける

「くっ、この！」

巻き付かれたウィップに四苦八苦しているとセシリア・オルコットが操るブルーティアーズを一機を破壊した

「なっ！？」

ブルーティアーズがレーザーを放とうとする

しかし、クワガタヘッドをブルーティアーズに向かって電流を飛ばす電流を浴びたブルーティアーズが誤作動を起こしてレーザーが発射されない

その際に巻き付けたウナギウィップにもたれ、ブルーティアーズのところまで跳びゾウレグでブルーティアーズを思いつきり蹴る
ブルーティアーズはアリーナの端に飛ばされて破壊される

「くっ、なら！」

スターライトmk?を構えて撃とうとする
しかし、

「ウナギウィップは相手に巻き付かせるだけだと思ふなよ！」

ウナギウィップから電流がセシリア・オルコットに向かって放たれる

「くっくっくっ……!!」

苦しむセシリア・オルコットをよそにさらに、一機破壊する

「これでラストだ!!」

サーカスでよくある空中ブランコから翔ぶような感覚でウィップをセシリア・オルコットから離す

そして、両足を揃え、ゾウレッグの上にのし掛かり破壊する
そして、すかさずにメダルを三枚一気に入れ換える

《タカ・トラ・バッタ!タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ!》

再びタトバコンボに切り替える

しかし、後ろではバランスを取り戻したセシリア・オルコットがスターライトmk?を構えて撃つ

しかし、オーズは映司は慌てず再びスキヤナーを通す

《スキヤニングチャージ!》

その瞬間バッタレッグが姿を変える

より飛蝗はったの足に近い形へ

スターライトmk?から放たれたレーザーがオーズに届くよりも先にオーズが大きく翔ぶ

大きな半円を描くようにセシリア・オルコット背後に空中回転し、
そこで両足を揃える

セシリア・オルコットはすぐに後ろを振り返り、スターライトmk?
?を構える

しかし、オーズのキックが速くセシリア・オルコットの前に現れた
赤・黄・緑のリングを通るごとに加速し、いくらレーザーを撃つても
勢いが止まらず、そしてオーズのキックをまともに喰らってしま

った

その瞬間、試合終了するブザーが鳴り響き、オーズはセシリア・オルコットを抱えて大地に降り立った

シールドエネルギーが0でISが閉じたかどうかは知らないがISのスーツ姿になっていた

正直、ISが展開されたままだったら変身を解除しなくなかった
重いから

「んっ」

タトバキックを受けた衝撃で一瞬気を失っていたセシリア・オルコットが目覚めます

「大丈夫か？」

「ええなんとか、それより強いですわね」

セシリア・オルコットは俺の目を見て言った
しかし、

「強くないよ」

当然といえば当然な回答だ

だけど、こんなことを言った理由には、俺が死ぬ前にいた世界で
何度も味わった無力感からきている

俺は何度も本当に大切なものを失っている

だからこそ、特別な力を手に入れた今だからこそ思う

これから作っていくであろう仲間たちを俺の命に代えてでも必ず守
ると

そして、これは始まりだ

俺は今以上に強くなりたい
これがたった1つの俺が死ぬ以前から持つ唯一の欲望だ

シャアアアア

シャワーが流れる音が響き渡る

とある部屋に住むセシリア・オルコットはそのなかで思った

鷹代映司

織斑一夏とはまた違った強さを感じた

何かを失った辛さを抱えてもなお抗う強い瞳

だが、多分それだけでも彼の中にあるものには触れられない気がする

彼をもっと知りたい

ただひたすらシャワーの音だけが中を満たし続けた

オースと決闘と唯一の欲望（後書き）

毎日1話投稿ペースでいっていますが、そろそろ間が空きそうになります

いつの間を空けて投稿するかはわかりませんがそれでもよろしく
お願いします

就任とパーティーと思い出(前書き)

書くのに手間取った

就任とパーティーと思い出

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせる」

4月下旬。俺たちはグラウンドで授業を受けていた
なぜ俺は呼ばれないかって？

理由は簡単、俺のIS・・・オーズは空を飛べないからだ
一応飛べるがあれを使えば体力が尋常じゃないほど持つてかれるから使いたくないし、授業なのに気絶するようなことを起こしたくない

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

展開を急かさせる織斑先生

すると、何か考え始めた一夏に織斑先生が一言

「集中しろ」

あれは次は叩くぞ宣言だ

それを一夏もそれを感じとり右腕を突き出して、俺の腕輪と似たような携帯のガントレットを左手で掴む

というかガントレットと似てる俺の腕輪は一夏と同じガントレットって名乗ればいいのに

そんなことを考えていると一夏とセシリア・オルコットは展開を終えていた

「よし、飛べ」

セシリア・オルコットはすぐさま空を飛んだ

経験もさることながら言われてすぐにISを飛ばすか
それに比べて一夏は・・・

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

まだ飛べずにもたついていた

大丈夫か？こんなんで

その後、一夏は飛べたが急降下と完全停止のさいに完全に失敗し、
グラウンドに穴を開けた

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになった
だろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめる」

集中する一夏

すると、すぐに白式の武装《雪片式型》が現れた
飛行よりマシだなと思う俺

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

まあ、織斑先生は誉めなかったが

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

すると、すぐに《スターライトmk?》が現れた
すごい。一夏より早いな

ここは素直に代表候補生スゲーと思う俺だったが、そのあとの近接
用の武装の展開の遅さは正直、心のなかで合掌するしかなかった

「鷹代。お前もISを展開して武装を出せ」

お次は俺か

腰にオーズドライバーを巻き、すぐに変身した

歌はみんな引いていたが

「ほいつ、と」

変身後、フルスキン全身装甲の俺は最近届いた
新装備、メダジャリバーを片手で出す

「ほう。なかなか早いじゃないか。だが、お前がISの展開中に流
れる歌を止める」

「あのあれは俺のISの根本に部分に関わるんで無理です」

歌のことを指摘されたが、さすがにこれは織斑先生の頼みであって

もダメだというか無理

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏が俺に手伝ってくれと言いたそうな目をしたが自業自得だと目で送り、篠ノ之箒かセシリア・オルコットに手伝ってもらえと思っただが二人はもういなかった

授業が始まる前、織斑先生に荷物を総合事務受付で預かっていると
言われた

というわけで現在に俺は総合事務受付に来ていた

総合事務受付に来ると一人の少女がいた

低めの背でツインテールの少女だ

何か話しているようだ
が他人の話を無断で聞くような野暮なことはしない

「あの鷹代映司宛に配達物が来てるって聞いたんですけど」

「はい。これですね」

よくある小さい段ボールを受け取る

ちよつと中身を確認するため受付所近くのベンチに座り開ける

ISのオーズ関連か何かかと思うと同時にそういうものは最初から荷物の中には詰めておけよ心のなかで愚痴った

中を開けると、iPad（最新版）とトランプが出てきた

「・・・」

一瞬、言葉をなくした

（いやいやいやいや待つんだ俺よ。多分これはiPadで情報収集とかトランプは一人の時間をまぎらわせるためなんだ！そして、これはフェイク！底に最重要機密みたいなものがあるはずだ！）

iPadをどかし、段ボールの底をあさる

出てきたのはボードゲームの人生ゲームだった

「思いつきり娯楽品だけ送ってきてるじゃねーか！！」

そんな絶叫がIS学園に響き渡った

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとっ！」

「おめでと〜！」

ぱん、ぱんぱーん

クラッカーが乱射されるが、一夏は頭に乗る紙テープ以上に重い何かをかんじているかもしれない

現在、織斑一夏クラス代表就任パーティーの最中

場所は寮の食堂。時間は夕食あとの自由時間

メンバーは一組全員

みなそれぞれ思い思いの言葉を口にする
その大半がこのクラスで良かったが

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

一夏以外盛り上がる

「あ、私は二年のまゆずみかおるこ黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。
はいこれ名刺」

名刺を渡されたが正直言おうほしくない

「ではでは織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ〜！」

ボイスレコーダーをずっと一夏に向ける

「えーと・・・」

「まあ、なんとかがんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

「じゃあまあ、適当にねっ造しておくからいいとして」

なんか今聞き捨てならない単語が聞こえたような

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

セシリア・オルコットの番のようだ

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

セシリア・オルコットがちょっと話始めたら黛薫子はそう言った

「最後まで話を聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。・・・よし、映司君に惚れたからってことにしよう」

なぜ俺の名前がここで上がる？

「なっ、な、ななっ・・・!？」

顔を真っ赤にしているが大丈夫か？

まあ、しょうがないかあんなこと言われたらだからと言って誤解させたまま終わらせるつもりもないが

「冗談はそのくらいにしてくださいよ。先輩」

一応クラスメートだ

助けなければな

「セシリア・オルコットが俺のことを好きかわけないだろ」

「だけど、食堂で一緒にセシリアちゃんにご飯を食べてたって目撃証言があるんだけど」

「たまたまセシリア・オルコットと会ったから一緒ににご飯を食べただけだ」

「まあ、そこもねつ造をしておくとして写真撮るから。とりあえず三人並んでね」

というわけで何気なく一夏を真ん中にしてセシリア・オルコットと俺は並ぶ

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと・・・2？」

「ぶー、74、375でしたー」

なんだよそれ

パシャッとデジカメのシャッターが切られる・・・が

「全員写ったな」

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

他の女子生徒たちがセシリア・オルコットを丸め込むようなことを言うが、俺たちにはよく分からなかった
その後、十時までパーティーは続いた
一夏はボロボロになっていたが大丈夫か？

「あの、映司さん」

「なんだ？セシリア・オルコット」

「そのわたくしの呼び名がいつもフルネームなのはなぜなのですか
」？」

「なら、俺はお前を何て呼べばいいんだ？」

「じゃ、じゃあセシリアとお呼びくださいませ」

「そうか、じゃあセシリア」

「はい！」

名前呼んだぐらいで大声出すなよ

「おやすみ」

「は、はい」

こうして夜は更けていった

転入生とクラス対抗と中国少女（前書き）

新たなヒロイン参上

転入生とクラス対抗と中国少女

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？この時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

そんなことを言うセシリアの背後から

「みんなおはよう」

「え、映司さん!？」

俺は現れたというか大きな声を出すな
耳に響く

「い、いつの間に真後ろに……」

「悪いか、影が薄くて」

朝一番に呼び出されてただでさえ眠いのには傷つくようなことを言っ

「いえ、そんなことは……それよりそれはなんですか？」

セシリアが俺の持つビジネスマン風のカバンに目がいく

「俺宛のカバンだよ」

そう言って机の上にカバンを置いて開ける

「いいのか？そんなに簡単に開けて」

「一夏が心配そうに言うが」

「大丈夫だ。中には防犯用の物しか入っていない」

天使もどきに頼んでおいたカンドロイドが七つ入っているだけだからな

「なんですのこれ？」

「ジューズ缶に見えるけど」

他の女子もみんな集まる

「なにこれ？」「ジューズ缶みたいだね」「なんでそんなものをカバンに詰めるの？」などなどいろいろ言っている

「鷹代くん。緑のジューズ缶が光ってるよ」

近くの女子に指摘され、バツタカンを見ると確かに光ってる

カチャ

迷わずバツタカンを取り出しプルトップを開ける

その瞬間、俺の周りのみんなが下がる

俺はブルブル震えるカンドロイドを持ったまま周りの状況を見て、
涙腺が緩む感じがした

カンドロイドを掴んだ手を広げると、例のごとく変形した

「・・・メッセージ、再生」

あまり元気がない声で変形したバツタカンドロイドに命令する

その声を聞いてしばらくの間が空いた後、聞き覚えのある声が聞こえてくる

『映司くん。おひさ〜』

！？

天使もどきが何かおかしい、そう感じたのはこのときだった

『ねえ、ねえ、てんちゃん。何してるの？』

おい、どういうことだ

なんか知らない声まで入ってるぞ!?

しかし、会話は続く

『ふむふむ、てんちゃんが前々から言ってた。タカタカにメッセージか・・・よし、束ちゃんも張り切っちゃうぞ〜』

「~~~~~!?!?」「~~~~~」

周りのみんなも驚く

それでもメッセージは続く

いろいろ言った後、最後にと天使もどきが言う

『じゃあ映司くん、がんばってハーレムを』

言い終わる前にバツタカンを閉じてカバンの中に入れ閉める

「・・・」

クラスに沈黙の時間が訪れる

そして、みんな何もなかったようにそれぞれの話題を話始める
ちなみに、俺と一夏、セシリアはというと

「中国の代表候補生？」

「ああ」

さっきよく聞こえなかったがそんな内容だったのか

「で、一夏はそいつが気になるのか？」

「まあな」

「今のお前に女子を気にしている余裕があるか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう！ああ、相手ならわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでまだわたくしと映司さんと一夏さんだけなのでから」

なぜか『だけ』を強調していたがなぜだろう

ちなみに、セシリアには俺から一夏に訓練を頼むと言っておいた条件として一日どこかに付き合わされることになったが

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていたいただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

セシリア、篠ノ之箒、クラスメートが口々に好きなことを言う俺としても一夏の訓練に参加して絶対にクラス対抗戦で勝てる実力をつけさせたいと思うが生憎用事がクラス対抗戦の終わりまで入っ
ていて付き合えそうにない
すまん

「織斑くん、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っているのクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「おう」

確かに現在、専用機持ちをクラス代表にしたクラスは一組と四組

「ただ、油断は禁物だな
なんたって一夏はまだ初心者だからな
そう思ったあと、ついに眠気にやられ眠る映司だった
そして、映司の知らないところで物語は進んだ

「その情報、古いよ」

教室の入り口からふと声が聞こえた
俺にとってはすげえ聞いた覚えのある声だ

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で
きないから」

腕を組み、片膝を立ててドアに持たれてるのは……

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音^{ファン・リンイン}。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

おおやっ普通に喋った。なんださっきの気取ったしゃべり方は。

軽く引いたぞ。

「おい」

「なによ!？」

バシッ！聞き返した鈴に出席簿打撃が入った
鬼教官の登場である

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴、完全に千冬姉にビビっている。こいつ、昔から千冬姉苦手だからな。なんでか知らんが。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏!」

なんで俺が逃げるんだよ

「さっさと戻れ」

「は、はいっ!」

二組へ向かって猛ダッシュ。うん、昔のままの鈴だな。しかしなんでアイツは格好つけてやってきたんだ？高校デビューか？

そう思った俺は
特に気にすることはなかった

「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだな？」

そのほか、クラスメイトから質問の集中砲火。ああ、馬鹿・・・
バシンバシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿ども」

その後、いつの間にか寝ていた映司も千冬姉に一発もらった

転入生とクラス対抗と中国少女（後書き）

今回の話の中で映司とセシリアが一日デートするということが決定しています

オリジナルストーリーとしてこの作品のいつやるか不明ですが、デートする舞台ぐらいは整えておいたほうがいいと思ひまして・・・
新たなヒロイン2人登場までにデートする舞台の募集をしたいと思ひます

ぜひここで！という人はどしどし感想などでリクエストしてください
P・S・この小説のメインヒロインはセシリアではありません。そのときの話に応じたヒロインがメインになります。だけど、やっぱりセシリア分が多いかもしれせん

理不尽と異変と強制（前書き）

千冬の部屋の状況は勝手に書かせていただきました

理不尽と異変と強制

「理不尽すぎる」

教室で俺はそう呟く

朝一番に織斑先生に呼ばれたと思ったら荷物を渡された
それはいい

しかし、それ以上に俺を疲れさせたのは織斑先生の言ったことだ

「ついでに部屋の掃除も頼む。拒否権はないぞ」

という訳で朝一番でまだ眠気が抜けない体で織斑先生の部屋を掃除
することに

その後、強制的に朝飯を作らされ、味は微妙とか言われて心が折ら
れそうになった

そして、授業中に居眠りで数回叩かれ、心も体もボロボロになっ
ていた

「大丈夫か？映司」

心配した一夏が俺に聞く

「まあ、ギリギリってところだな」

「一夏……」

「んっ、なんだ筈？」

「お前のせいだ！」

唐突に篠ノ之箒が一夏に文句を言う

「なんでだよ……」

仲いいなあいつら

あくびをしながらそう思う

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「映司も一緒に行こうぜ」

一夏から誘われたが、特に断る理由がないので行くことにした

券売機で一夏は日替わりランチ、篠ノ之箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを買っていた

そして、俺は蕎麦の券を連打して五段積みの蕎麦を10枚買った

「あれ？珍しいな。映司が昼飯を食べるなんて」

「朝に無駄な消費があつて腹が減ってるからな」

言葉からも元気が失われていた

「待ってたわよ、一夏!」

いきなり目の前に背の低いツインテールの少女が現れた

「誰?」

あのとき寝てたから今、目の前に道を塞いであからさまに通行の邪魔をしている小柄の少女が誰かわからない

「中国の代表候補生の鳳鈴音だ」
ファン・リンイン

とりあえず名前だけを教えてもらった
鳳鈴音ね。覚えておくか

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

すると、一夏が鳳鈴音のお盆に乗っていたラーメンを見て

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ!大体、アンタを待ってたんでしょ!が!なんで早く来ないのよ!」

なんで早く来ないといけないんだよという顔を一夏がしていた
一夏が食券をおばちゃんに渡したあと、鳳鈴音と話始めた
密かに俺は聞くことにした

「映司さん。あちらの方に興味をお持ちなのですか？」

トレイを持っているセシリアがそんなことを聞く

「まあな」

強いかどうかだけど

「・・・」

なぜだ？セシリアの目に光がない

目の奥の種がパリーンと割れて、ものすごい戦闘力をあげる人みたいに

「セ、セシリアさん・・・？」

問いかけるが無言のまま一夏たちの席に向かっていった

若干小さな声で「映司さんは背の小さい方が好き、背の小さい方が好き、小さい方が好き・・・」

何かものすごい誤解生んでないか？

そう密かに戦慄を覚える俺だった

その後、鳳鈴音は一夏の二人目の幼馴染みだということが判明した

放課後、一夏たちは第三アリーナで訓練をしていた。セシリアが一夏の訓練相手をするはずだったが篠ノ之箒が学園に訓練用IS『打鉄』の利用申請をしてセシリアと共に一夏の訓練をすることになっていた。そして、様子見をしに来た俺はその場を後にした。

「ん？鳳鈴音か？」

さっき俺が出ていったアリーナへ向かってくる中国の代表候補生、鳳鈴音の姿を見かけた。

「アンタ、一夏の友人の・・・」

「鷹代映司だ」

昼休みのとき一応名乗ったけどやっぱり忘れられたか。

「一夏なら。ISの訓練中だぞ。邪魔したくなかったら後で行け」

「わ、わかってるわよ!」

「んじゃ俺はこれで」

「アンタどこ行くの?」

「学園の巡回だ」

「アンタ風紀委員かなんか?」

「ちげーよ。ただ自主的に動いてるだけだ」

「ふーん。・・・そうだ！」

何かとてつもなくいやな予感が

鳳鈴音は俺に近づいて肩を掴んで言った

「面白そうだから。あたしも連れていきなさい！」

予想的中！

クズと感電と共闘（前書き）

クズヤミーが参戦

あっさりやられるけど

クスと感電と共闘

「ここか？」

IS学園の中にある広場のような場所に俺たちは来た

「ここで何やるの？」

鳳鈴音が聞く

「知らん。俺は指定された場所に来ただけだ」

そう言つてバッタカンのプルトップを開ける

バッタカンはすぐに変形した

「何それ？」

バッタカンを不思議そうに見る鳳鈴音

この反応は以外と嬉しかったりする

相手が知らないことを自分だけが知っていることを・・・俺、以外と歪んでる？

「おい、言われた場所に来たぞ」

『はいはい。こちらからもバッチリ見えますよ』

突然バッタカンから声が出たことに驚く鳳鈴音

しかし、構っている暇はない

「どうだ、反応は？」

『ビンビンありますね・・・もう侵入されてるんじゃないんですか？』

「侵入？」

鳳鈴音がその単語を聞いてピクリと反応する
そして、俺は何かを感じた

「そうか・・・鳳鈴音、ISを部分展開しろ」

「アンタこそ・・・、囲まれたわよ」

お互いに広場の木々の部分に集中する
何かの気配を感じたのはそこからだ

「なら全員倒すまでだ」

映司の腕輪に掘られた模様が黄色く光る。すると、映司の両腕がオーズのトラアームになり、手にはメダジャリバーが握られている
ガサガサッと草むらからそれが現れる

「って、何あれ!？」

出てきたのはシルエットが人に似ているだけで身体中を中途半端に包帯で巻き、顔の半分を円筒形のような物を埋め込んだ
いわゆるくずヤミーだ

「オアアアア」

ふらふらした足取りで近づいてくる

「こいつらは案外弱い。普通のISでも倒せるはずだ」

「あれ人じゃないんだよね・・・なら、思いっきりやるわよ!」

お互いにくずヤミーの群れに走り出す

「ハア!」

重さ数十キロあるメダジャリバー軽々と振り回し的確にくずヤミーに切りつける

「くっ、こいつらなんなの!? 殴っても殴っても立ち上がってくる!」

ISを右腕のみ展開してくずヤミーに対応しているが打撃だけではあいつらを倒せない

「お前のISに射撃系の装備はないのか!」

「あるけどこんな場所で使えるわけないでしょ!」

「なら、これを使え!」

メダジャリバーを鳳鈴音の方へ投げる

「な、重い・・・!」

メダジャリバーをを両手で構えているが剣先は震えている

「ハア！」

トラアームからトラクローを展開してくずヤミーの顔の円筒形の部分をトラクローで切り裂く

そこがこの世界のくずヤミーの弱点らしく半分に分かれた銀のメダル、セルメダルになった

「これで・・・どうだー!!」

鳳鈴音もメダジャリバーを巧みに使い、くずヤミーをセルメダルに返還した

「オアアアア」

「オアアアア」

しかし、数は減るところか増える一方

だんだんと広場の中央に追いやられる俺と鳳鈴音

「くっ、多すぎでしょ。こいつら」

確かに、2対数十体はさすがに無理がある
なら、

「鳳鈴音！伏せてろ！」

腕輪の様相が緑色に光る

その瞬間、映司の両腕のトラームが消え、映司の目が緑色に光る
「くらえ！」

自分の内側から周りに向かって放つ感じで力を使う
限定使用したのはクワガタのコアメダル
それが映司を不運だった

くずヤミーは全員、電流を浴び消滅
映司はクワガタの電流で感電した

「変身、の、と、き、は、何も、なかつ、たの、に、」

感電して言葉がちやんと言えない

「アンタ、大丈夫？」

心配したというより呆れられた目で俺を見る鳳鈴音の姿があった

「はいこれ」

鳳鈴音が自販機で飲み物をくれた

「ありがとう、う」

まだ体が感電して言葉がおかしい

「それにしてもなんなのアイツら」

鳳鈴音がさつきまで戦ったクズヤミーのことを聞いてきた

「さあな、お、れもよく知らない」

「ふーん」

何か腑に落ちないという顔をしていた

「そん、なことよりい、いのか？」

「何が？」

「そろそ、ろ、一夏のく、んれんが終わる頃だけど」

鳳鈴音はそれを聞いてすぐに一夏のいる第三アリーナへ走っていった

「一夏も大変だな。同じ幼馴染みに挟まれて・・・」

映司はこのとき、自分が昔生きていた世界のことを思い出していた

「風・・・」

今は亡き幼馴染み

「体弱いくせによく遊んだな・・・」

俺は寮へ帰ることにした

クズと感電と共闘（後書き）

補足説明

ISのオーズは部分展開はその部位によってさまざまな効果を発揮します

ヘッド部分のコアメダルの展開は目の色がそれに対応するメダルの色に変化。効果はタカなら視力強化など、クワガタは無差別に電流を放つなど

アームを司る部分は腕をオーズ使用時同様の姿へ変化させる。メダルによって肩まで変化するものもある

レッグ部分は体全身を強化する作用があり、バッタなら跳躍力の強化、チーターなら高速移動を可能にする

犬と馬と貸し出し（前書き）

なぜこうなった・・・

犬と馬と貸し出し

一年用の食堂でお茶漬けを食べた後、別にやることがないので寝ることにした

「……！」

「……！」

隣の一夏と篠ノ之箒の部屋が騒がしい
うるさい……眠れない……

疲れた体を無理やり起こして一夏たちの部屋に行く
当然、文句のために

コンコン

「一夏、入るぞ」

ノックしたのでこっちが文句を言われることはないはずだ

ガチャ

ドアを開けるといきなり

「犬に噛まれて死ね！」

修羅場に出くわした

その部屋にいたのは織斑一夏、篠ノ之箒、鳳鈴音だ

しまった

俺はそう素直に思った

犬に噛まれて死ぬ！と叫んだ鳳鈴音は自分の荷物のポストンバックを素早く掴み出入口に駆け寄る

そこで俺の存在に気付き

「アンタなんでこんなところに・・・」

「えっ、いや、俺はその一夏たちの部屋の隣に住んでてな・・・」

「・・・いて」

「はい？」

「どいて」

「わかりました」

鳳鈴音は静かに俺の横を通って廊下に出て行った

「一夏」

「お、おう、なんだ筈」

「馬に蹴られて死ぬ」

俺はこれ以上首を突っ込んだら物理的な意味で死ぬと悟った

自分の部屋

それは唯一の自分の空間

そこでは何をやるうと許され、（法や人として外れるような行動以外）社会に縛られる心を解き放つことができる空間

しかし、その空間に自分以外の人間がいればそれだけで自由な行動に制限がつき、自重しなければなくなる

俺こと鷹代映司は今そのことを身をもって知ることになった

「なんで、お前がいる」

「……」

ベッドの上でうずくまる少女の名前はさっき一夏に犬に噛まれて死ね！と叫んだ鳳鈴音だった

「頼むから返事ぐらいしてくれ」

「……めて」

鳳鈴音が小声で何かを言うが、よく聞き取れない

「あのもう一度言ってくれませんか？」

なぜ敬語になったかはつつこむのをやめてね

「今日、この部屋に泊めて」

「……はい？」

その言葉を聞いて俺は嬉しい！とは思えずどちらかと言うと、俺明

日死ぬかもという不安しかなかった
なぜ死ぬかもって？

泊めてと言われた時、即座に誰の顔が思い浮かんだと思っていやがる
すぐに脳裏に浮かんだのはイギリスの代表候補生、セシリア・オル
コットの昼休みのあの表情だぞ！！

俺の経験上、ああなれば俺の末路は死体確定

つまり、ヤンデレが俺の息の根を止めにくるんだぞ！？

そんな場面を鳳鈴音の一言ですぐに脳裏に浮かび一人部屋の隅で戦
慄の恐怖に怯える

「アンタそんなとこでなにやってるの？」

変質者を見るような目で見られる

とりあえず俺はそんな妄想を頭の隅に追いやり、鳳鈴音と一夏のケ
ンカの経緯を聞くことにした

75

「一夏は馬に蹴られて死んだほうがいいな」

話を聞いて即答した

まさか、料理の腕が上がったら毎日、酢豚を食べさせてあげるとい
う愛の告白をおごってくれと聞き間違えるだなんて心のそこから
馬に蹴られて二度死ね

「まあ、一夏についての事情はもういい。俺にやれることは何一つ
ないからな」

そうそれは幼馴染みとの間の問題だ。俺にはどうすることもできない

い。そして、今問題なのはなぜ俺の部屋に泊まるということだ

「ダメなの？」

ぐはあ！

涙目で視線が上目遣い、これでN○と言う男は、人じゃないしそいつはゲイかもしれない

「あ、赤の他人と一緒に寝たりしたら、ほら、この先の生活に支障をきたすだろ？」

「……」

ごはあ！

ダメだ。この涙目の上目遣いには勝てない

「……今日だけな」

両膝をつけ、うなだれながら言った

「わかればよろしい」

さっきまでの涙は嘘のようだ

(ちくしょおおお……！)

その後、鳳鈴音はシャワーを我が物顔で使い、鳳鈴音がシャワーに入っている間に俺はセシリアへの言い訳を考えていた
一度蘇ったのにまた死ぬのはご勘弁願いたいからな

「何これ？」

今日何度目かの鳳鈴音のなにこれ発言、いちいち数えてないので何回目かは知らない

「む、開かないわね」

鳳鈴音はコアメダルが入ったケースに目をつけてケースをこじ開けようとする

フハハハハハ、あのケースはこの世界の技術力じゃあ開けられないのさ！

何度試してもケースは開かない

業を煮やした鳳鈴音は右腕をISの右腕に変え、力業でケースを開けるどころか破壊しようとする

さすがに、そんなのは見ていられず腕輪の電源を一度切る
すると、ケースは開いた

「メダル？」

鳳鈴音はケースを見て最初にそう言った

ケースに入ったメダルの数々、それに感嘆としているとは思えない単に珍しいか変わった趣味してるなという感じの目にしか見えない

「もういいか？」

ケースを取り上げて鳳鈴音に聞いた

「ねえ」

「なんだ？」

「そのケースに入ったメダルを一枚、あたしに貸してくれない？」

「ダメだ」

「・・・」

「そんなことしてもダメなものはダメだ」

「チツ、」

さすがに、二回もその手に引っ掛かる俺じゃない
こうして俺たちの夜が更けていった

朝方、鳳鈴音はポストンバックを持って映司の部屋を出ようとした
その時

「忘れ物だ」

俺は鳳鈴音にハンカチを渡した

「これ、あたしのじゃあ・・・」

ハンカチを受け取りハンカチの模様を確かめるため広げる
広げたハンカチの中にはライオンのメダルがあった

「絶対返せよ」

「……」

「返事は？」

「ありがとう」

「わかればよろしい」

その後、鳳鈴音は俺の部屋を後にした

そして、その日クラス対抗戦日程表が張り出された

そこには一組のクラス代表織斑一夏対二組のクラス代表鳳鈴音が初戦で当たることになった

犬と馬と貸し出し（後書き）

小説を書いていくうちにこんな展開になりました

- 本当は鈴にライオンのメダルを貸すだけなのに一晩泊めることに・

決して俺はロリコンではありません！

揺れる想いと対抗戦と乱入

あの日から数週間後、セシリアには何もバレルことはなかったが、一夏と鳳鈴音の方はまだギクシャクしていた

俺は一夏の訓練に付き合えない時に、毎日鳳鈴音に愚痴や自慢話を聞かされていた

クラス対抗戦一週間前はえらくお怒りだったが

そして、クラス対抗戦の当日

鳳鈴音はピットで一人いた

ISを装着した腕には黄色のメダルが握られていた

正直、この数週間一夏のことかどうでもよくなる時があった

そのとき頭に思い浮かぶ顔は女子の上目遣いに弱いアイツの顔
好きか嫌いかというところが好きになりかけているそんな感じだった

でも、あたしは一夏のが好き。今更、あのことをなかつたことにしてアイツに乗り換えることは許されない

メダルを強く握り決意する

この試合の後、このメダルを返して終わりにしよう

その終わりにしようとしている相手は鳳鈴音自身もわからなかった

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

俺たちはピットで一夏と鳳鈴音の試合を眺めていた

(鳳鈴音のあのIS・・・『甲龍』だったか？あれの両サイドの非
固定浮遊部位は前に言っていた射撃系統の装備か？それにしてもあ
の形・・・ミサイルやレーザーを撃つようには見えない・・・まさ
か！)

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に二人が動く

ガキインッ！！

瞬時に展開した《雪片式型》クロス・グリッド・ターンが物理的な衝撃ではじき返される。セシリアに習った三次元躍動旋回をこなして鳳鈴音を正面に捉える

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鳳鈴音が手にしている異形の青竜刀をバトンのように回す。両端に刃が付いた青竜刀を角度を変えながら一夏に斬り込む。さらに、高速で回転している分、一夏が剣をさばくのに苦労している

一夏が一度距離を取るため大きく後退しようとする

「甘いつ！！」

鳳鈴音の肩にあるアーマーがスライドして開く

その瞬間、アーマーが光を放ち一夏が何かに殴り飛ばされる

一夏はどうにか体勢を立て直す、鳳鈴音からの攻撃が止まない

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべると

「ぐあっ！」

一夏が地面に打ち付けられる

今の攻撃でダメージも相当受けたな、あれはまずいぞ

ピットでは鳳鈴音の攻撃に篠ノ之箒が「なんだあれは・・・？」と
呟く

第一アリーナの試合がモニター観戦されている廊下でショートカットの緑のスカーフをジーンズからぶら下げる女性が手に持ったメダルを転がせながら呟く

「第三世代機『甲龍』か・・・近接戦闘に長け両肩に装備した『龍砲』で相手を見えない攻撃で混乱させ敵を叩く。私向きのISだが弱いな」

手に持ったメダルを浮かせる

ポケットから携帯を出しどこかへ掛ける

「私だ。良さそうなISはない。もうやってもいいぞ」

その後、女性はアリーナを出ていく

そのすぐ後に遮断シールドを突き破り予定通り始動した

「せいぜい足掻いてな」

おもしろそうにベンチに座り隔離されたアリーナを見る

いきなりだった

俺が賭けで『イグニッション・ブースト瞬時加速』を使用して鈴に奇襲を掛けようとしたとき、それは来た

範囲も威力も桁違いなそれはこちらをロックしてビーム兵器を放つ俺は鈴を抱え間一髪で避けた

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！ 離しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな！ つて馬鹿！ 殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

「だ、大体、どこ触って」

「！来るぞ！」

ビームが連射される

「なんなんだ、こいつ……」

深い灰色のそのISは手が異常に長く、つま先より下まで伸びていた

遮断レベル4に設定されたアリーナの隔壁内を走る映司
その肩にはバツタカンが乗っている

「くそっ！こんな時にクズヤミーの群れよ！」

映司が追うのは数十体のクズヤミーたちタイミングを見計らってか
いきなり現れた

「変身！」

『タカ・トラ・チーター！』

すぐさまオーズに変身

みんなが閉じ込められている中、部分展開だけではクズヤミーを押し
さえきれない

「ハア！ハア！ハア！ハア！ハア！」

チーターで加速しメダジャリバーで的確に切る

運良くクズヤミーは他の生徒のいる場所までは進行していないが、
ここで問題が発生した

「なんだ！？こいつらは！」

篠ノ之箒がなぜかこの場に現れた

「なっ!? 篠ノ之だと!?!」

まだクズヤミーを全員倒してないし数もまだそれなりにいる
専用機持ちでもない篠ノ之箒がクズヤミーの攻撃に耐えられるか
という無理に近い

「オアアアア」

篠ノ之箒に気づいたクズヤミーが襲いかかる

「くそっ!」

『タカ・ウナギ・チーター!』

ウナギウィップを篠ノ之箒に迫るクズヤミーに絡ませ電流を浴びせる

「室内でやるべきじゃないけど・・・」

『トリプルスキヤニングチャージ!』

チーターレッグから煙があがるウナギウィップに大量の電流が流れる

「ハアアアア!」

チーターで一気に通路を駆け、ウナギウィップで狭い範囲を移動し
ながら放電する

さっきまでいたクズヤミーは一体残らずセルメダルに変換した
その横を篠ノ之箒が通りすぎる

「おい! 待て!」

篠ノ之箒は俺の制止を振り切り走っていく

一夏がいきなり現れたISを無人機と過程して本気の一発をぶちこむことを決めたとき

『一夏あつー!』

箒が放送室からマイクを使って叫ぶ

『男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!』

その叫びを聞いた無人機ISは箒の方を向き、ビーム兵器を構える

「くそつ、鈴!」

「わかってるわよ!」

鈴が龍砲を放とうとする
その前に一夏が現れる

「ちよつと、一夏!?!」

「いいから撃て!!--!」

「ああもつつ！どくなっても知らないわよ！」

敵ISのビーム兵器と鈴の龍砲は同時に放たれた

「うおおおおー！」

アリーナと放送室でそれぞれ咆哮する

のびている放送室で司会と解説をしていた女子生徒を抱え、篠ノ之
箒を押し倒す

その瞬間、放送室に熱線が通る

俺は三人に覆い被さる

アリーナでは一夏が零落白夜を発動、無人機ISの右腕を切り落と
し、セシリアのブルー・・ティアーズが無人機ISに止めを刺した

「これで一件落着か・・・」

俺は力なく座り込む

「すまない。私があんなことをしてしまって」

「それを言うなら一夏や織斑先生に言え」

一夏と鳳鈴音がこっちに向かって手を振る

俺もかえそうとしたが俺の目はアリーナに飛び込んだメダルに視線
が注がれ最悪な状況へ俺たちを導いた

「避ける！！一夏、鈴！！」

その後、アリーナは轟音に包まれた

無人と約束と絶体絶命

「ゴーレムが負けたか・・・」

緑のISに包まれた女性はアリーナ内の状況を見て咳く

「第二フェイズスタート」

緑のISの女性がアリーナ内に何かを投げ込む

投げ込まれたそれは一直線に右腕を切り落とされた無人機ISの口
アと融合する

「あとは頼んだよ」

「ええ」

いきなり現れた紫のISの女性は手をアリーナにかざす

「避ける!!一夏、鈴!!」

叫んだと同時にダメ元でウナギウィップを伸ばす

(届け!!)

アリーナに轟音が響く

「いつつ」

「大丈夫か？」

「ああ、なんとかかな」

「何なの！？あれ」

右腕を切り落とされブルー・ティアーズによって身体中が穴だらけなのに動いている

すると、いきなり大量のセルメダルが無人ISを取り囲み無人ISの無くなった右腕の部位に取り付き新たな腕を成形する

さらに、背中から緑色の脚のようなものが生え、無人機の顔の部分が割れ無数の歯が生えているのが見える

まるで機械が生物の部位を無理矢理つけたような生々しい形になったその姿に一夏と鳳鈴音は驚く、そして、俺はそんな二人に言った

「一夏、鈴、二人とも下がれ。あとは俺に任せろ」

「そんなのできるわけないだろ！」

「そうよ！あたしたちも！」

「二人とももうシールドエネルギーが少ないだろ。一夏の場合、もうあの攻撃を繰り返すためのエネルギーはないし」

「」「」「」

「大丈夫だ。二人ともやるべきことはやるぞ」

メダルを入れ替えながら言う

「え、映司……」

鳳鈴音が近寄ってくる

「本当に大丈夫だよね？」

なぜか涙目の上目遣いだが、多分これはゆびきりみたいなものだろうだから、

「もちろんだ」

そう答えるしかない

その後、一夏と鳳鈴音はセシリアと共にアリーナを出た
無人ISに向き直る

オースキャナーをオーカテドラルに通す

『タカ・トラ・チーター！』

お互いに仕掛けるタイミングを待つ

俺は重心を下半身に集中させていつでも走り出せるようにする
アリーナが静寂に包まれる

「……」

最初に動いたのは無人ISだ

巨体に似合わない素早さだがチーターのスピードには勝てない

俺も無人ISに向かって走る
同時にタカの力を使い、相手の小さな動きから全ての行動を読む

(そこだ！)

トラクローを展開してタカアイで見つけたコアメダルのある位置に
的確にトラクローを突っ込む
しかし、

バチイイッ！

コアメダルを守るようにISのコアから電流を浴びせられる

「ぐあああああ！！」

電流をまともに浴びて体が痺れる

そこに無人ISの腕がオーズの脇腹に食い込む

「があああああ！！」

アリーナの端に飛ばされる

「ぐはっ、な、なんだこのダメージ・・・」

(まさか、シールドを貫通した！？)

脇腹からの激痛に耐えながら立ち上がる
オーズが別の行動をとる前に無人ISが動く

「なに！？」

無人ISの口から網目状に糸が発射される
それをトラクローで切り裂く

「こいつ・・・腕力だけじゃない・・・？」

無人ISの放った蜘蛛の糸のようなものを見て言う

(どちらにしても早めに決着^{けり}つけないと)

チーターレッグの機能を使い、無人ISから距離をとりながら円形
状に走る

無人ISの口が開き何かが発射される

発射されたものはアリーナの地表をえぐり取る

(なんだ!?)

しかし、驚く暇はない。次から次へと無人ISの口から塊のような
ものが発射される

走りながらタカアイで無人ISの発射物を見る

(あれ・・・糸を固めて作った塊か!)

糸の塊は威力もさることながら地表に当たった瞬間、周りに拡散す
るものようだ

(だけどあれを作るのに2、3秒のタイムラグが存在する。そして、
その攻撃を繰り出す間、無人機は他の行動をとれない・・・その隙
を突く!)

次々に発射される塊の隙を突くためタイミングを見計らう
そして、そのタイミングは来た

(そこだ!!)

『トリプルスキヤニングチャージ!』

無人ISの前に赤、黄、黄のリングが現れる

「ハアアアアア!!!」

チーターレッグが煙を噴射し、最初のリングに通る寸前に無人IS
の口から糸の塊が発射した

「なっ!?!」

予想ではあと、1秒は溜めてなければ威力がないのにそれを放棄し
たということは

(読まれていた !?)

糸の塊はオーズの下半身に当たるがシールドエネルギーにダメージ
はなかったが、糸の塊が分解してチーターレッグに絡まる

(こいつ最初からチーターレッグを狙って!?)

チーターの加速がなくなり無人ISの前にあつたリングが消える
その瞬間に無人ISがオーズに近づき再生した右腕が襲う

「ごがああああああ!!!」

シールドを貫通する攻撃がオーズの体にクリーンヒットしてアリーナを4、5メートルバウンドなしで飛ばされる

「がはっ、」

身体中の痛みを押さえながら立ち上がるうとするが無人ISは最大出力のビーム兵器を構える

「なっ!?!」

さっきのダメージのせいで避けることさえできずビーム兵器を全身にまともに浴びてしまう

「があああああ!?!」

体から火花が飛び散り仰向けに倒れる

(シールド残量がもうない・・・これじゃあやばい・・・あれを使うしかない)

震えながら立ち上がると無人ISの巨大な右腕でオーズを掴む

ミシミシメキメキ

「うあああ・・・」

抵抗できずただ握り潰される痛みをあげることしかできない
無人機は左腕を構え再び最大出力のビームを撃つためチャージを始める

(ここで・・・死ぬのか?)

再び死を覚悟した映司はビームが発射される瞬間、目を瞑った
しかし、ビームは来ない
目を開くとそこには鳳鈴音がいた

無人と約束と絶体絶命（後書き）

次回、この小説で初めてのコンビです

ライオンとコンボと気づいた想い(前書き)

コンボ登場!

ライオンとコンボと気づいた想い

アリーナを脱出してすぐのことだった
あたしたちはアリーナに向かってくる教師陣に保護され、手当てを
受けていた

「映司、大丈夫かな」

あたしは手の平にあるメダルを見つめていた

「鈴」

振り返るとあたしより怪我をしていた一夏がいた

「お前の持つてるそれって……」

一夏はあたしが握っている映司のメダルを指差して言う

「これ、映司から借りたの。それがどうしたの？」

「鈴、知らないのか？それ、映司が使うISの」

そのあとの言葉を聞いた後、体が勝手に動き気がつけば教師の制止
を振り切りアリーナへ甲龍で飛んでいった

そして、映司の置かれていた状況を見て、また体が動いた
両肩の龍砲を使って映司を捕まえていた腕はびくともしなかったが
左腕のビーム兵器を破壊できた

そして、青竜刀で思いつき斬った

なぜか銀色のメダルが出たがおかげで相手の右手から映司を解放した

そして、映司をつかんでとりあえず逃げる

「……鈴……か？」

虫の息みみたいな映司が喋る

「あんだねえ！自分のISに必要な物を他人に預けるってどうにかしてるんじゃない!？」

映司を引っ張りながら叫ぶ

「お前が……貸して……じゃないか……」

所々声が小さくなってよく聞こえないけど、要はあたしが貸してほしいって言ったからか！

「だったら返すわよ！だから、一緒に逃げるわよ！すぐに教師たち来るから」

アリーナを出ようとしたとき、急に強い力で引っ張られた
引っ張っている招待は無人ISに新しくできた口から蜘蛛糸のような粘着性高いものが足に巻き付けられていて無人ISが首を捻るとアリーナの地表まで落とされた

「くっくっく……」

シールドのおかげで怪我はしてないが衝撃で頭がクラクラする

(くっくっく……どうすれば……)

ゆっくりと近づくと近づく無人IS、まるで仕留めた獲物でゆっくり楽しむかのように
足音がするたび怖くなってくる

(た、助けて 映司！)

思わず思ってしまう。そして、知った。自分の気持ちをこんなときでも一夏じゃなく映司に助けを求めたことを
無人ISの背中の足が嫌な音を立てて大きく開く、あと無人ISとの距離は50メートルもない

(怖いよ 映司！)

手が何かに触れた
見ると息があがっている映司があたしの握っていたというよりあたしが強く握っていたメダルを抜き取っていた

「映司!？」

あたしの前に立ち、黄色のメダルを見せて言う

「約束は守るさ」

その背中は大きくも小さく、強くも弱い感じがした

今の体力でどこまでやれるかわからないけど後ろにいる鳳鈴音のた

めにも倒す！

タカのメダルをライオンのメダルと付け替える

「見せてやる、コンボを！」

『ライオン・トラ・チーター！ラッタ、ラッタ、ラトラーター！』

「はああああああ！！！！」

頭がライオンの鬘のように装飾が変わり、目も青色になる

そして、コンボ時の熱風と光がオーズの足を絡めていた糸を溶かす
さらに、周りの糸も溶かす

無人ISもその光と熱風を浴び、体から数枚メダルが飛び出す

「ハア！」

完全復活したトラクローで二回、三回切り裂く

無人ISは口から糸を吐くがラトラーターのライオンベッドの乱反射により目眩ましをくらい、その場に糸を吐いてもオーズはいない

「ハア！」

無人ISの背中に回ったオーズはトラクローで無人ISに生えたいた足を切り裂く

そのあと、無人ISの背中を蹴ってオーズと無人ISの間に距離を作る

「とどめだ！」

『スキヤニングチャージ!!』

無人ISの前に黄色のリングが3つ現れる

その中を走り抜けるオーズに無人ISは前回も使った糸を吐く。しかし、ライオンベッドの乱反射により照準が会わず糸はあらぬ方向へ飛び、ラトラーターは強化したトラクローで無人ISをクロス切りする

「ハアアアアア!!!」

無人ISは派手に爆発した

「ハア、ハア、ハア」

構えを解いてその場に立ち尽くす俺
無人機は力なく倒れ、メダルによって変化した部分も元の状態に戻った

「終わった・・・」

気を緩めると足がふらついた
頭もボーッとしている

(無茶しすぎたな・・・)

「映司！大丈夫!？」

鳳鈴音が近寄ってくる

「まあな。それより先生たち呼んできてくれ。早く事件の收拾をつ

けてもらわないと」

「映司はどうするの?」

「あれだけの強敵と闘ったんだ。休ませてくれ」

「うん。わかった。すぐに手当てもするから待ってなさい!」

そう言っアリーナをあとにする

オーカテドラルを斜めから横の状態にする

オーズは消え、鷹代映司に戻る

その瞬間、操り人形の糸が切れたようにその場に倒れた

(コンボの……ひろ……うもだ……けど……身体中……
血まみれ……で疲れた)

「おい。ここで寝られるのは困るんだが」

地面に倒れていた俺を今来た織斑先生が担ぎ上げる

「お……りむ……らせ……んせい?」

「喋るな。死にたいのか?」

まさか、織斑先生に担がれるとは、生きるっていいことだな

「織斑先生、待ってください……って、鷹代くん!? どうしたの!? その血は!?!」

「山田先生。鷹代を保健室へ連れていくのを手伝ってください」

「えっ、でも、これは保健室よりも病院へ連れて行った方が・・・」
「外傷が酷いだけで命に別状はないはずです。それにこの程度でこいつが死ぬはずがない」

ひどい理由だ

「わ、わかりました。じゃあ鷹代くんお邪魔します」

さっきまでの死闘をなんだと思ってる
そう思っても傷が痛くて口にできない。まず、する気もないが
こうして俺は織斑先生と山田先生によって保健室まで連れていって
もらった

人の居なくなつたアリーナの上空を紫のISが手をかざす
すると、落ちているセルメダルが独りでに紫のISの方へ飛ぶ
その集まるセルメダルを体に回収しながら地面に落ちているエック
ス字に割れた蜘蛛の模様のメダルを見る

「やはり、コンボのエネルギーには耐えなれないか・・・」

セルメダルを回収しきつたあと、ゴーレムも回収しようかと思った
がIS学園の教師陣が迫ってきているので放棄することにした

ライオンとコンボと気づいた想い（後書き）

この小説を読んでいただいているみなさんにアンケートをとりたい
と思います

この小説でバースを出すべきかどうかについてです

出すべきという人は登場時期の希望を添えて感想ください

ちなみに、出す場合は一応バースもISの部類になり変身者が女性
になります（出すべきという人はこの方の名前や設定を付けていた
だけると嬉しいです）

修羅場とレベル4と一致

目が覚めた

唐突にだ

場所は保健室らしい

なぜらしいか、それは俺が途中で意識を失ったからだ
よってここが正確にどこか、なぜ鳳鈴音が鼻先三センチに顔を近づ
けているのかわからない

「怪我人に落書きか？」

「開口一番で言うことそれ？」

興が冷めたといわんばかりに顔から距離を離す

俺は起き上がるうとしたが身体中が痛んで起き上がれない

見ると手から額から腰や下半身の先まで包帯まきだ

「なんじゃこらや」

「アンタ、なんであんなにポロポロだったのに闘ったの？他の人にも協力してもらえばアンタも怪我が軽くなっただかもしれないのに」

まるで息子を叱ってるようだぞ

「まあ、確かにそういうこともできたけど、なぜかあれは俺が決めなきゃいけない気がしたんだ」

そう同じ力を有している者同士が決着を着けなくては

「それはそうと、お前、一夏のことはいいいのか？」

一夏の鈍感さは今に始まったわけじゃないが、さすがにあの事を勘違いしたままの訳にはいかないだろう

「そのことはもういいの」

「なんで？」

「なんでもよ。(それに新しい相手もできたし)」

最後の方はボソボソっとなにか聞こえない

「どうした？」

「なんでもない！」

いきなり叫ばれたので耳が痛い

「ねえ、映司」

「なんだ？」

「アリーナであたしのこと、鈴って呼んだしょ」

「嫌だったか？」

「ううん。というかこれからそれで呼んで」

「わかった」

うーん。どうしても知り合い止まりの人にはフルネームで呼んでしまふ。直した方がいいか？

「映司、そ、それとね」

「ん？」

意を決したように真っ赤な顔で告げる

「あ、あたし・・・アンタの」

「映司さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て
あら？」

セシリアが保健室に入ってきた

「どうして1組のクラスメイトではない、あなたがいるんですか！」

「お互いアリーナで最後まで闘った者同士だらよ。それにアンタも
どうしているの？」

「わたくしはクラスメートの一人としてここに来ていますわ！」

なんかこいつら段々ヒートアップしてないか？

正直、間にいたくない・・・

「だいたい転校して来て日が浅いのに映司さんに近づきすぎですわ
！」

「ふん！あたしはアンタとはちがって対抗戦の始まる前の数週間、毎日、映司と一緒に居たのよ！それにアタシは映司と一晩一緒に寝たのよ！どう？これで近くにいてもなんの問題もないでしょ！」

ゲツ、なにバラしてるんだ！？

やばい！セシリアの瞳があああー！！

「ウフフフフ、映司さんどういうことですか・・・しっかりと説明してください」

痛むからだを無視して土下座する

「本当にすいません。上目遣いに負けました」

「まあ、その話は今週末のデートで詳しく教えてくださいね」

詳しくの部分を強調していたので怖い・・・

「ちよっ、ちよっと！デートってなに！？アタシは聞いてないわよ！？」

聞いているはずないもんな。言っていないから

「あら知りませんか？映司さんはデートをあなたではなくわたくしを誘ってききましたの。映司さんがですわ」

また、強調した

鈴木も不穏な空気を醸し出す

ヤダ、もうこの間に居たくない

IS学園地下15メートルにレベル4という施設が存在する
そこは破損したISを解析する施設
そこで織斑千冬はいつも以上に冷たい視線で今回起きた事件の映像を眺めていた

今回、事件を起こしたISは無人機とのことだった
しかし、それ以上に不思議だったのが一夏によって機能停止したISが再び動いたことだ

再起動直前に円形状のコインのようなものが無人機に取り込まれたようだが、あれは似すぎていた

鷹代映司の持つコアメダルに

(この一致は何を意味する?)

修羅場とレベル4と一致(後書き)

今回はブロンドとシルバーが転校してきます

ブロードと眼帯と溢れる感情

六月頭。日曜日

前日のセシリアとのデートの疲れから起きた時間が10時過ぎだった

「あー、疲れた」

デート中、セシリアに鈴とどういふ関係か迫られ精神は体より疲れた

一夏は今日友達の家に行っている

俺はこの世界で知り合いはいないのでなにもすることがない

「……また寝るか」

こうして俺は丸1日寝ることと休日は過ぎるはずだった

夕食時に俺は起こされた

「映司、アンタどれだけ寝てるの?」

起きると目の前に鈴がいた

「……ちよつと待て。俺はキッチンと戸締まりしたはずだぞ。どう

やって入ってきた」

「別にそんなことどうでもいいでしょ」

どうでもよくない。もしこの方法が他の生徒にもバレていたら俺の
プライベートは全て筒抜けになってしまう

「ねえ、映司。ご飯食べにいこ」

「お前、それだけのために俺の部屋に来たのか？」

「捨てられた犬をかわいそうと思うぐらいの優しさは持ち合わせているわよ」

「はいはい」

こうして俺は鈴と食堂で夕食を食べた

ちなみに、途中のほんさんたちと合流して一緒にご飯を食べた

「織斑くん、鷹代くん。ちょっといいですか？」

朝、俺と一夏は山田先生に呼ばれた

「いきなりですけど、織斑くんと鷹代くんじゃんけんをしてくれませんか？」

「「？」」

疑問符をあげる二人に山田先生が説明する

「あの、詳しい理由はあとでいいいますが、きっといいことですから」

「は、はあ」

「じ、じゃあ映司やるぞ」

「ジャンケンポン！」

一夏 グー

俺 パー

俺の勝ちだ

「鷹代くんが勝ちましたね。わかりました。じゃあまたあとで！」

山田先生が走り去っていった

今日から本格的にISの実戦訓練が開始されるらしい

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「え・・・」

「えええええっ!?!」

同じクラスに転校生が二人？

この学園はどうゆう風に転校生を分散させてるんだ？

この疑問の答えはすぐに分かった

「失礼します」

「・・・」

転校生の内一人は男だからだ

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国で不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

髪色が濃い金色の少年。シャルル・デュノアがにこやかな笑顔で告げると一礼した
礼儀正しいじゃん

「お、男・・・？」

誰かが呟いた

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

「きゃ・・・」

「はい？」

「きゃああああ　っ！」

もうお決まりのことなのでたいして驚かない
だけでもうるさいものはうるさいものなので

たとえば、驚かなくても耳が痛い

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった〜〜〜！」

最後は大袈裟すぎだ

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生は面倒くさそうにしている

まあ、こんな反応が毎回続くと思うとな・・・

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

確かに、まだもう一人自己紹介をしていない、眼帯の低めの背の女子生徒がいる

「・・・」

なぜだろう

あいつを見てると胸がムカムカする

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官？

まさか、軍隊所属か？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

あの立ち方・・・どうみても軍人かクソッ、嫌な思い出を引き出すなよ・・・！

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・」

クラスメイトたちの沈黙

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

できれば本当にこいつとは関わりたくない
そう思っていたが、そうゆう訳にはいかなかった

バシンッ！

「・・・」

「っっ」

目の前の席の一夏が突然殴られた

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

ブチリ

俺の中で何かが破れる音がして何かが溢れ出すが、残る理性で溢れ出す何かを押さえつける

(こんなところで問題を起こせられない・・・！)

一夏とラウラ・ボーデヴィツヒの会話がラウラ・ボーデヴィツヒ側から一方的に終わる

そして、HRが終わる

「おい織斑、鷹代。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男だろう」

「君たちが織斑君と鷹代軍隊？初めまして。僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

一夏がシャルル・デュノアの手を取り教室を出ようとする

「おい、映司。なにやってる？早くいくぞー！」

「あ、ああ。すまん」

席から離れない俺に気づいて声を掛けてくれた
ありがたい

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

「どうした？トイレか？」

「トイ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

そろそろあの感情も治まってきた

「一夏。そろそろ来るぞ」

「そうだな。シャルル、もう少し速く行くぞ」

「えっ、どう……」

シャルル・デュノアが言い終わるまえに大勢の女子生徒がやってくる

「転校生発見！」

「しかも織斑君と鷹代君も一緒！」

「ゲッ！？来たぞ！一夏！」

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

状況が飲み込めていないシャルル・デュノアが困惑顔で訊く

「そりゃ男子が俺たち三人だけだからだろ」

「・・・？」

「ISを動かせられる男が俺たち三人だけだからだ」

シャルル・デュノアの隣を走る俺が言う

「あつ！ ああ、うん。そうだね」

さつきからシャルル・デュノアの動向がおかしいが大丈夫か？

「しかしまあ助かったよ」

「何が？」

「いや、映司も一応いるんだがやっぱり寂しくてな男が三人に増えるのはいいことだ」

「そうなの？」

「そつに決まってるだろ」

俺はテキトーに返す

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺は鷹代映司だ。俺も映司って呼んでくれ」

「うん。よろしくー夏、映司。僕のことシャルルでいいよ」

こうして無事に第二アリーナ更衣室にたどり着いたのだった

ブロードと眼帯と溢れる感情（後書き）

オーズのスキヤニングチャージだけのはずなのにトリプルスキヤニングチャージとしてしまった・・・

恥ずかしい・・・

こんなんでもオーズは本編を全話視聴していたのに・・・

実力とパートナーと不一致(前書き)

タイトルはテキストなので本編とまったく関係ない

実力とパートナーと不一致

第二グラウンドに無事到着した

まあ、更衣室でいろいろあったがつまらないし割愛させてもらう

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

一夏の隣はセシリアか

「ふあ〜」

あくびが出る

「映司さん、何をあくびをしているんですか」

セシリアがなぜかお怒りだ

「どうした？なんか機嫌でも悪いのか？」

「いえ、そういうわけではありませんわ」

なぜだろう

怒ってないって本人が言ってるのに、素直に怒ってないと思えない

「なに？アンタまたなんかやったの？」

突如、鈴の音がする

どこから!？

「後ろにいるわよ、バカ！」

見ると一夏の後ろに鈴がいた

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

「安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

きしむブリキの音で首を動かすセシリアと鈴

まあ、なんだ。ご愁傷さま

バシーンと青空の下で出席簿アタックが響いたのだった

「では、本日から格闘及び実戦訓練を開始する」

「はい！」

さすが2クラス合同だと出てくる返事も気合いが入ってる

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

セシリアと鈴はズキズキ痛む頭を涙目で押さえていた

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 鳳！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!？」

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に入る」

「だからってどうしてわたくしが・・・」

「一夏のせいなのになんでアタシが・・・」

「お前らすこしはやる気を出せ。 アイツにいいところを見せられるぞ?」

あれ？織斑先生がなぜか俺の方を見てる
俺なにかやったか？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」
なぜあいつらのやる気が上がってるんだ？
映司のそんな問いをよそに話は進む

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は」

キイイイン・・・
この音・・・嫌な予感が

「あああーっ！ど、どいてくださいっ！」

見上げると絶賛墜落中のISが俺の方に・・・
つてこんなことを考えてる場合か！

素早くメダルとドライバーを出す
使うメダルは・・・真ん中はテキトーにだ！

『シャチ・クジャク・ゾウ！』

落っこちてくるISにシャチヘッド全力の水をとばす
おかげで若干速度は落ちた

ズドオオオン

ゾウのおかげで衝撃で飛ばされることなく数センチ元の場からズレ
ただけだ

ちなみに、左肩には落っこちてきた謎のISがいる

「ラファール・リヴァイヴ・・・」

「あの〜鷹代くん。下ろしてくれるかな？体勢がとても恥ずかしい
ような・・・」

「えっ、あ、すみません。山田先生。今下ろします」

左肩に抱えた山田先生を下ろすと初めてわかった
山田先生が巨乳ということではなくISスーツが濡れて山田先生の
皮膚にピッタリくっついていていることを

「す、すいませんでした!!」

高速に何回も頭を下げる俺

つかシャチヘッドから出た水はシールド貫通するのか？

これ、あまり使ったら良くないかもな

ジュッ

ん？なにか焼けた音が

耳の近くで聞こえたので恐る恐るシャチヘッドの側面の突起物を触る
うん。焼けてる

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

がシーン

この何かがくつつく音……。不吉です

見ると鈴が双天牙月を両刃状態にして投げる

投げられた双天牙月は、もちろん俺に来た

「うわああああ!？」

行動に一切のためらいがない!これはある意味最凶だ!!

双天牙月はブーメランのように返る

しかも俺の方に

ヤバッと俺は双天牙月を受け止めるため左腕を上半身のオーサーク

ルに囲まれたレリーフの前に出す
しかし

「はっ！」

山田先生がレッドバレットを使い、双天牙月の両刃の刃を正確に叩き、軌道を変えてくれた

しかし、驚くべきところはあの山田先生が素早く行動したところだ

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし・・・」

あら、元の山田先生だ

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

その言葉によりセシリアと鈴の中の闘志が激しく燃えまくる

「では、はじめー！」

号令と同時にセシリアと鈴は飛び、山田先生はそのあと飛んだ

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます!」

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせる」

「あつ、はい」

こうしてシャルルの解説が始まったが俺はきく必要がなかった
それよりセシリアと鈴の戦闘はひどかった

山田先生が射撃でセシリアを誘導して鈴とぶつかったあと、グレネードを投擲

そして、二人は地面に落下した

実力とパートナーと不一致(後書き)

次回、動き出す新たな誕生(Birth)!

昼休みと忠告とBirth(前書き)

パソコンが母親に奪われ投稿ができなかった・・・

昼休みと忠告とBirth

「ぐぐぐぐぐつ・・・！」

「ぎぎぎぎぎつ・・・！」

セシリアと鈴は言いたいことを言って睨み合ってる

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力を理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩きみんなの意識を切り替える

「専用機持ちは織斑、オルコット、鷹代、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳だな。では七人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

こうして午前の授業は男子三人に女子が殺到して織斑先生の一声ですぐ分かれ終わった

昼休み、一夏から屋上で飯を食おうぜみたいなのを言われ俺は屋上に来た

メンツは俺、一夏、シャルル、篠ノ之箒、セシリア、鈴だ

篠ノ之箒は一夏に分まで弁当をセシリアはサンドイッチ、鈴は酢豚だった

ちなみに、俺は十秒飯ウィ〇ー

「映司ってそれだけ？昨日もご飯だけなのに」

鈴が俺を見て言う

「世の中には不思議がいっぱいだからなこれぐらいで驚くな」

「そんなんじやあ体壊すわよ。はい、これ」

ウィ〇ーを完食した俺に鈴がタッパーに入った酢豚を渡してきた

「これが噂の鈴の酢豚か・・・」

「アンタ昨日酢豚食べたって言ったから作ってきてあげたわ」

よし、夕飯は決まったな

ありがとう。鈴

そんなことを思いながら視界の隅に一夏が篠ノ之箒に「はい、あーん」をしていた

「映司・・・どうしたの？一夏たちをじっと見て」

「いや、この世に「はい、あーん」が生き残ってたんだな」と思っ
てさ」

「え、ほ、ホントだ。一夏が篠ノ之さんにあーんしてる」

そんなやりとりを聞いてセシリアと鈴の目がキュピーンと光る

「映司！そんなにあーんしてほしいなら。あ、アタシが！」

「わたくしのサンドイッチが先ですわ！」

「いや、どうしたお前ら。なんでそんなにグイグイ俺の口に食い物を寄せる？ええい！自分で食う！だから、手をどけ　もがあ！？」

なぜだろう

一夏の「はい、あーん」から始まったこれが俺に被害を被るやばい。どっちが正しい味かわからない

「どつ？」

「どつでしたか？」

セシリアと鈴が俺に料理の味について聞く。だめだ。両方とも不味く感じる。だけど、正直にこんなこと言える勇氣は俺にない。なら・・・！

「二人とも個性的な味で美味しかった。アリガトウ」

あつ、最後が完全に棒読みだ

「アンタ馬鹿にしてるの？」

「映司さん・・・」

「映司、訂正した方がいいよ。危なくなる前に」

シャルルが警告してくれるのはありがたい。しかし、それ必要ない

ぞ。目を見れば一目瞭然だもの

「くそつ、かくなるうえは！」

屋上の手すりを乗り越え飛び降りる

「映司!？」

後ろでシャルルの声が聞こえたがもう遅い

屋上から飛び降り重力により地面へ落ちてゆく

そして、落ちる最中に腕輪が灰色に輝く

俺の目は灰色に変わり重力を操作する

地面まで数センチで止まり無重力を解除して逃走した

後ろから迫る脅威二人から

「ふう、ここでもいいだろう」

IS学園内の人気のないところで休む俺
すると、

「・・・」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」

なぜこんなところに?という問いは愚問かお互い睨み合い時は過ぎ
ていく

「フン……」

くだらないと感じたようで俺から離れていくボーデヴィツヒしかし、

「待て、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

お互い背中を向けて会話する

「何か用か」

「ただの忠告さ。次に一夏やセシリア、鈴、シャルルに手を出したら……お前を殺す」

「フン。貴様にそれができるなら」

ボーデヴィツヒが振り向く。そして、恐怖した

鷹代映司の目が今まで以上に冷酷で刃物のような殺気を漂わせていたことを

「……!?」

ボーデヴィツヒはその場から数秒間、動けなかった

(この学園にこれ程までの人間が埋もれていた!?)

気がつけば目の前にいた映司は姿を消し一人その場にいた

とあるビルのへりポート

「IS学園への入学手続きは終わりました」

白いスーツを着た女性が同じくスーツを着た男性二人に言う

「それでは行ってまいります」

アタッシュケースを片手に持ち待機中のへりに乗り込む
そこにはIS学園の制服を着て足をばたつかせる少女がいた

「後藤さーん。早くくださいよーそれ。早く装着したいですー」

「ダメだ。お前は問題を起こしすぎている。これはIS学園の正式な生徒になった時に渡す」

「後藤さんのけちんぼ」

「なんだと!？」

「まあまあ、後藤ちゃん。それ使うのにアレいるじゃん?だから、大丈夫だと思うよ俺は」

「わーい。伊達さん、大好きー!」

「お、おい!引っ張るな!今手錠を外すから待て」

後藤という男性が手錠をはずした瞬間、素早くアタッシュケースを奪う少女

「ふふーん　これがぼくのIS・・・」Birth『」

昼休みと忠告とBirth(後書き)

次回は多分二日後ぐらいに掲載するかも・・・

警戒と挑発と判明

午後の授業も無事に終え自分の部屋に帰ってきていた

ちなみに、今朝やったジャンケンのおかげで俺はシャルルと同室だ

「まあなんだ。よろしくだな」

「こちらこそ。よろしく映司」

シャルルにお茶を出す

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「気に入ってもらったな何よりだ」

とりあえず机の上に置いてあるメダルケースとカンドロイドをどけるか

どける作業を後ろからシャルルが凝視して言う

「映司、そのケースって何が入ってるの？」

「秘密だ」

片手でシャルルにバレないようにゴリラカンを開ける

「それより……」

織斑先生と山田先生がヘリポートで一機のヘリコプターが降りてくるのを見ていた
中から二人の男とIS学園を着て片手にアタッシュケースを持った少女が下りる

「はじめまして後藤慎太郎です」

「どうも。伊達章だ」

「織斑千冬だ。一年一組の担任を受け持っている」

「山田真耶と申します！同じく一年一組の副担任を勤めさせていた
だいています」

ペコリと頭を下げるとメガネがずれた

「鴻上会長から話は聞いています。例の装着者が彼女ですか？」

織斑先生がIS学園の制服を着ている少女を見る

「はい。名前はかんざね神原日奈。特殊全身装甲型IS『Birth』正式な装着者です」

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが・・・」

シャルルが転校してきて5日がたち土曜日の午後
みんなで一夏の訓練をしていた

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域バースロットが開いてないらしい。だから量子変換インストールは無理だつて言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと・・・えーと、なんだっけ？」

「言葉通り、唯一仕様ワンオフの特殊才能アビリティーだよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のこと」

さすが優等生だな

一夏の訓練に参加はしたがやることなくただ欠伸するばかりだった
すると、一夏がシャルルの《ヴェント》を借りて射撃訓練を始めた
そして、一夏が一マガジン分撃ったところでアリーナがざわめき始めた

「ねえ、ちょっとアレ・・・」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

「おい」

ラウラ・ボーデヴィツヒが話し掛けてきた

「・・・なんだよ」

気が進まないようだが一夏が返事をした

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだ。戦う理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　貴様の存在を認めない」

その言葉に再び俺の中のスイッチが入った

「また今度な」

「ふん。ならば　戦わざるを得ないようにしてやる!」

ラウラ・ボーデヴィツヒの漆黒のISを戦闘状態へシフトさせる。

刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた

「！」

ゴガギンッ！

「・・・こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様・・・」

シャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に六一口径アサルトカノン《ガルム》を展開してラウラ・ボーデヴィツヒに向ける

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前にたちふさがるとはな」

「未だ量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルキよりは動けるだろうからね」

お互い涼しい顔で睨み合いが続く

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

アリーナで担当の教師が叫ぶ

それでラウラ・ボーデヴィツヒの興が削がれ戦闘状態を切った
そして、アリーナの閉館時間になり帰ることにそこでシャルルは気づいた

「そつえば映司は？」

気づいた時には映司の姿はどこにもなかった

ゴッ!

映司は一人、自分の手で自分の頭を殴っていた
額からは血が流れる

「……落ち着いたか」

物陰から織斑先生が現れた

「……先生がなんでここに？」

「たまたまこっちに来るのを見てな」

「そうですか……」

しばらく沈黙したあと織斑先生が口を開く

「お前は仲間のために体を張って守る節がある。だからこそ、仲間である織斑に手をあげたラウラに殺意に似た感情が出たのだろう」

まったく鋭くて困る

「今のところどうにかなってますけど次はないと思いますよ」

「フッ、解っているさ。だから、教師命令だ。お前にラウラを任せ
る」

「へっ?」

いきなりの展開に間抜けな声が出た

「返事は『はい』だろ」

俺にラウラ・ボーデヴィツヒを任せる?
どういう意味で?・・・そういうことか

「解りました。その命令必ず守ります。教官」

「一言余計だ。馬鹿者め。まあ、期待しているぞ」

「はい!」

部屋に帰ると誰もいないはずのシャワールームから音がしていた

「シャルルー、いるのかー?」

「ふえ!?え、映司!?帰ってきたの?」

俺の部屋だから当然だろと思いつながら机の下に5日前から配置していたゴリラカンを出す

反応はありか・・・

シャワールームに向かう

そして、扉を開けた

「シャルル、お前勝手にケース開けようとした　　ろ？」

シャワールームにはブロンドヘアの女性がいた

「え、映司？」

沈黙すること数秒

ゆっくりと扉を閉める

「・・・シャルル、ちょっと頭冷やしてくる」

そう言って部屋から走り出ていった

一時間後、部屋に戻ってきた俺はシャルルと目を合わせられない状況にいた

「・・・」

「・・・」

とりあえず無言でお茶を作る

人間の関係は間に食べ物があれば越えられる！by鷹代映司

「お、お茶だ」

「あ、ありが　きやつ」

指先が触れたようで女の子らしい声をあげて湯飲みから手を引っこ抜く

そのまま湯飲みは自由落下

俺のズボンにかかった

「あ、熱いー！！？」

替えのズボンを引っこ抜き洗面所に逃げ込む

「え、映司、大丈夫？」

「ま、まあな」

洗面所内で着替える

「でも、映司ってこんな状況に慣れてるみたいだね」

「ま、まあな」

以前に鈴とセシリアを部屋にあげたおかげで女子の前で着替えるという自殺行為はしないで済んだ

その後、着替えた俺はシャルルに向き合い

「さて話を聞かせてもらおうか」

警戒と挑発と判明（後書き）

バースが次回本格始動

さらに、次回ラウラが映司にボコボコにされます

怒りとオースとバース（前書き）

ラウラボコボコ回

ラウラファンの人すみません・・・

怒りとオースとバース

「そういうわけで男のフリをしていたのか」

「うん・・・」

シャルルからすべてを聞いて正直親の都合で子を巻き込むなど言いたい

何がISの白式とオースのデータを盗めだ
曲がりなりに実の娘をなんだと思ってる

「まあ、お前の事情は解った。で、どうするんだ？」

「きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は」

「デュノア社の話じゃない。お前がどうしたいか聞いているんだ」

「えっ」

俺は両手をシャルルの両肩に置いてまっすぐ見る

「残りたいか、残りたくないか、それを聞いているんだ」

シャルルが顔を俯かせて言う

「僕にそれを選ぶ権利なんてないよ」

涙でも漏れそうな声でシャルルは笑顔で言った

「なら、ここにいろ」

「えっ……」

頭のなかに溢れるアーカイブからこの状況に相応しい特記事項を探る

「特記事項第二一、本校における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外交的介入は原則として許可されないものとする」

特記事項のテキストとまるごと読んで喉が疲れたので一息ついて再び切り出す

「つまり、この学校にいれば安全ってことだ」

「映司、よく覚えられたね。特記事項って五十五もあるのに」

「覚えるのが得意なだけだ」

「ふふっ、そうみたいだね」

シャルルがやっとシャルルらしい笑顔を見せた

「まあ、どちらを選ぶかはシャルルしただいだ」

「うん。わかったよ」

「んじゃ、夕食でも食いに行くか」

「そうしよう。僕着替えてくる」

そして、待つこと十数分後、いつもの男シャルルになり部屋を出て食堂に向かった

次の日の放課後。第三アリーナにセシリアと鈴は出会った

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

二人は火花を散らす。お互い狙うは優勝

IS学園では現在優勝すると織斑一夏か鷹代映司と付き合えるらしい（本人同意はない）

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことを含めてどっちが上かはつきりさせとくっても悪くないわよね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではつきりさせましようではありませんか」

二人はメインウェポンを呼び出し構えて対峙する

「では」

声を遮り超音速の砲弾が飛んでくる

「「!?!」」

緊急回避のあと、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方を見る
そこには漆黒の機体があった
機体名『シユヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者は

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる

「……どういつつもり?いきなりぶつ放すなんていい度胸してる
じゃない」

《双天牙月》を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へシフト
させる

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か……
ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的な物言いに、鈴とセシリアは口元を引きつらせる

「何?やるの?わざわざドイツくんんだりからやってきてボコられた
いなんて大したマゾっぶりね。それともジャガイモ農場じゃそっ
うの流行ってるの?」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようで

すから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに」

「はっ……。ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ
！

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわけね。セシリア、どっち先にやるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが」

「はっ！ふたりがかりで来たらどうだ？一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

「今なんて言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にはない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

「とつとと来い」

「上等！」「」

「ハアアア!!」

俺はまた出現したクズヤミーの退治にいそしんでいた
両腕をカマキリアームに変え備え付けの剣で次々にクズヤミーを倒
していった

「ラストォ!!」

カマキリソードを交差させてクズヤミーを撃退する
倒すと半分に割れたセルメダルが落ちた

「これ以上はナシか」

部分展開したカマキリアームを戻す

「そついえば今日映司たちは第三アリーナ特訓だったな」

俺は第三アリーナに向かっていった

そして、次に見た光景は映司に正気を保てない状況だった

第三アリーナに來ると一夏が鈴とセシリアを抱き抱えていてシャルルはラウラ・ボーデヴィツヒの攻撃に対してアサルトライフルで応戦していた

「一夏、ふたりは!？」

「う……一夏……」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。……シャルル、大丈夫だ。ふたりともなんとか意識はある」

「よかつた」

安堵した声でシャルルは答えるが、その手は一切休まることがない

「面白い。世代差というものを見せつけてやるう」

弾丸を避け、防ぎ、目に見えない力で止めていたラウラ・ボーデヴィツヒが反撃に転じる
しかし、

ゴキンッ!

横合いから現れた人影がラウラ・ボーデヴィツヒの顔面を殴り飛ばす

「……ッ貴様ア!!」

現れた人影はIS学園の制服を着て肩までクジャクアームを部分展

開いた男
鷹代映司がいた

「・・・映司？」

シャルルが訊くがそれ以上声がない
なぜか今の映司を見るといつもの面影はない

「言ったはずだよな・・・ラウラ・ボーデヴィツヒ。次に仲間に手を出せばどうなるか・・・」

左腕に装着された円形状の物体がひとりでに回り出す

「くっ・・・」

「報いを受ける」

『ギンギンギンギンギン！』

タジャスピナーと呼ばれる物を後ろに構え撃つ
すると、銀のメダル六枚がエネルギー体で回転しながら射出されラウラ・ボーデヴィツヒに真っ直ぐ飛ぶ
ラウラ・ボーデヴィツヒは見えない力で止めようとするが止めようとするエネルギーが常人的な量じゃない
完全に押されている

「ば、バカな!？」

止まらないエネルギーを上へと逃がす
すると、いつの間にか詰めかけていた映司がゴリラアームでラウラ・

ボーデヴィツヒの胴体に重い一撃を浴びせる
当然この攻撃はシールドを貫通する

「うは……」

メキメキとラウラ・ボーデヴィツヒの体は嫌な音を立てて吹き飛ぶ
その光景を見て一夏が

「強すぎる……」

そう言った

ISを完全に展開しているラウラ・ボーデヴィツヒが部分展開しか
してない映司に押されている

「こんなはずはない!!!!」

ラウラ・ボーデヴィツヒが起き上がり六つのワイヤーブレードが
飛ぶが、その六つ共が地面に叩きつけられる
かくいくなればラウラ・ボーデヴィツヒもだ

「なん、だ？体が、重い!？」

見ると映司の目は灰色に変わりラウラ・ボーデヴィツヒを見下す

「一体貴様は何を!？」

すると、すぐに体が軽くなる

どうやら部分展開での重力操作は数秒程度しか保たないらしい
しかし、今の映司には関係なかった

ラウラ・ボーデヴィツヒの首をトラアームで掴み上げる

「が、ごはっ!?!」

首をすごい力で締め上げられ停止結界やワイヤーブレードに意識を配れたない

「ここでお前を殺す」

冗談でもなんでもない

今の映司は怒りと憎しみで動いている
誰も止められない

「ごあ、あ、あ、」

映司の腕をつかみ必死にもがくが映司の力はさらに強くなりさらに
苦しくなる

「やめる!映司!」

「やめて!映司!」

シャルルと一夏の声が聞こえるがもう止まらない
ラウラ・ボーデヴィツヒを死体に変えるまで

「死ね」

止めを刺そうとしたとき昨日の織斑先生との会話が頭によぎる

『ラウラをお前に任せる』

その言葉が映司を正気に戻し締め付けていたラウラ・ボーデヴィツヒの首を放す

「はあ、はあ、はあ、はあ」

ISを閉じたラウラ・ボーデヴィツヒは地に手をついて首を押さえる

「大丈夫か？」

映司がラウラ・ボーデヴィツヒに手を差しのべる

「なぜ、はあ、殺すのを、はあ、止めた」

首に手を押さえたまま俺に言う

「お前が慕う教官に頼まれたからだよ」

「教官が・・・？」

意外そうな顔をして俺を見る

「ああ、織斑先生は 危ないっ！」

言い終わる前にラウラ・ボーデヴィツヒを押し倒して覆い被さるようにいきなり来た攻撃からラウラ・ボーデヴィツヒを庇う

ズダダダダン！

映司たちのいる場所をくり貫くように場に攻撃がいく

「映司!？」

シャルルが叫ぶ
すると、一夏が開けたバリアーの穴から銃のような物を構えた少女がいた

「さっすが、オーズの器だけに、この攻撃は分かっちゃったか」

バリアーの穴からアリーナ内部に現れる少女
腕には映司に似た腕輪を装着していた

「会長からはオーズを支援しろって言われてるけど、いいよね？答えは聞いてない！」

腕輪が発光すると少女の腰にベルトが巻かれる

「変身」

かポーンと音がすると少女の周りが球体に包まれ十個もあるガチャポンのカプセルに似た物が現れ開く
中には銀色のアーマーが装着される
体が完全にアーマーで包まれると顔が赤く発光する
その姿はわかる人間には分かる姿だった

「・・・バース・・・」

その姿はまさに仮面ライダーバースその者だった

「さっすが、なんでも知ってるね」

両手を合わせてパチパチと拍手する

「じゃ、ご・ほ・お・び・に」

ズダダダダン！

世間一般に銃を乱射するのはご褒美じゃないと思う

「くっ！」

ラウラ・ボーデヴィツヒを抱え攻撃を全て避ける
そして、いつの間にかドライバーを装着して

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、ここにいる」

赤・黄・緑のメダルを差し込み、オースキャナーを通す

「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

映司がオーズに変わる

「そうそうそういうの待ってたんだよ！」

銃を構え撃つ

「うおおおおおー！！」

その中を走り抜けるオーズ

そして、バースまで残りわずかの距離でバツタレッグの力を発動する

「ハアアアアアア!!」

前方に跳び三、四発蹴りを決める

「ぐあ・・・いいよ、いいよ、いいよ、いいよ!そうこなくっちゃ
!」

バースが手に持っていた銃をというかバースバスターのマガジンを
外し銃口に取り付ける

《Cell Burst!》

「オリヤアアアア!!」

圧縮されたエネルギー弾が放たれる

それを真正面から受ける

しかし、後ろにラウラ・ボーデヴィツヒがいるので避けれない

「がああああ!!」

エネルギー弾を受けながら横合いからトラクローを叩き込むと、エ
ネルギー弾はバラバラになりアリーナの地表にめり込む

「無茶な回避のしかたするねえ」

弾切れのバースバスターを放り捨てオーズに走り寄る

「ヤア!!」

バースが肉弾戦に切り換える

それを避けたり防御したりする

そして、両足を揃えバツタレッグの力を発動

二本足を揃えてバースの体を蹴る

その反動を利用して空中を一回転する

地面に着地するとトラクローを展開して構える

「ならばくも」

《Drill Arm》

右腕からドリルアームのパーツが飛び出てその場で再構築される

「よいしょお！」

ドリルアームを振り回すが、全て避けられる

「ならここはどうだ!?!」

ドリルアームを構え直しオーズのど真ん中にドリルアームを突っ込む
しかし、弾かれた

(なっ!?!弾いた!?!)

回転するドリルアームの先端をトラクローと一瞬触らせて離す

それだけでドリルアームは有らぬ方向をいく

そして、オーズのトラクローはバースの喉元へバースは無理矢理ド

リルアームを移動させオーズの顔へそれぞれ向ける

そこで時間は来た

「日奈もうよせ！」

突如現れた新任男子教師の声が響く

ドリルチームが目の数センチ前で止まる
映司のトラクローもだ

「ちえ〜つまんないの」

ISを解除する少女に合わせ俺も解除した

「俺たちの本来の目的を忘れたのか！」

男子教師の後藤なんとかさんが日奈と呼ばれる少女に詰め掛ける

「わかってますー。オーズの鷹代映司の支援ですよね」

「わかってるならどうして戦いを仕掛けた」

「僕の支援を受ける奴の実力ぐらい見てもいいじゃないですか」

男はこめかみを押さえて言う

「もういい。お前は伊達さんのところに行ってる」

「ふぁーい」

敬礼みたいなポーズをしてアリーナを出ていった

「一夏、シャルル。二人を早く保健室へ」

今までの戦いを呆然と見ていたふたりはようやく戻ってきた

「あ、ああ、わかった」

「早くいじつ。一夏」

かろうじて意識のある鈴とセシリアだが今の戦いは記憶に残っていないらしい

「さてと俺は」

また、ただ呆然と俺を見つめるラウラ・ボーデヴィツヒの方を向き

「お前もいくぞ」

「な、わ、私はいい！」

なぜか顔を背けるラウラ・ボーデヴィツヒ
顔はなぜか赤い

「良くないだろ。俺の首締めのが残ってるじゃないか」

屈んでラウラ・ボーデヴィツヒの首を見る

「よいしょっと」

ラウラ・ボーデヴィツヒの体を抱える

その行為は初めてらしく

「お、下ろせ！貴様！」

すごい剣幕で睨むがでこをピンとデコピンして黙らせる

「・・・」

アリーナを出ていく俺とラウラ・ボーデヴィツヒ

出ていくときの生徒の視線がいたかったが

しばらく無言だったラウラ・ボーデヴィツヒが口を開く

「なぜお前はああも強い？」

「さあな、だけど、さっきのあれは強いとは言えない」

「なぜだ？」

「力を怒りと憎しみで使ったからだ」

「怒りと憎しみ・・・だが、それが人間の本質だ」

「そうだ。人間の本質さ。だから、その本質をどう操作するかでその強さがわかる」

遠いものを見つめるような目で言う

「だから、俺も許すことから始めるぞ」

「許す？」

「ああ、」

映司は深く答えなかった

そして、ラウラ・ボーデヴィツヒを部屋の前まで連れて行き別れた

(鷹代映司・・・奴の目には何が映っているんだ)

怒りとオースとバース（後書き）

次回、学年別トーナメントの映司のパートナー発覚

余談ですが感想でイマジンやショッカーのことを書かれていますので最初の主人公設定の補足として紫やイマジン、ショッカーは映司のメダルバンクに入ってませんので使えません
まあ、”今”はですけど

誤解と制止とパートナー（前書き）

鈴、セシリアの出番は一時終のお知らせ

誤解と制止とパートナー

「随分とひどくやられたな」

第三アリーナでの一件から一時間後が経過していた

「……………」

「……………」

鈴とセシリアはなぜかむっすーとしていた

(一夏、どうして二人はさっきからむっすりしたままなんだ?)

(俺にもわからん)

一夏と俺でひそひそ話をしてシャルルが帰ってくるのを待っていた

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「そうなのか？」

「全然」

見栄張りすぎだろ

「全然って何よ！全然って！」

「そうですね！あのときだって逆転の準備中でしたわ！」

「そうだったか？」

「全然全く」

「だから、全然全くって何！？あたしたちが負けたって言いたいのでしょ？」

「そうですね！わたくしたちは負けてなどいませんわ！」

「なんだか熱いなこのふたり

すると、シャルルが部屋に戻ってきて

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

そんなことを言った

「好きな人？」

俺はしっかりと聞いてしまったが

「鈴とセシリア、一夏が好きなのか？」

「な、ち、ちがうわよ！」

「そ、そうですね！わたくしの好きな人は映
ってなんてこと言
わしますの！？」

いや、勝手に喋るうとしたの君たちだろうが

「でも一夏が好きじゃないとすると・・・まさか、お前らレズか・・・？」

「「なんでそうなる」の「」ですの「！？」」「

「映司、なんで自分をカウントしてないの？」

「当然、モテていると思ってないからさ」

「言ってる悲しくない？」

「ちょっと涙腺が緩むぐらいな」

あれ？目から水が・・・

ちがうよ？俺悲しいとは思ってないよ？

「まったく悲しいならちゃんと泣けばいいのに」

「いや、これは今日の昼に食べたタバスコが・・・」

「映司、タバスコは直接飲むものじゃないぞ」

「そうそうタバスコじゃなくて七味唐辛子がおでんに合つと思つぞ」

「そりゃそうでしょ。誰がおでんの中にタバスコなんて・・・ん？」

なぜかおでんの話にというか誰だ

さっきの声の人？

振り返ると白衣姿の髭を若干生やしガタイのいい男性が立っていた

「新任の保健室の教師、伊達章だ。よろしく」

そう言っただけと握手する

つか、さっき会った後藤先生とか日奈と違ってモロオースのキャラクタージャン

そして、あのバースは後藤先生も絡んでいるとすると・・・

「まさか、伊達先生も？バースと関係が？」

「まあね。俺は榊原の・・・バースのメンタルのケアを受け持っている。ちなみに、オースの鷹代、お前もだ」

「お、俺も!？」

自分で自分を指さし驚く

すると、伊達先生が腕を俺の肩に組んできて小声で喋る

「・・・まあ、お前の力はほとんど自分で制御できてるからメンタルのケアなんていらなと思うから鷹代は恋の悩みでも俺に聞いてこい、な？」

グツと親指を立てられても困るんですが・・・

すると、ドドドドドド・・・!と廊下から音が聞こえる

しかも音はだんだんと大きくなる

そして、保健室の扉が吹き飛んだ

「織斑君!」

「鷹代君！」

「デユノア君！」

入ってきたのは数十名の女子生徒だった

ベットが5つもある広い保健室はあっという間に埋め尽くされ、俺と一夏とシャルルを見つけるとすぐさま取り囲まれた
ちなみに、伊達先生は女子生徒の波に飲まれてしまった

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな・・・ちよ、ちよっと落ち着いて」

「そ、そうだぞ。あと、手を引っ込めろ」

状況の飲み込めない俺たちに、バン!と女子生徒一同が出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった

「な、なになに・・・？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」

「ああ、そこまででいいから!とにかくっ!」

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デユノア君！」

「私と組んでください、鷹代君！」

先手必勝とばかりに勇みせまってきている
正直、引くぞこれ

「え、えつと・・・」

シャルルがオドオドしている
そういえばシャルルって女だったなと思い出した
すると、一夏が

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

一瞬沈黙するがすぐに

「まあ、そういうことなら・・・」

「他の女子と組まれるよりはいいし・・・」

「男同士っていうのも絵になるし・・・ごほんごほん」

その後、キツと数十人の女子たちが俺の前に来て同じことを言う
どうしたもんかなと思っていると、伊達先生が全員に聞こえるぐら
いの大きな声で

「鷹代ならパートナー決まってるぞ」

えっ？と俺も含めた生徒が言った

「あの、俺、初耳なんですけど・・・」

「だ、誰！？映司のパートナーは！」

「教えてくださいまし！」

俺の言葉を遮り鈴とセシリアが伊達先生に訊く

「鷹代のパートナーならそこにいるだろ」

伊達先生が指差すと全員その方向へ目がいく
そこにはセシリアがいた

「ま、まさか、わたくしが！？」

光栄あらんとセシリアのオーラが言うが

「ちがうちがう。その窓から入ってきてる奴だ」

伊達先生が指摘するとやっぱりその方向に視線がそこには黒髪で腰
まで伸びた長髪の控えめな胸の少女がいた
しかも俺と一夏、シャルルからすれば出会って二度目になる

「ふえ？」

せんべいをくわえて固まった

「だ、誰？」

誰かが呟いた
すると、伊達先生が

「あいつは榊原日奈。ISバースの装着者だ」

「どうも！榊原日奈です！趣味はサバゲー！、特技は息止め三分！
スリーサイズはひ・み・つ な美少女です！」

女子生徒たちが帰った後の保健室で突如、自己紹介を始めた榊原日奈というやつ

「は、はあ・・・」

一夏が一応返事をする

「はっ！好きなものと嫌いなものをまだ言っていない」

本人はまったく気づいてないけど、そして、鈴とセシリアの視線が痛い

「まあ、とにもかくにもよろしく！オーズの映司君！ぼくのこと日奈って呼んでね」

「納得いきませんわ！いきなり部外者が映司さんと組むなんて！組むのならクラスメイトであるわたくしが相応しいですわ！」

「ちょっと待ちなさい！組むのはあたしよ！連携だつて前に一度一緒に戦ったことのあるあたしの方がいいに決まってる！」

鈴とセシリアが火花を散らしあっているが

「ダメですよ」

いきなり現れた、山田先生がふたりに言う

「おふたりのISの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよなISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うっ、ぐっ……！わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！不本意ですが！トーナメント参加は辞退します……」

まあ、それが賢明な判断だろう

後ろではシャルルが一夏に事情を話し中

「まあ、ふたりともまた今度な学年別トーナメントは今年だけってわけじゃないからな」

「「今回じゃないといけないのに」」

「なんか言ったか」

「「なにも！」」

なんだろう

最近ふたりの息がぴったりしている気がする
すると、榊原日奈が俺の腕に抱きついてきた

「「なっ!?!」」

鈴とセシリアがうるたえる

といつかどういことだこれ

「じゃあふたりがない間、ぼくたちで愛を育もうか」

愛を強調しているがこいつ遊んでやがる

「離せ!くっつくな!」

「いいじゃんいいじゃん。ぼくたちパートナーなんだから」

「お前とのパートナー関係は学年別トーナメントだけだ!」

いくら引き剥がそうとしても離れない

すると、ベットのふたりの目が赤く染まりドス黒いオーラに包まれ
顔が見えなくなる

「ま、待て!ふたりとも!これはちがうんだ!」

「そんな!ぼくをアリーナであんなことやそんなことをしておいて
!?!」

ぎゃあー！誤解があー！！

「「・・・映司（さん）、あとでゆっくり話しは聞かせてもらおうよ）もらいます（・・・」

これはまさに死の宣告だった

誤解と制止とパートナー（後書き）

次回から学年別トーナメントスタート！そして、その裏で暗躍する存在と映司が激突！

へたくそと激突と助っ人（前書き）

ウヴァさん位置の敵が登場

へたくそと激突と助っ人

保健室から俺たちは自分の部屋に帰ることにした

保健室ではいろいろあったが思い出したくない

まあ、そんなことより月末の学年別トーナメントに集中しなければ意識を入れ換えて榊原日奈とかいうバース装着者との連携を考えてみたりする

「え、映司……じつと見られてると着替えれないんだけど……」

「ん？ああ、すまん。あっち向いてるよ」

だがバースとオーズの連携って別々に戦うかブレストキャノンのチャージの時間稼ぎぐらいしか覚えがない……
後藤バースからともに連携を組んでたな

「その前に榊原日奈の性格からして連携組めるのか？」

そこが難しいところだ

考え事をしながら服を脱いでいく

現在パンツだけの俺をシャルルがじつと見ている

「……そんなに男の裸が好きなのか？」

「！？ち、ちがうよ！ただ見とれちゃてね……」

「男のどこに見とれる場所があるんだ？」

「へ！？え、えと、き、筋肉とか？」

「俺は見とれるぐらいの筋肉量はない」

「じゃ、じゃあ、顔とか？」

「いつも見てるだろ」

「じゃあもう！パンツとか！」

「言つてて恥ずかしくないか？というか変態か？」

シャルルは指摘されたあと、自分の言ったことに恥ずかしくなり顔を真っ赤にして呟いた

「・・・パンツだけの映司に言われたくない・・・」

あつちを向いて着替えだした映司

最近は熱いため半袖の生地が薄いやつを着る

(どうしよう・・・なんだか僕、えっちな方向に向かっている気がする)

顔を真っ赤にして着替えを再開したシャルルに悲劇が起こる

考え事をしていたせいかシャルルがズボンに足を引っかけてしまい
転んだ

その音を聞いて後ろを見るとシャルルが地面に顔をつけて倒れて
いた

しかも脱ぎかけのズボンの状態で、つまりパンツが丸見えというこ
とだ

「!?!??.?」

思考回路が停止する

シャルルが顔をあげて今の状況を見た
すると、顔がさらに真っ赤になり

「ぎゃ
」

悲鳴を上げようとする

そこで正気に戻った俺はシャルルの口を塞ごうと走ろうとしたとき
自分のベットの角に小指をぶつけて痛みながら転倒。悲鳴を上げよ
うとしたシャルルは下半身のお尻の部分に何かのし掛かるのを感じ
見ると、映司がお尻にうずくまっているのを見て頭から湯気がで
るくらい顔を真っ赤にして反射的に足を映司のちょうど鳩尾（本
人は気づいていない）を蹴り飛ばし「ゴハッ!？」と言ってから動
かなくなりシャルルが様子を見ると意識が飛んでしまったらしい

気絶した映司をベットに戻し、僕はベットのまだ湯気の出る頭を隠
しながら考え事をしていた

『ここにいろ』

前に映司が言ってくれた言葉

そんな言葉は生まれてはじめて言われた

強引な言葉だけど、絶対離さないと言っている風にもとれる

映司は僕の考えている以上に強い

殺しかけたラウラにもすぐに手を差しのべ気遣い、僕の悩みも解決策を提示してくれた

「映司といれば変わるかな？」

気絶しているであろう人物に問いかけるも答えは返ってくるはずがない

「・・・寝ちゃおう」

目を瞑った

すると、

「変わるさ」

妄想ではない声を僕は聞いた

見ると映司は気絶したままだが

「映司って演技へたくそだね」

ふふつと赤く頬を染めながら呟いた

映司は仰向けに寝かせたはずなのに僕に背を向けていた

それだけで起きてるってわかるよ。映司

学年別トーナメントが始まる日の当日

男子しかいない更衣室で俺たち三人は学年別トーナメントの組み合わせを決めるモニターを見ていた

一夏には一応シャルルが女だつて伝えておいた

シャルル、一夏の連携が崩れないように特訓をする前に、最初は戸惑っていたがなんとか受け入れてくれた

「鷹代、少し話がある」

制服姿のままの俺を織斑先生が呼び出した

「なんですか？」

「学年別トーナメントになってから言うのは私としても反対だったんだが、上からどうしても言われてな」

「は、はあ」

状況がいまいちよくわからん

「今回のトーナメントにも前回のアレが来るかもしれないという話だ」

アレか・・・

「無人機のことですね」

「まあな。その警戒を怠るなという指令だ」

「でも、それは俺になんの関係が？」

「関係はない」

きっぱりと言われた

「しかし、私としては警戒するべきはこれだと考えている」

織斑先生の手のひらにはエックス状に割れた

蜘蛛をかたどったメダルがあった

「コアメダル・・・」

それを前回トラトラで破壊したがおかしいと思っていた
俺が知っている情報からコアメダルは紫のメダルの力を使ってやっ
と破壊できるのに

それを俺は黄色のメダルのコンボで破壊した
明らかにおかしい

「これを解析したがわからない部分が多くてなこれがもしまた使わ
れれば次はどうなるかわからん。というわけで不本意だがお前にも
手伝ってもらいたいな？」

コアメダル関係には同じコアメダルを使用する俺に任せれば手っ取
り早いし、IS学園側としては無人機を警戒したいらしい

「わかりました」

そう言うて場をあとにした

更衣室に戻ると一夏とシャルルが驚いていた
俺もモニターを見ると

「織斑一夏、シャルル・デュノアペア対ラウラボーデヴィツヒ、篠
ノ之箒!？」

映司たちのいる更衣室から反対側の女子が使う更衣室の冷気を放つ
一角

『許すことから始める』

あの日、鷹代映司が言った他人を許すこと
自分も織斑一夏のことを許せるだろうかとずっと考えてきたがト
ナメントの大戦を見て

(やはり私はあの男を許すことはできない)

ラウラ・ボーデヴィツヒの決意は揺るがなかった

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃああなたによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合が開始された

「叩きのめす」

「フン、あの黒いIS使いなかなか欲望を持ってるな」

緑色のスカーフを腰に下げた女性がモニターを見る

現在、一夏とラウラ、シャルルと箒の一对一の戦いを繰り広げていた

「一度人間をいれたままこれを取り込まさせるか」

手には蟻のレリーフのメダルがある

「面白そうだな」

突如、別の場所から声がした

「鷹代映司、オーズか・・・早いな」

ドライバーを腰につけメダルを差し込む

「お前と話すことはない」

左腕につけたブレスレットを触りながら左手をチョキにする

「私としても同じことを思ってるわ」

「変身」

『サイ・ウナギ・バッタ!』

「ハアアアアア・・・」

チヨキにした腕から緑の閃光が女を包む

そして、次に現れたのは緑色の鎧のISがあった

「これで決めるっ!」

零落白夜を発動した俺は、ラウラへと直進する

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが・・・
それなら当たらなければいい」

ラウラの慣性停止能力（AIC）の拘束攻撃が連続で襲いかかる。
右手、左手、そして視線。それらの目に見えない攻撃を俺は急停止・
転身・急加速でかわした

「ちよろちよろ目障りな・・・!」

立て続けの攻撃にワイヤーブレードも加わり、その攻勢が熾烈を極める。しかし、こっちだって何も一人で戦ってる訳じゃないのだ

「一夏！前方二時の方向に突破！」

「わかった！」

射撃武器でラウラを牽制しながら、俺への防御も抜かりがない。つくづく、シャルルと組んでよかったと思う。もし敵だったら十分持つかどうか怪しいところだ。

「ちっ・・・小癪な！」

ワイヤーブレードをくぐり抜け、俺はラウラを射程圏内へと収める

「無駄だ。貴様の攻撃は読んでいる」

「普通に斬りかかれば、な。それなら！」

俺はそれまで足下へと向けていた切っ先を起こし、体の前へと持つてくる

「!？」

斬撃が読まれるなら、突撃で攻める。読みやすさは変わらないにしても、単純に腕の軌道を捉えにくいはずだ。線より点の方が、捕まえるには圧倒的に難しい

「無駄なことを！」

ビシッ！と全身の動きが凍り付く。A I Cの網が俺の体を完全に固定した

「腕にこだわる必要はない。ようはお前の動きを止めれば」

「・・・ああ、なんだ。忘れているのか？それとも知らないのか？俺たちは　ふたり組なんだぜ？」

「!？」

ゼロ距離まで迫っていたシャルルが、素早くショットガンの六連射を叩き込んだ

一夏とシャルル対ラウラの激闘するアリーナの会场上空では別の闘いが繰り広げられていた

「うああああ!!」

緑のI Sにアリーナの上空まで運ばれた俺は絶賛会场上空を落下中それを笑いながら見ている緑のI Sに

「こんの野郎!!」

ウナギウィップを飛ばすが避けられる

「そんなワンパターンな攻撃じゃあ空を飛ぶ私には届かないわよ！」

アリーナの屋根部分に降りるがあいつを倒す打開策がない

(人に対してコンボを使うわけにいかないがどうする?)

上空を飛ぶ緑のISは両腕の装甲から爪のような先が丸まっている
剣を出す

「そつちから来ないからこつちから行くよ！」

緑のISが急下降する

俺は両足にバッタの力を注ぎ接触直前に跳びウナギウィップを緑の
ISの肩の部分に絡ませるが

「ふふっ、かかったな」

「なに!?!」

緑のISの背中の中装甲から腕についている剣のような先の丸まった
黒い物体が出てくる

「バチバチいくよ!」

黒い物体から高圧の電流が流れる

「ぐああああ!」

電流に耐えられずウナギウィップが外れ地面に落下する

「ぐはっ！」

幸いここには人がおらず被害はない

(くそっ！飛べないのが仇にあつたか!?)

立ち上がると緑のISが止めを指すといわんばかりに黒い物体に電流を込める

「じゃあ死んで!!!」

俺に向かって急下降を開始する

しかし、緑のISは俺に攻撃を浴びせられなかった。なぜなら、緑のISの体にワイヤーが巻き付けられたからだ

「なっ!?!」

「お前……」

カッターウィングを使い空を飛ぶバースがいた

「助っ人登場」

へたくそと激突と助っ人（後書き）

次回、緑のISに異変が！

ウヴァとサゴースとガタキリバ（前書き）

今回はコンボが二回使用されます！

ウヴァとサゴソとガタキリバ

「くそっ！こいつ！」

ワイヤーから逃れようとじたばたしたり貯めた電流をワイヤーに流したりするが

「残念、無念、また来週　ワイヤーは耐電製でっすよ」

クレーンアームをハンマー投げの要領で振り回し投げる俺の方向に

「ハアアアア！」

サイヘッドの力を解放して向かってくる緑のISに叩きつける

「があああああ！！！」

巨大なハンマーに叩きつけられたように地面にめり込む
しかし、シールドによって守られていたため大してダメージはない
が隙はできた

『スキヤニングチャージ！』

ウナギウィップを緑のISに絡ませた真上に飛ばす

緑のIS使いは避けようとしたがそれは叶わなかった

バッタレッグの跳躍力を最大にして翔んだからだ

最大にしたおかげで矢のように速くサイヘッドからは角の先端から

灰色のエネルギーが形成され、緑のISの装甲のど真ん中に激突した

「汚ねえ花火だ」

カッターウィングで空を飛ぶバースは呟いた

「ハッ！」

地面に華麗に到着した俺の後に動かなくなった緑のISが落っこちた手加減をしておいたのでシールドエネルギーも健在だがその判断が裏目に出た

「くそが・・・手加減なんてしやがって・・・強者気取りが！」

さっきまでの余裕な表情から怒りの表情へ変わっている緑のIS使い

「ナメてんじやねえぞオオオ！！」

緑のIS使いが咆哮すると体が緑色に発光。刹那、体が銀色のメダルに包まれさっきまで大きな巨体が見るうちに小さくなり背丈がオーズと同じになる

そして、現れたのはクワガタの角を持つ両腕に爪のような先が丸まっている刃がついた怪人グリードのウヴァ（体内メダル一枚バージョン）

「・・・これがTGシステムか・・・」

ウヴァもどきが自分の体の変化を見て言う
その後ろからバースが近づき

「先手必勝！」

シヨベルアームで殴ろうとするがウヴァもどきの片手で止められる

「雑魚は失せろ！」

空いている左手でバースの体を殴り蹴り飛ばす

「ぐあああああ！」

たったそれだけなのに数メートル飛ばされる

それを見てウヴァもどきがもう一度体を見て叫ぶ

「この力・・・最高だ!!！」

そして、俺に走り込み、俺は爪で引っ掛かれ火花を散らす

「ぐはああああ!!！」

ゴロゴロ地面を転がる。その上にウヴァもどきが馬乗りになりさらに自由を奪われる

「くっ、見かけによらず強い・・・ッ！」

爪を弄びながら俺の顔面に向かって何度も腕を降り下ろす

「オラッ！オラッ！！オラッ！！！」

地面はウヴァもどきに破壊されていく

「くそっこの!!！」

バッテリーをどっにか当てようとするが当たらないどころかウヴァもどきは俺の足に目をつけ爪を降り下ろした

「がああああああ!?!?!?!」

足が切られ激痛がはしる

「いいよ。その悲鳴!次はどこを壊してほしい?」

顔を近づけ嘲笑うように言う。そして、言った

「あなたの頭」

《Cell Burst》

「あ!?!」

すると、さっきまで馬乗りしていたウヴァもどきの頭にエネルギー弾がぶつけられ飛ぶ

「メダル入れ替えるなら今だよ」

バースバスターを捨てる

セルメダルをベルトに入れレバーを回す

《Breast Cannon》

バースの胸の装甲からブレストキャノンのパーツが飛び出て再構成される

「あと、アイツうざいからこれの最大出力で撃つからよろしく」
セルメダルを二枚入れる

《Cell Burst》

アレ完全にキレてる

まあ、さっさと決めたほうがいいのはわかるけど
メダルを灰色のコンボに変えオースキャナーを通す

『サイ・ゴリラ・ゾウ！サゴーズ！ザゴーズ！！』

「うおおおおおお！！」

ゴリラアームで胸を叩きドラミングをする

すると、フラフラ立ち上がるウヴァもどきの体が宙に浮く

「な、なんだ！？」

訳がわからないように宙でもがくがもう手加減しない

『スキヤニングチャージ！』

足を揃え宙を舞い急落下する

地割れのようにひびが入った地面の先にはウヴァもどき
それが強力な重力で引き戻されオーズに引き寄せられる

「充填完了！」

《Cell Burst》

バースの目が赤く光りブレストキャノンから高圧のエネルギーが発射される

「ごああああああ！！」

ブレストキャノンが直撃したウヴァもどきは苦しみの断末魔をあげた
・・・なんか可哀想だけでしょうがない
サイヘッドとゴリラアームに力が集中する

「ハアアアアア！！！」

ズドオオオオン！

地響きが起きたけどアリーナ側大丈夫か？
はでに爆発したようだが人は来る気配がないというよりアリーナで何かあったらしい

「大丈夫か？あいつら」

一夏とシャルルを気遣うが後ろから何か飛んできて反射的に後ろを向いて手でとる

受け取ったのは二枚のメダル
鬼みたいなレリーフのメダルとタカメダルに似た金色のメダルの二枚
そして、爆発した炎の中から銀色の鎧を着た
片腕がハサミの怪人・・・なんだ？

オーズの本編しか見てないから映画登場の敵の名前がわからない

「お前らは一体なんなんだ？」

とりあえず質問してみる

「我々がお答えするとても?」

まあ、簡単には吐くわけないか。

「なら、力づくで聞くさ」

「ふっ、恐ろしいことを言いますね。ですがここは退かせてもらいましょう」

銀色の鎧の怪人の体からセルメダルが大量に削ぎ落ちる。すると、中から黒いISが姿を現した

「そのメダルは彼女を負かした記念です。受け取っておいてください。では」

黒いISの背中からセシリアと同じようなビットが出て周りの土を舞い上がらせる

砂ぼこりが舞い辺りが見えにくくなる

「逃げたか・・・」

砂ぼこりが消えたあと周りを確認したがなにもない

少し歩いただけで体から力が抜け、変身も強制解除された

「はあ、はあ、はあ、はあ」

片膝をつく。身体中の脱力感が尋常ではないしウヴァもどきに切られた片足も痛い

バースの榊原日奈も同じように変身を解除して休んでいる。だけど、

休んではいられない

あれだけの爆発を起こして教師一人来ないのはおかしい
疲労した体を無理に動かしてアリーナへ向かう。途中、倒れそうになる。それを榊原日奈が受け止めた

「よくもまあがんばるね。ほら肩貸すよ」

「ありがとう」

アリーナに來るとISを装備した教師が黒いISを取り囲み、そのそばにはシャルルと篠ノ之箒がいて、さらに、黒いISと真つ正面から立つ一夏の姿がいたが、たった今黒いISを一夏が真つ二つにしてラウラ・ボーデヴィツヒを助け出す瞬間だった

「事件解決じゃねえかよ」

ふうと息をついたが事件はここで終わらなかつた

突如、真つ二つにされたISが再び動きだしラウラ・ボーデヴィツヒを取り込んだ

ラウラ・ボーデヴィツヒは手を伸ばして助けを求めたが黒いISはそれを遮った

そして、アリーナの至るところからセルメダルが現れ黒いISに取り込まれる。大量のセルメダルを取り込んだ黒いISは巨大な足を生やし空中を浮き始めた

「な、なんだよ。あれ？」

突然の事態に辺りが騒然とする。そして、巨大なIS？は中から何かを排出し始めた

見るとさっき一夏が倒したそれが大量に地面に足をつける

教師陣はそれに闘いを挑むが数が圧倒的に多い。それにISを部分的な展開しかしてない一夏と武器も何も持っていない丸裸状態のシヤルルと篠ノ之箒を守りながらの戦いになっている

「榊原日奈、まだ変身できるか？」

「できるに決まってるけど、まさかまたやるの？」

「まあな」

緑のメダル三枚を出し呟く

「もってきてくれてくれよ俺の体」

気絶覚悟の変身が始まる

敵が多すぎる。俺は雪片式型を時には振り時には防ぎを繰り返す。だが、それでも数は減るところか増える一方。シャルルから貰ったシールドエネルギーもあと僅かこのままじゃあやバイ!と思ったその時

『クワガタ・カマキリ・バッタ!ガクガタガタキリツバ! ガタキリバ!』

聞き覚えのある電子音のあと、沢山の緑のオーズが駆け巡り偽者を倒してゆく

「え、映司?」

緑のオーズは答ええない。代わりにアリーナの出入り口から他の声が聞こえた

《Cutter Wing》

「じゃ行くよー」

「おわああああ!」

バースとかいうISが叫び続けるオーズを運んでいく

「俺!高所恐怖症なんだよ!こ、恐いいいい!」

「あまりじたばたしてると落としちゃうよ?」

ピタリとじたばたと叫ぶのを止めるオーズだが体は微かに震えていた

「じゃあいくよ……それっ！」

緑のオーズをバースが黒い巨大なIS?に投げる

《Cell Burst》

そのあとすぐにバースバスターを構えて高圧縮のエネルギーを撃つ。エネルギーはオーズより速く黒い巨大なIS?に当たり大穴を開けた。そして、オーズはその中を潜り抜けていった

……暗い

黒いIS『シユヴァルツエア・レーゲン』に囚われたラウラはそこにいた。眼帯は外れナノマシンを移植した金色の瞳が露になっていた。そして、蠢くだけのそこに別の音が響いた

「ラウラアアア!!!」

その声の方を見ると蠢く壁を切り裂いて現れた。一夏とは違う強さを持つ男がいた

巨大な黒い蟻？の中に飛び込みラウラ・ボーデヴィツヒを探す。しかし、切つても切つてもセルメダルが噴き出すだけで見つからない

「くそっ！何処だ！ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

すると、暗い中で声が響いた。ラウラ・ボーデヴィツヒの声だが弱い。あのラウラ・ボーデヴィツヒが弱く今にも消えそうな声を発する。そこで脳裏に死ぬ以前の世界で見た幼馴染みの死が浮かび上がった。あのときも彼女は弱い声を発して死んだ。自然と手に力が入る。二度とあんな状況は起こさない。例え世界が変わっても変わらない思いを心に抱いて生きてゆく。人生の途中下車は俺にはない

「ラウラアアア！！！」

カ一杯セルメダルの壁を切り裂いた

すると、黒いIS『シュヴァルツェア・レーゲン』とそれを装着したラウラを見つけた

「えい、じ？」

弱々しい声で訊く

「そっだ」

カマキリソードでシュヴァルツエア・レーゲン切り裂くと簡単に装甲が外れた。そして、倒れるラウラを受け止める

「ラウラ・・・」

「え、い、じ・・・」

ラウラのいつもしている眼帯がなくなっていることに気付き

「金色の目、似合ってるぞ」

「・・・！」

初めて言われた言葉に恥ずかしくなる

「だから、その目を閉じるのはまだ早いぞ。もっと多くの世界を見なきゃいけないからな」

脱出しようとしたとき後ろの無人のISシュヴァルツエア・レーゲンが独りで動き出す。コアメダルが中心となりISとセルメダルが一つになる。その姿はラウラが憧れを抱く女性、織斑千冬の姿になる。そして、問う

『チカ、ラを欲、するか？』

その問いをラウラではなく俺が答えた

「ほしいさ。だけど、そんな力はいらない。ただ破壊するだけの力

になんの意味もないからな」

オースキャナーをオーカテドラルに通す

『スキャニングチャージ!』

「映司……」

「つかまってる、ラウラ。今お前の殻を突き破る」

黒いISは巨大な剣を振りかざす

俺はそれを敢えて真つ正面で迎え撃つ。剣に触れるか触れないかの距離でバツタレグの力を発動。振りかざされる剣の隙間を抜い黒いISの真上からガタキリバのキックをする。

「ハアアアアア!」

黒いISの中にあつたコアメダルは中心からヒビが入り割れた。コアメダルが割れた瞬間、黒い巨大な蟻から現れた黒い物体たちは消えた

「はあ、はあ、はあ、はあ」

地面に降り立つと一夏やシャルル、篠ノ之箒がやって来た

何か言ってるようだが聞こえない。まあ、コンボを今日だけで二回使ってるしな

腕のなかには気を失ったラウラがいるから倒れるわけにはいかないその後、教師陣が気を失ったラウラを引き取った。当然、俺は変身を解除した状態で引き渡したけど

ウヴァとサゴースとガタキリバ（後書き）

次回、動き出す黒幕たち！

設定 サブキャラ編(前書き)

テキストに書いたのであまり良くないです

設定 サブキャラ編

日奈

年齢16

IS学園にシャルル、ラウラの転校後に来た転校生。鴻上会長の会社から鷹代映司を助けるために送り込まれる。特殊全身装甲IS『Birth』の装着者。後藤先生いわく『問題児』。並外れた格闘センスを持ち、出力が第三世代機と同等のバースを第四世代機と同等の戦闘データを叩き出す

後藤慎吾

年齢23

IS学園に社会科教師としてやってくる。バースのメンテを行う

伊達章

年齢32

IS学園の保健室に勤める。専用機持ちと鷹代映司、日奈のメンタル面のケア担当

Birth バース

セルメダルをエネルギー源として稼働する特殊全身装甲IS。セルメダルがエネルギー源なのでコアはない。バースの機能は第三世代機と同等で装着者・日奈が装着したときの戦闘データは第四世代と同等。さらに、バースには様々な機能が付いていて戦闘に応じた機能を発動する

目覚めと影と本当の名前（前書き）

黒幕たちの暗躍が少々あります

目覚めと影と本当の名前

「う、あ……」

目を覚ますと私はベッドの上にいる

「気がついたか」

私の横には私が敬愛してやまない教官こと織斑千冬がいた

「私……は……?」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらく動けないだろう。無理をするな」

千冬はそれとなくはぐらかしたつもりだったが、そこらさすがにかつての教え子。簡単に誘導されてはくれなかった

「何が……起きたのですか?」

無理に上半身を起こすラウラ

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだかな。」

「VTシステムは知っているな?」

とある研究所の専用ハッチに黒いISは降り立った。ISをしまい現れたのは冬でもないのに白いジャケットを身に付けた男・・・のような女だった。そして、その女性に抱えられた緑のスカートを腰にぶら下げた女性がいた

「MS・マギ。ウヴァを連れ帰ったぞ」

緑のスカートの女性は実験台のような台に乗せられる

「ご苦労様」

紫のスーツを身に纏ったマギという女性は左手にISを展開しスカートの女性の上にかざした。すると、体から緑のメダルが八枚飛び出した

「あああああ！」

飛び出すさいにスカートの女性が苦しんだが、彼女たちは気に止めなかった。緑のメダルを専用の装置に取り付ける

「やはり時期が早すぎましたか」

画面にはスカートの女性の写真とそのIS、緑のメダルの写真がありその横には音波のような波の羅列があった。結果はNo Agreement。不一致だ

「やはりISがまだ彼女の個性を最適化できていないか」
パーソナリティー

「そのようですね。そのためTGシステムも不完全な姿で起動したようね」

白いジャケットを着た女性は実験台の上に乗る彼女を見て

「しばらく動けそうにないな」

「まあ、ここはしばらくIS学園から手を退きましよう。カザリがメズール、ガメル、ISに相応しいコアを持ち帰るまで」

時を同じくある国の施設では何者かの襲撃が行われていた
量産機のラファールリヴァイヴが何機も出撃するが黄色のトルネードに巻き込まれ撃沈する

「ふふん。みいつけた」

黄色のISを身に纏う少女は施設の一角に大量のチューブで現在も調節中の機体を発見した。外装は重々しい鎧で仮機体名クアンタはそこにあつた

「じゃあもらってゆくよ」

チューブを強引に引きちぎり連れ出した

所変わりISS学園では

「一夏、七味取って」

「はいよ」

「ありがとう」

「……………」

事件の事情聴取を終えたばかりの四人は食堂終了ギリギリの時間で食事をしているが二度のコンボに事情聴取のミスマッチにより死闘を繰り広げた二人より疲れた映司がいた。今日は珍しく大量に食事を取るつもりが

「映司、箸持ったまま寝てるぞ」

「ハッ！」

「さつきからそればかりだよね、映司……」

ハハハと苦笑しているシャルル
ダメだ。眠すぎる

ゴッソ

「痛った」

机に頭をぶつける。ほんとダメだ。今日はもう寝よう

席を立ち上がり部屋に戻ろうとしたがなにもないところでもつまずき誰かに倒れかかってしまった

なんだ？この柔らかい感触は？ゆっくりした動作で離れて確認すると山田先生だった

「た、鷹代君までそんな・・・織斑君どっちを取れば・・・」

「映司のスケベ」

「あの、シャルルさん？これは不可抗力であってな・・・」

「ふん。どうだか」

なんか山田先生一人で何かにトリップしてるし、シャルルはご機嫌斜めだけどもあいいや

フラフラしながらさっきいた場所に戻ると山田先生が我に戻り話をした

「あの、それで三人に朗報です」

山田先生が両手拳を握りしめてガッツポーズ。そのとき胸も揺れたらしい。俺は眠くて白目むいてたが

「なんとですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁で

す！」

z z z

あとのことは寝たので覚えていません

気がついたら着替えを持って脱衣場にいた

「ここはドコ？」

辺りを見渡して確認してもやっぱり脱衣場
一体どうなってる！？

「え、映司。起きた？」

「え、う、ああ」

そのあとのことをシャルルから聞いていたたまれなくなつた

「すまん。シャルル。俺の着替えやらなんやらを持たせたりして」

「別にいいよ。映司も早く入つた方がいいよ」

「そうだな。すまん」

こうして俺は大浴場に入つた

中は広がつた。というかそれしか言えない

俺は体を洗い風呂に入った

「あゝあ、傷に染みるー！ー！」

すかつかり忘れてた！今日伊達先生にシャワーは控えるように言われたんだったあ

「い、痛い・・・」

一人風呂の隣で膝をついてうなだれていた

「どうするよ、俺・・・ハッ！閃いた！」

キュピーンと効果音が頭のなかで再生され今も付けている腕輪を起動した

目がオレンジ色に発光。足の傷に意識を向けるとみるみるうちに怪我が小さくなる

その間、呼吸をしないのでぶはっ！と息を出したときにオレンジ色の眼の発光も終わる

「これなら少し染みるくらいで我慢できるな」

再び風呂の中へ。今度こそ傷ではなく体全身に風呂のお湯が染みる

「いいお湯だ〜」

傷の痛みではつきりとした意識が再びかすれ始めた

「おー、眠い〜。そろそろ上がるか」

意識がかすれ始めている今、風呂に長居すればのぼせてしまう

風呂から上がるうとしたとき

ぴたぴたぴたと濡れたタイルの上を歩く音がした

シャルルの話では一夏は先上がりもういないはずならばこの足音

は？

変な汗がブワツと噴き上がりチャプンとお風呂に再び浸かる
お風呂の中で回れ右をしてこの状況をどう乗り切ろうか模索した。
そもそもなぜシャルルがまだ俺が入っていることを知りながら大浴
場内に入ってきた？まずそこがおかしい。まさか、思った以上に長
居したのか？それとも・・・
疲れきった体で考えるが答えは見つからない

「映司？」

ビクツと体が震え後ろは振り向けないのでお風呂の中で体操座り

「な、なにかね？シャルルくん」

いかん。俺は重症だ

「映司・・・なにかおかしいよ？」

「自分でもわかってる。そして、おかしいのはこの状況だ。なぜシ
ヤルルがここにいる。そもそもなんでこんな展開が俺に？これがバ
レたら、ラノベ主人公のように殺意剥き出しのヒロインに追われる
のか？そもそもヒロインってだれだ？で、なんのようだシャルルー
ノ」

「ものすごい考えてるけど名前が間違ってるよ、映司。」

「えっ、すまん。シャルロット」

「・・・どうして。その名前を？」

「また間違えたのか？すまん。リシャーナ三世」

「なんか色々入ってるけど、映司はそんなに一緒に入るの、イヤ・・・？」

イヤではないが健全な男子としてはこんな不純な異性の交流は変な状況を生み出しかねない。ならばこじは！

「イヤではないじゃにゃいけど・・・」

あっ

「映司・・・今噛んだよね？」

ブクブクブク

「え、映司！？なにやってるの！？溺れちゃうよ！」

シャルルが慌ててお湯の中から引き上げる

「映司、一体なにやってるの・・・」

プシュー

「映司！？今度は頭から湯気が出てるよ！！って、きゃー！！」

俺を引き上げたと思えばシャルルは引き上げたときに体が密着していたことを知り再びお風呂の中に・・・なんて鬼畜な数分間、間を開けたあとシャルルが体操座りする俺の背中にもたれかかった

シャルルの背中が俺の背中に触れたときの心臓のバクバクが半端じゃなかった

「ねえ、映司・・・話があるんだけど」

「そ、そうか！なら！部屋で・・・」

「とっても大事な話だから映司に聞いて欲しいの・・・」

「・・・」

また間が開く。そして

「その・・・前に言ってたこと、なんだけど」

「前って言うと・・・学園に残る残らないの話か？」

「うん。僕ね、ここにしようと思う。僕にはまだここだって思える居場所を見つけられていないし、それに・・・」

「それに？」

「映司がここにいろって言うてくれたから。そんな映司がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そうか」

俺は少し嬉しくなった。こんな俺の言葉でも救われる人がいることに

「それに、ね。もう一つ決めただ」

「もう一つ?」

「そう。僕のあり方。映司が教えてくれたでしょ」

「なんの話だ?」

「ふふ、演技へたくそなのも分かっちゃったしね」

「な、なんのことだ?」

「いいよ。こつちの話だから。それでね僕の話はこれからシャルロットって呼んでくれる?」

「えっ!?まさか、それが本当の?」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかった シャルロット」

「うん」

そして、今気づいた。シャルロットがさっきから俺の背中にくっついていていたことに

ブクブクブク

「え、映司!?ほっ、本当に気を失ってる!早くお風呂から上げな
きゃ!!--!」

すまん。最後まで迷惑かけて

目覚めと影と本当の名前（後書き）

今回出てきたISの試作機『クアンタ』はオリジナルISです。補足説明しますとこの試作機はラウラのレールカノンなどの大型兵器を大量に装備することを前提としたISで、その重々しい姿にかかわらず第3世代の中ではトップクラスに入るスピードを誇ります。名前には深い意味はありません

次回、束さんが久々に登場

土下座と暗躍と椿（前書き）

気付いたらPVが10000を超えてた

土下座と暗躍と椿

朝のホームルーム。コンボの疲れは大体消えた。

「み、みなさん、おはようございます……」

山田先生はなぜかフラフラしてる。どうしたんだ？

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生と
いいですか、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……」
騒然とするクラスに山田先生が入ってくださいと言うとスカート姿
のシャルル改めシャルロットが入ってきた

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願
いします」

クラスの全員がポカンとしたまま、頭を下げる。山田先生の憂いも
わかった気がするが何か嫌な予感が

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、鷹代君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

「……一夏」

「ち、違つぞ！ 幕！ 俺は先に風呂から上がった！ そのあと、映司とシャル　じゃなくてシャルロットと一緒に大浴場を出たって聞いている！」

「ご愁傷さま・・・俺

「映司いっ！！！！」

教室のドアを蹴破りお久しぶりの登場。 鳳鈴音さん

「死ね！！！！！」

ISを展開して衝撃砲をフルパワーで開放

咄嗟に腕輪の機能を発動。腕をカメラームに変える。ガードはするが衝撃は殺せないなので良くて窓ギリギリまで悪くて窓から転落打撲ですむか死ぬかだ。そう覚悟したが衝撃がいつまでたっても来ない。見ると俺と鈴の間に割って入ったのはラウラだった
衝撃砲をAICで相殺したらしい

「あ、ありがとう。ラウラ」

この時、気を抜いたのが間違いだっただろう。ラウラが俺の胸ぐらを掴み、引き寄せたあと唇を奪われた

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

突然の事態に俺の処理機能が追いつかない。しかも長い。フレンチキスより時間が長い。そして、やっと離れたと思えば

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「……???'」

俺の処理機能はまだこの事態を飲み込めてまっせーんH A H A H A

「あ、あつ、あ……！」

口をパクパクさせて声にならない声をあげている鈴。

「アンタねえええつ！！！」

再び衝撃砲が開く

もう話し合いで解決できるとはもう思えない。だから、教室の後ろ側出口から脱出を　！

ビシュンッ　！

鼻先をレーザーがかすめる。ギギギと首を回すと

「ああら、映司さん？どこにおでかけですか？わたくし、実はどうしてもお話ししなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

またまたお久しぶりの登場のセシリア・オルコットさんじゃないですか……

後退りするとぼすつと誰かに当たる
振り返ると

「にこっ」

シャルロットがいた

ふふ・・・俺の回りは敵ばかり、さあどうしよう・・・いや、決ま
ってるか・・・

「さらば!」

パリーンと窓ガラスを突き破り二階から飛び降りる途中山田先生が
何か言った気がしたが気にしない
降りるとそこには

「あれ？榊原日奈？」

バースを装着した榊原日奈がそこにいた

「知ってる〜映司〜。ぼくは朝昼晩の三食より面白いことが好きな
んだ〜」

後ろから三機の鬼神が舞い降りる

「あははは〜そ、それは初耳だな〜」

後ろでジャキジャキと音がする

目の前のバースもバースバスターを構える

「誰に頼まれた？」

「ん？そこのツインテール」

鈴か・・・。二度のコンボの疲労が抜けきれない体で走ってもすぐ
捕まるし、ここにいれば命はないしあとの織斑先生の出席簿アタッ
クも何回かやられるだろうし

どっちも死亡確定じゃね？俺
ならば一か八かやってやるっじゃん！

「すみませんでした！！」

やっぱ土下座しか思いつかなかった。
その後、蜂の巣になりかけました

「むーん……」

とある秘密ラボに篠ノ之束はいた

「てんちゃん。遊びに来ないかな」

このラボに訪ねてきた一人の人物を思い浮かべた

「てんちゃんに頼まれた物も完成したし、暇だし」

ぱらりるぱらりる

「こ、この着信か音はあ！トウッ！」

携帯電話にダイブする

「も、もすもす？終日？ひねもす」

「……………」

ぶつっ。切れた。

「わー、待つて待つて!」

再度携帯電話が鳴る

「はい、みんなのアイドル・篠ノ之束ここに 待つて待つてえ
!ちーちゃん!」

「その名で呼ぶな」

「おっけい、ちーちゃん!」

「……はあ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

「何かしらん?」

「お前は今回の件に一枚噛んでいるのか?」

「今回 はて?」

束は首をひねる

「VTシステムだ」

「ああ、あれ?ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作
ると思うかな?私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ?すなわち、作

るものも完璧において十全でなければ意味がない」

「……」

「ていうか忘れていたけど、つい二時間ほど前にあれを作った研究所はもう地上から消えてもらったよ。……ああ、言わなくてもわかっていると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手をひねるより簡単　ていうかちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない？私だけ？あれ、おかしいなあ」

「そうか。では、邪魔したな」

「いやいや、邪魔だなんてとんでもない。私の時間はちーちゃんのためならいつでもどこでも二四時間フルオープン、コンビ二なんか目じゃないね。五〇六〇喜んで！」

「……では、もう一つ聞きたい」

「はいはい。なんなりと！」

「ここ最近の二つの事件のIS変化はなんなんだ？」

「ああ、あれね　ちーちゃん。世界の歴史は穴だらけって知ってた？」

「当然だろう。大昔の出来事などいちいち確認できないからな」

「うんうん。それでね。歴史は歴史でも裏歴史っていうのがあるの」

「……」

「その裏歴史を調べるといいよ。東さんも正しく把握できてないからちーちゃんの知ってることしかわからないよ。」

「・・・では、またな」

ぶつっと今度こそ電話は切られた

「やあ、久しぶりに声を聞いて東さんは嬉しかったねえ。ちーちゃんは相変わらず素敵ングだよ。夕日の向こうには行かないでね」

すると、携帯電話に新しい着信がくる

東は頭につけた折れたウサ耳をビーンと真っ直ぐに立つ

「やあやあやあ！久しぶりだねえ！ずっとず　　と待っていたよー！」

「。。。姉さん」

「うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？君だけのオンリーワン、代用無きもの（オルタナティブ・ゼロ）、ハイエンド、オーバースペック、箒の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能にして規格外仕様。そして、白と並び立つもの。その機体の名前は

『紅椿』

」

土下座と暗躍と椿（後書き）

次回から臨海学校編。

組み合わせと体力切れと期待はずれ（前書き）

PVも1000000にいきなす

組み合わせいと体力切れと期待はずれ

窓の外から朝日が細い光の線をカーテンの隙間から差し込む
布団を被って寝ていた俺は何か足りないと思はれた頭で思う

(抱き枕はどこに・・・?)

抱き枕と言ってもサイズは小さく俺の上半身くらいしかない抱き枕だ
目を閉じたまま手で探す。すると、柔らかいものを掴むのを感じた。
このとき、俺はてっきり抱き枕が見つかったと思っただが違った
何も知らない俺はいつものように思いつきり抱き締める

「ふにゃ〜」

男なのに変な声をあげた

(なんだろう・・・いつも以上に抱き枕がスベスベして柔らかい・・・
・気持ちよく二度寝でき)

「ほう。そんなに私を抱き締めて幸せか？映司」

寝ぼけで重かった目蓋がクワツと開く

目の前には少し顔を動かせば夫婦の幸せな目覚めみたいな距離にラ
ウラの顔があった

そして、驚く速さでベットから転がり落ちる

「ああああ！頭打ったあああ・・・」

打った頭をさすりながら起きると若干部屋が薄暗いがわかる

「ラウラ・・・なんで服を着ていない・・・」

「おかしなことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだと言いたぞ・・・
というか凝視するな恥ずかしい・・・」

だったら服を着ろ！そして、間違ってる！

ズガン！と後ろで雷と合わせて効果音が頭のなかに響く
そして、俺は頭を抱えて眩く

「あゝ頭が痛い」

「そうかならいい方法があるぞ」

「いい方法？」

すると、高速で俺の後ろに回りヘッドロックを決めてきた

「ああああ！頭がああああ！」

「こうすれば頭の痛みもすぐに消えるぞ」

「だからって物理攻撃を仕掛けてくるな！」

そうかと言って離れた

あと、服を着てくださいラウラさん・・・

「ってまだ六時過ぎかよ・・・もう一度寝よ」

布団の中に潜る

「では私も」

そう言っって何食わぬ顔で布団に潜る。

俺の布団に

「ちがあああう!!!」

布団を蹴飛ばす

「なんだ？嫁よ。そんなに私のあられもない姿が見たいのか？」

「そう思っなら服を着る！そして、部屋に戻れ！」

「む、妻である私を追い出す気か？」

断固としてベットから退こうとしないラウラ

「動かないなら力づくで！」

そう言っって手を伸ばすと伸ばした手を絡めとり俺の片腕をラウラの足で拘束され技を決めてきた

「お前はもう少し組み技の訓練をするべきだな」

「し、しかし、そうだな。・・・ね、寝技の訓練をしたいというなら、私が相手になってやらないでもないがな・・・」

技を決めながら手を頬に当てて顔を赤らめながら付け足す

しかし、その一瞬の隙は俺は見逃さない

「いい加減にしろお！」

技を決められている方の腕を曲げてラウラを引き寄せ投げ飛ばす
しかし、ラウラも咄嗟の判断ながら部屋の一角に降り立つ

「ほう。嫁にしてはなかなかやるな」

「こつ見えても俺は柔道七段、空手三段、合気道十段持ちだな。軍
人に負けるつもりはないぜ」

「我が嫁ながら嬉しいぞ。こつも組み手の相手がいるのは」

「女だからって手加減はしないぞ」

「もちろんだ」

ジリツとお互いに様子を見る
そして

「「勝負！」」

そんなある日の早朝の出来事だった

「・・・疲れた」

スプーンを口に運びながら漏らした

「どうした？あれぐらいでもうへばったのか？」

「それもそうだけどなにより疲れたのは心だ」

「そんなに私といるのが迷惑か？」

棘のある一言をラウラが口にする

「いや、一緒にいる分にはいいが入浴中や着替え、寝込み中にくるのは少し控えてほしいだけだ」

「そうか。わかったできるだけ精進しよう」

すると、一夏と篠ノ之箒がやって来た

「おはよう。二人とも」

「おう」

「おはよう」

二人が席に座る。すると、二人が物珍しそうに俺を見る

「珍しいな。映司がカレー１つだけなんて」

「うむ。いつもなら十皿ぐらいたいらげそうなのに・・・」

「前にシャルロットに体壊すぞって言われてな。それ以来朝食の量を減らした」

言いつつ皿の中のカレーを食べ終る

やっぱり一皿だとそこまで腹がいっぱいじゃないな

「わああっ！ち、遅刻っ・・・遅刻するっ・・・！」

急いで食堂に駆け込んできたシャルロットがいた

「おはよう。シャルロット」

「あっ、映司。お、おはよう」

俺たちのいる席にはまだ二つ空きがあったので手招きした

「珍しいな。シャルロットがこんなに遅いなんて」

「う、うん、ちょっと・・・その、寝坊・・・」

「へえ本当に珍しいな」

食べるのに忙しいようでも歯切れの悪い受け答えをする。そして、若干避けてないか？俺を

「シャルロット」

「う、うん？」

「俺のこと避けてないか？」

「そ、そんなことは、ないよ？うん。ないよ？」

重要だから二回言いましたのか？

それにしてもシャルロットが俺を警戒してるような・・・

「なんかあつたのか？」

「え、な、なにもないよ！なにもない！」

「そうなのか？なんか隠してるようだけど」

「・・・な、なんでこんなに鋭いの？夢のなかだと物凄い鈍感だったのに」

「なんか言つたか？」

「な、なんでもないっ。なんでもないよっ！？」

釈然としないがまあいいか

カレーと一緒にいた水を飲む

キーンコーンカーンコーン

「うわぁっ！い、今の予鈴だぞ、急げ！」

そう一夏が叫んだが、俺たちはそこには既にいなかった

なぜなら、俺とシャルロットとラウラ、篠ノ之箒は猛ダツシユで食堂を出ていた

「お、置いていくな！今日は確か千冬姉 織斑先生のSHRだぞ
ショートホームルーム

「！」
すまない。一夏。俺は死にたくない。

「私はまだ死にたくない」

「右に同じく」

「ごめんね、一夏」

この三人も同じらしい。
あっ、閃いた。

途中で立ち止まりロケットスタートの体制に入る。遅れて走る一夏は首をかしげたが答えはすぐにわかるぞ。
腕輪が黄色に光る。

すると、両足に力が溜まる。お分かりいただけだろうか？現在、俺はチーターのメダルだけを使用した部分展開。脚力を上げてオリンピック選手も驚くスピードで駆け抜けてやる！

「いくぜえええ！！」

走り出した瞬間、猛ダツシユする四人をあつという間に抜いたはずだったが、最初の一步で部分展開が終了。
ボタンとその場に倒れた。そして、腹からぐゆるると鳴る

「・・・腹が減った」

その部分展開が強制終了した理由。それは・・・体力が足りない

「カレー１つだけでは保たない？」

この時、俺の遅刻 & a m p ; 死亡が確定した

現在俺は保健室にいる。なぜかって？それは織斑先生に死ぬかもしれないレベルの出席簿アタックを受けたからだ

「どうやってたらこんなになるんだ？」

伊達先生が俺の頭にできたたんこぶを見て呟きながら氷で冷やす

「・・・」

思い出すだけで身の毛がよだつ。あれは何度も喰らうものじゃない

「まあ、お前のその頑丈な体なら問題ないと思うけど、一応ここで休むか？」

「いえ、いいです。次の授業にも出れますから」

「そうか。まあ、無理すんなよ。あ、そういえば後藤ちゃんの授業どうだった？」

「後藤先生ですか？普通ですよ」

「良かった。後藤ちゃん、結構な仕事中毒でな休まないんだよ。部屋訪ねてもノートパソコン開いてバースのメンテに装備品のチェック、会社のプレゼンテーションの資料作りになんやらでな。たまには体を休めろって言っても聞きゃあしないんだよ」

「すごいですね。後藤先生は」

「まあ、な。だけど、適度に体を休めないと大好きな仕事も出来なくなるってわかってんのかな。・・・は、そういえば来週から臨海学校に行くんだった！」

なんか伊達先生って話がコロコロ変わるな・・・ん？

「水着どうしよう・・・」

特に気にしなかったがさすがに水着はもう買っておかなければ
そう思いながら保健室をあとにした

放課後、織斑先生に教室掃除の罰を受けていた。ちなみに、一人だ。こんなときに限って誰も助けてくれない。俺は友達が少ないです。

「誰か助けてくれないかな」

誰もいない教室で呟いた。たけど、その呟きが叶った

「映司、まだいる？」

行きなり現れたのはシャルロットだった

「シャルロット・・・お前部活は？」

「今日はなくてね。なんとなく手伝いにきた」

恥ずかしがるようなそんな笑みを浮かべる。たけど、俺はそんな表情以上に手伝ってくれることに嬉しさを感じてついシャルロットに抱きついてしまった

「え、ええええ映司!？」

顔を真っ赤にして言う。しかし、俺は構わずに抱きついた状態から離して肩に手を乗せた状態になる。ドラマのワンシーンならこのあとはキスが待っている。シャルロットはそんなことを期待しながら今日見た自分の夢を思い出していた

(状況は若干違うけどシチュエーションとかが一緒!まさか、あれは正夢だったの!?)

ドキドキと心臓が速く鼓動を打つ。そして、映司が

「よし、一緒に掃除やるぞ」

そう言って再び掃除をやり始めた映司を見てシャルロットはポカン

となった

「ん？どうしたシャルロット？」

「な、なんでもないよ！ハハハ・・・」

手をワタワタと振って誤魔化した

（そっだよね。期待しすぎだよね・・・）

現実には思い通りにならないと実感した瞬間だった

組み合わせと体力切れと期待はずれ(後書き)

次回、内容不明

買い物のお誘いと追跡トリオと特別（前書き）

PVがとうとう10万を超えた

買い物のお誘いと追跡トリオと特別

「そついえば」

「なに？」

シャルロットは床を掃除しながら訊く

「シャルロットは今度の日曜日空いてるか？」

「うん。空いてるよ」

「じゃあ日曜日、買い物に付き合ってくれないか？」

まさか、映司から誘いがくること何て思わなかったシャルロットはそれを聞いて思考回路が一時停止した。

（まさか、映司がラウラやセシリアより僕を誘ってくれるなんて・・・）

そのことに涙腺が緩みかけたシャルロットだった

「シャルロット？」

「うえっ！？な、なにっ？」

「いや何って、日曜日買い物に付き合ってくれるのかって訊いてるんだけど・・・いやか？」

「うん！全然！日曜だよ。うん！」

日曜日。シャルロットとの待ち合わせ場所でシャルロットを待っていた。すると、シャルロットが走ってやってきた。

「ごめん。待った？」

「いや全然、さっき来たばかりだ」

ちなみに、本当です

「んじゃあ行くか」

「うん」

歩き出した二人だったがものの数秒ではぐれた

「え、映司」

休日のせいで人が多く映司が見つからない
まさか、もう電車に乗った！？とシャルロットは思い腕時計を見た
ら時刻はすでに電車が到着して出発している頃だった

「どっしょよ……」

すると、人の群れから手が出てシャルロットの手を掴んだ

「！」

振り向くと映司がシャルロットの手を握っていた

「やっと見つかったか」

映司はシャルロットの手を繋いだまま歩く

そのことにシャルロットは嬉しくてドキドキしていた

「どうした？借りた猫みたいに大人しくして、手、繋ぎたくなかったか？」

「ううん！全然むしろ・・・」

「むしろ？」

「なんでもない・・・」

一瞬、変なことを言いそうになったので黙ることにした

その後ろをふたつの影が追う。そして、そのふたりの状態を見てツインタールの少女が

「・・・あのさあ」

「・・・なんですか？」

「・・・あれ、手え握ってない？」

「・・・握ってますわね」

その二人の瞳には光がなくただ憎悪に満ちた瞳に変わっていた

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。よし、殺そう」

鈴の拳がISの部分展開される

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい」

「「!?!」」

いきなり背後からかけられた声に、驚いて振り返るふたり
そこに立っていたのは、先月鈴とセシリアが敗北を喫した相手
ラウラだった

「なっ!?!あ、あんたいつの間に!」

「そう警戒するな。今のところ、お前たちに危害を加えるつもりはないぞ」

「し、信じられるものですか!再戦というのなら、受けてたえますわよ!?!」

「あのことは、まあ許せ」

「ゆ、許せつて、あんたねえ・・・!」

「はい、そうですかと言えるわけが・・・!」

「そうか。では私は映司を追うので、これで失礼しよう」

そう言っすたすと歩きはじめたので、鈴とセシリアが慌てて止めた

「ちよっ、ちよっお待ちなさいよ！」

「そ、そうですね！追ってどうしようといひますの！？」

「決まっているだろう。私も交ぜる。それだけだ」

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決。そうですね？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡ののち、ふたりの関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですね」

「なるほどな。では、そうしよう」

かくして、なんだかよくわからない追跡トリオが結成されたのだった

「なあ、シャルロット」

「な、なに？映司？」

手を握ったまま電車に乗ると唐突に映司が話を切り出した

「これからシャルロットのことをシャルって呼んでいいか？」

「うえ！？な、なんで急に！？」

「いや、シャルロットって六文字あるだろ？みんな三文字以内なのシャルロットだけ長いから」

「文字数が多いから呼びやすくするために呼び方を変えるの？」

「まあな。いやならいいぜ」

「う、ううん！」

シャルロットは心の中でガッツポーズをした

(文字数が多いだけって言ってたけど、普通は気にしないよね。映司の中では僕のことを特別な存在って思ってる証拠だよね！)

そんなことを思い喜びに満ち溢れるシャルロットだった

ふと隣の映司に視線を向けると映司がどこかを見て苦笑していた

「どうしたの？映司」

「なんでもない。次降りるぞ」

電車を降りるとき後ろ手でタコカンを開けた

買い物のお誘いと追跡トリオと特別（後書き）

次回、更衣室に連れ込まれるフラグをブレイク

怪しい影と誘導と機嫌直し

「えっーと、水着売り場はここだな」

俺たちは電車を降りてその駅の近くにある『ショッピングモール』レゾナンス』の二階にいた

「ところでシャルも水着買うのか？」

「そ、そうだね・・・あの、映司はさ、その・・・僕の水着姿、見たい？」

「ん？まあ、見て見たいな」

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、せつかくだし新しいの買おうかな」

繋いだ手を軽く力を込めながら、シャルは何度もうなずいた

「じゃあ、男と女は売り場が違うし、いったんここで別れるか」

「あっ・・・」

ぱっと手を離したら、なぜだかシャルは妙に心残りのあるような声を漏らした。

「どっした？」

「あっ、ううん。なんでもないよ」

「そうか。じゃあ、とりあえず三十分後にまたここで」

「うん、わかった」

こうして俺たちは一端別れることにした

「さてどんな海パンがいいかな」

水着売り場で何を買うか考える

「まあ、無難にこれでいいか」

俺が手にした水着は赤を貴重とした水着だ。その水着を持ってレジへ会計に行く所で何か違和感を感じた。違和感はすぐ後ろにいた

「動かないでちょうだい」

背中に何かを押し付けられた。感触からして拳銃か？

俺は言われた通り動かさず黙っていた

「さすが状況把握が速いわね」

「目的はなんだ？オースのメダルか？」

「ふふっ、確かに欲しいわ。だけど、私には合わない。眩しすぎるからね」

「なら一体……」

「 映司くん……」

その瞬間、クルリと体をねじり右手を突き出す。しかし、そこには誰もおらずハンガーだけが床に落ちていた

「これを拳銃に見立てたのか……」

ハンガーを拾いハンガーばかりを集めてあるカゴに入れた

(さっきのやつ……なんで俺の名前を知っていた?)

鷹代以外の俺の苗字。呪われた名前だ

買い物を終えた俺は一足先にシャルを待つことにすると、

「あれ？早いな、もう買い物終わったのか？」

「あ、ううん。ちょっとね、映司に選んでほしいなあって思って」

「そうか。じゃあ実物を見に行くか」

そして、俺は女性用水着売り場に入る。すると、後ろから声を掛けられた

「そこのあなた」

「……」

振り向くと見知らぬ女性が立っていた

「その水着、片付けておいて」

いきなり命令か……。聞く気はないので無視する

「ちょっと待ちなさい！男のくせに生意気よ！」

ギャーギャー五月蠅いな。こういうのは無視を押し通せばいい。どれだけ呼び止めても無視をするのを見て見知らぬ女性は新しい行動にでた

「この……。なら、警備い」

「あの、このくらいでもういいでしょう？彼は僕　私の連れです
から」

シャルが女性に割り込んでくる

「良くないわ！男のくせに無視をしていいと思ってるの！？」

「じゃあ女尊男卑の社会だから見ず知らず男を命令してもいいと思
ってるのか？」

雲行きが怪しいので俺も戻って口を挟む

「当然よ！今の社会は男よりISの使える女が偉いの！」

「そうですか。なら、あなたにISは使えるのか？」

「な・・・」

解答に詰まる女性。そりゃそうだ。ISにも適性がある。それがダメならISは動かせられない

「あと、俺・・・俺たちはIS学園の生徒ですからね」

「・・・くっ！」

走り去って行く女性だった

「映司って誘導尋問が得意なんだ」

シャルが横目で言う

「まあ、助けてくれたのは感謝してるぜ。シャル」

手をシャルの頭にのせて撫でると、シャルは顔を赤くした

「で、もう決めたか？」

「そ、それなんだけどね・・・ちよつとこつち来て」

シャルは俺の手を引っ張っていく。更衣室へと。

「ちよつと待て。俺を変態にしたいのか？」

更衣室へ向かう足を止めてシャルに言う

「え、でも見てほしい水着はあの中にあるし、じ、直に見てほしいな〜て……」

「だったらここで待つてるから着替えてこい」

「それじゃあダメなの!」

シャルがいきなり叫んだのでビクツと体を震わせる

「ご、ごめん。だけど、そうしなきゃあの三人に映司との買い物妨害されちゃう……」

最後の言葉が若干聞こえなかったが、つまりシャルは後ろを追ってくる三人を警戒してるのかわらぬ、もういいか

「そこに隠れてるのはバレバレだぞ。鈴、セシリア、ラウラ」

三人が隠れているであろう場所に言っても出てこない。だからこそ

「わっ!なに!?!」

「これは映司さんのカンドロイド!?!」

タコカンの猛攻に二人は俺とシャルの目の前に押し出された

「で、お前らは何しに後をつけてきたんだ?」

「……」

鈴とセシリアはこっちを見て無言を貫く
すると、鈴が口を開く

「あ、あんたがシャルロットばかり構ってるからよ」

「そ、そうですね！たまにはわたくしのごとも構ってくださいまし
！」

「なんだよ。そうゆうことなら臨海学校のとくに何かに付き合って
やるよ」

「ほんと（ですか）！？」

「ああ」

「なら今回ことは多目に見てあげるわ」

「そうですね」

なんか二人は上機嫌になった。よかったよかった。シャルはなぜか
不機嫌だった

「あれ？ラウラは？」

鈴が一人いないことに気づいたがその場にはいなかった

怪しい影と誘導と機嫌直し（後書き）

次回、タマシー

警告とタマシーと資格（前書き）

今回タマシーの登場

僕は映画に行っていないのでタマシーについて詳しくわからないのであしからず

追記：とある動画サイトからタマシー登場の動画を見て音声がある感じが聞こえたので間違っていた場合はすぐに教えてください。
直しますので

警告とタマシーと資格

臨海学校出発前夜

ふと俺は目を覚ますと見覚えのある空間にいた。体を起こして回りを見るとやっぱり前に来たことがある場所だ。すると、隣に長髪の天使もどきがいた

「やっと起きたk」

ため息混じりに天使もどきが言おうとした瞬間、天使もどきの顔に映司のグーが飛んできた

「君は一体何をする!?!」

「それはこっちのセリフだ。どういうことが起きてるか説明しろ」

拳からバキバキ音をならして天使もどきに言った。長髪の天使もどきは立ち上がり一瞬戸惑いながら答えた

「今起きていることは我々もすべて把握しきれていませんが分かっていることは影で我々以外にコアメダルを生成している者がいる程度です」

「いやそういう話は別にしなくていい」

すでにだいたい予想がついていたから新鮮味はない

「そうですね・・・ならばなおさら気を付けてください。彼女らは

いつでも
「

天使もどきの言葉は最後まで聞こえずに目が覚めた

「まだ夜中じゃないか・・・」

辺りは暗かった。なのに目が覚めてしまったので眠れない。ベットから起き上がりベランダの方へ行く。手には先日、手に入れたイマジン、シヨツカーメダルがあった

「あいつらは一体何のために・・・」

すると、何者かが俺の部屋のベランダに向けてビットが飛んでくる。咄嗟の判断でベランダから飛び降りて変身した

「くっ、誰だ!?!」

タトバコンボのオーズは辺りを見渡す。そして、そこには銀の鎧を身に纏い片手に剣と蟹のようなハサミの腕をしたこの前の敵がいた

「お久しぶりですね。鷹代映司さん」

剣先を向けてオーズに斬りかかる。それをトラクローで受け流すが、甲冑の怪人のハサミの腕の攻撃を喰らい火花を散らす

「ぐあ!?!」

タトバでは部が悪いのでゴリラのメダルに入れ替えようとしたが

「!なんでこの二枚以外でないんだよ!」

いくらやっても腕輪からはイマジン、ショッカーのメダルしかでない

「・・・」

剣先を構えて怪人が走り出す

「くそっ！どうにでもなれ！」

オーカテドラルにオースキヤナーを通す

『タカ・イマジン・ショッカー！タ・マ・シー、タマシー！タマシ
ー！ライダー魂！』だまし

剣に向かってイマジンアームで殴ると、剣はバラバラに割れた

「!?!」

剣が破壊されて一瞬驚いたことにより隙ができてしまいオーズの殴る蹴る蹴るの連撃を受けてしまい怯む

『スキヤニングチャージ！』

「ハアアアア・・・」

両手を広げて構え、右手を頭の上に左手をベルトのした部分に持つてくるとイマジンのマークとショッカーのマークがあとに炎を連れながら構えた手の部分にくる。それを貯めたあと一気にそれを押し出す。

「ハア!!」

イマジンとショッカーのマークは一つのエネルギーになり銀の鎧の怪人に当たる

「やったか!？」

派手に爆発を起こしたが煙のせいで技が当たったかわからない
すると、煙が吹き飛ばされ銀の鎧の怪人が現れた。しかもさっきまで何もなかった頭に仮面と銀の兜と再生した剣があった

「ふふふ、あなたに感謝しますよ。TGシステムが完全に私と一体化しました」

オーズはもう一度構えようとしたら急にオーズの力が逆流して制御できなくなる

「なん、だ!？」

すると、ベルトからメダルが二枚飛び出て粉々に割れ、変身が強制解除された

「やはり、そこが限界でしたか・・・」

まるでこうなることを分かっていたような口振りの怪人は剣を納めてISの状態に戻る

「もういいでしょう。では私はこれにて」

ISを浮かし帰って行く。追おうとしたが逆流する力がまだ体の自

由を奪っていた

パタリ

その場に倒れ込み意識が遠くなっていた

「うっ……」

目を覚ますと俺は保健室のベッドに横になっていた。近くには伊達先生がいた

「おっ、起きたか」

伊達先生が気づいて俺に話し掛けてきた。伊達先生に話を聞くと倒れているところを朝ジョギング中の後藤先生に見つけられ保健室につれてきてもらった次第だ

「たく、朝早くから仕事を増やすなよ」

後藤先生にたたき起こされたらしく欠伸をする伊達先生だった

「あと、織……なんだっけ？あのつり目のコワモテのネーチャン」

「織斑先生ですよ」

「そうそう、その織斑先生には言わないでおいだから」

「えっ？なんでですか？」

「決まってるだろ。今日は臨海学校に行く日だぞ？」

臨海学校・・・

「しまった！？今の時間は！？」

「七時過ぎたぞ」

「失礼しました！！」

急いで保健室を出ていった。保健室で伊達が呟く

「・・・後藤ちゃん」

「はい。完全に元通りみたいですね」

物陰から後藤が現れた

「あんな子供にオーズの力を与えるなんてどうにかしてるじゃねえか？」

「ですが 家の者にしかオーズの力を制御できませんし他の人間が使えば暴走を起こして」

「悪い。分かったことだ」

臨海学校へ向かうバスの車内では海を見てはしゃぐ女子たちがいた

「zzz・・・」

俺はアイマスクを掛けて寝ていた

「映司・・・寝過ぎだよ・・・」

隣に座るシャルがそんなことを言っているが爆睡中の俺には聞こえるはずもない

「あつ、そつだ。前に映司が見せてくれた。カンドロイドを・・・」

映司の鞆を探るとオレンジと青のカンを見つけた

「青はタコでオレンジがクジャクだっけ」

クジャクは回転する羽が痛いので青のタコカン？を選んでプルトゥッ
プを開けて映司の頭に上手く乗せる

「お願い映司を起こして」

カンドロイドが開いて姿が現れる。体が丸い形のを連続させた
へビのような形だった。すると、バチィィィと電流が映司に流れた

「うがあああああ！！？」

電流によって目を覚ました俺は辺りを見渡す

「・・・シャル、お前の仕業か？」

「ごめん、タコカンと間違えちゃった」

申し訳なさそうに言うてくるのでしようがないなと言って許した
こうしてIS学園の一年生一行は臨海学校に到着したのだった

「以上オーズとの戦闘報告を終わります」

暗い空間に映し出されていた映像が消えて部屋に明かりがつく
机はドーナッツ状になっていて六人の女性が座っていた

「予測通りの結果で満足かい？ドクターマギ？」

黄色のジャケットを身に纏い女性が自分のピアスを触りながら尋ねた

「まあね。メダルの完成に生かせるいい結果だったわ」

パソコンのキーボードを叩きながら答えた

「ねえ、まだ私のISは完成しないの？」

黄色のジャケットを着た女性の向かい側に青い服に身を包んだ女性が訊く

「ISのフレームはすでに完成しているけどコアがまだいいの見つからないの。もう少し我慢していなさい」

むすつと頬を膨らませて椅子にもたれた。そこにツインテールの少女が熊を抱えて近づいて心配そうな顔で言う

「お姉さま、大丈夫？」

そんなことを言われて青い服の女性がニコリ顔でツインテールの少女の頭を撫でる

「ともかくも当分の目的はISとメダルの完成よ。次の作戦はIS学園の臨海学校に潜入する。メンバーはカザリ、ガメル、ノブナガ
よ」

こうして彼女たちも臨海学校へ向かうのだった

警告とタマシーと資格（後書き）

最近、よく天使が出てきて残念ですという感想をもらいますのでここで天使もどきについて補足説明を致します

天使もどき（本名不詳）

映司をISの世界に転生させた張本人。ときどき映司のいる世界に訪れては暗躍している。そのときの姿は背の低いツインテール髪。ちなみに、メダル及びベルトのメンテナンスは天使もどき以外に出来る人はいない。

水着と競争とバスタオルお化け（前書き）

書くペースが日に日に遅くなる遅くなる・・・

水着と競争とバスタオルお化け

臨海学校の部屋は山田先生と同じになった

理由は真夜中に女子が男子の部屋に潜り込むのを阻止するためらしい
今、部屋には俺一人。同室の山田先生は織斑先生に何か用があるの
で部屋を出ていってしまい、監視の意味あるの？と疑うのだった

「まあいいや。さつさと海行くか」

水着の用意をして男子が使う更衣室へ向かい海に行った

「海か・・・」

着替え終えたあと海を見渡す

白い砂浜に青く輝く海。久しぶりだな。

「ふあゝ、眠い。どっかに気持ちよく寝れる所ないかな」

昨日疲れがまだ残っていたので今も眠い

そんなことを思いながら場所を探す

すると、いきなり肩に何かが肩に乗りついてきた

「おわっ！？だ、誰だっ て 鈴！？」

「おー高い高い。遠くまでよく見えていいわ。ちょっとした監視塔
になれるわね、映司」

そこにはおへそが出ているオレンジと白のストライプのスポーテ

イーなタンキニタイプの水着を着た鈴だ

「嬉しくないよ。早く降りないとひどい目に会わずぞ」

そう言いながら鈴の足をガシツと掴み右足を軸に回転する

「ちょ！？ば、バカ！気持ち悪くなる！」

こうして鈴は降りた

そして、そこにタイミング良くセシリアがパラソルを持ってやって来た

ちなみに、セシリアはブルーのビキニを着ていた

「あら？鈴さん？どうしましたの膝なんてついて？」

状況が分からないセシリアが鈴に訊いた

「ちょっとした恐怖体験をしたぐらいよ」

そう言ってフラフラ立ち上がって海へ向かっていった

セシリアは訳がわからずポカンとしていたが

「はあ……。まあ、いいですね。それより映司さん。わたくしにサンオイルを塗ってください！」

突然そんなことを大声で言って驚いたが、まあ、約束したしなうと思ひ断らなかつた

「確か背中だけだったよな？」

「え、映司さんがされたいのでしたら、前でも結構ですわよ?」

「確かサンオイルはこうしたあとに塗るんだったな」

セシリアの言葉を無視したらセシリアがジト目で俺を見たあとうつ伏せの状態に戻る

「じゃあ塗るからな」

やはり年頃の女の子の肌はすべすべしてる母さんとはえらい違う肌触りだな

そう考えているとふと手が止まった

「なに思い出してるんだ俺・・・」

「え?どう致しましたか?映司さん?」

「ん?いやなんでもない。それよりサンオイル塗り終わったぞ」

そう言っつてその場をあとにして行った

「?」

セシリアは何が何だか分からないままだったが

その頃、近くの海岸では

数十人もの女子生徒に囲まれた教師がいた

「わー!伊達先生、すごく鍛えてるね」

「後藤先生！こっちで一緒に遊ぼうよ！」

囲まれている伊達は迷彩柄のトランクスタイルの水着で後藤はウェットスーツを着ていた

ちなみに、近くには榊原日奈もいて水着は白と黒のストライプの囚人風な水着である

そんな様子を眺めながらふと日奈が海を見るとちょうど映司が海に入ろうとして鈴に絡まれているところだった

「何か面白いことが起きそう・・・フッフ」

三度の飯より面白いことが好きな少女、日奈が映司の元へ向かっていった

「映司、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前の『@クルーズ』でパフェおごんさいよ。　　よーい、どん！」

「え？ちよっ！？待てよ！」

鈴がやって来たと思えばいきなりそんなことを言っただけで泳ぎ去っていく

「とうか『@クルーズ』ってなんなんだ？」

日頃街に行ったりしてないのでわからん
とにもかく追いかけるか！

(映司はシャルロットやラウラばかり相手しててあの二人に差をつけられてる気がする)

泳ぎながら鈴は思った

当初は一日でも同じ部屋に泊まった者同士ということでもセシリアよりリードしていると思っていたがシャルロットとラウラがやって来てシャルロットは1ヶ月の間、映司に男として接近、同居していたり、映司から買物物の誘いを受けたり、ラウラはいつもいつも映司の元から離れずにいてその間、近くにいなから映司が遠くなっている気がしてならないがこの臨海学校でその差を挽回する!と心に近いながら息を吸おうと思いついて口を開けたら口の中に海水が入ってきた

「!?!?ごぼぼっ!」

軽いパニックに陥った鈴は、姿勢を崩してもがくすると、鈴の腕を掴んで引っ張られた

(あ、映司……。映司の腕だ、これ……)

映司のおかげで海面に浮上した鈴を腕で抱えて砂浜に戻ることにした

「たく……。何溺れてるんだよ」

腕で抱えられて映司と密着していることに赤面しながら鈴は反抗する

「う、うるさいわね!あ、あたしが溺れるはずないし、いい加減くつつくのもやめて!」

「そうか。だったらほれ」

すんなり鈴の腰辺りに固定していた腕を放すと無言でなんで放すのよ！という顔になった

「……もうどっちだよ。抱えてほしいのか抱えられてほしくないのか」

ブツブツ言いながら再び鈴の腰に腕を回し抱えていく

「……映司、その、ありがと……」

「ん？別にいいよ。仲間だからな」

仲間か……と呟いたあと、嬉しさ半分落胆が半分の感情が半分づつの顔になった

「ほれ着いたぞ」

砂浜に戻りいつの間にか鈴をお姫様だつこの状態になっていることに気づいた鈴は顔を真っ赤にしてすぐに映司の元から去っていった

「なんだ？鈴の奴？」

訳がわからず立ったままの俺の隣から新たな声がする

「あ、映司。ここにいたんだ」

そっちの方を向くと鮮やかなイエローのセパレートとワンピースの中間のような水着をしたシャルとバスタオルの怪人がいた

水着と競争とバスタオルお化け（後書き）

オーズについての補足

爬虫類コンボについて

このメダルたちは一応、他のメダルとの亜種コンボを出来るよう設定してあります。亜種コンボができるのは何かとこれからの展開に都合がいい気がするので（？）（

赤面と山葵と浴衣（前書き）

更新が遅れた理由：受験

赤面と山葵と浴衣

シャルの隣にいたバスタオル怪人は水着を見せるのが恥ずかしいと言っラウラらしい

「ほーら、せつかく水着に着替えたんだから、映司に見てもらわな
いと」

「ま、待て私にも心の準備というものがあってだな・・・」

「もー。そんなこと言ってさっきから全然出てこないじゃん。一応
僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思っけどなあ」

シャルの説得は続くがいつこつに脱ぐ気配はない。すると、

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も映司と遊びに行こうかな
あ」

「な、なに？」

「うん、そっしょ。映司、行こっ」

シャルはそのまま俺の手を掴んで波打ち際へと向かおうとする

「ま、待てっ。わ、私も行こっ」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいんだろう、脱げば！」

ばばぽつとバスタオル数枚をかなぐり捨て、水着姿のラウラが現れた

「笑いたければ笑うがいい……」

ラウラの水着は黒の水着でレースをふんだんにあしらひ、長く伸ばした飾り気のない髪は左右で一對のアップテールになっていた

「似合ってるし可愛いじゃん。ラウラ」

「なっ……！」

ラウラの顔がカーッと赤くなる

すると、後ろから殺気を感じ避けると俺にドロップキックを与えようとした日奈が通り過ぎ顔を真っ赤にしたラウラに直撃した

「やば！？勢い殺せなかった！」

どんなけ助走したんだよと思ったがそれよりもドロップキックを喰らったラウラを抱き起こして肩を叩く

「大丈夫か！？ラウラ！」

「わ、私は、か、可愛いなど、い、言われたこと、など……」

ラウラはそこから立ち上がり赤面したまま旅館へと走っていった

「あれは重症だな」

「そうだね。ハハハ・・・」

シャルと苦笑していると一夏たちがビーチバレーをやり始め俺はそれを眺めていた

その後、黒いビキニの水着を着た織斑先生がやって来て一夏が鼻の下を伸ばしていた

「そういえば映司って織斑先生の水着を着てもなんともなかったみたいだけど・・・」

「ん？別に歳上の水着を見ても興奮する男じゃないよ」

「じゃあ映司はどういう子が映司の好みなの？」

そうくるか。この場合の好みは女性のタイプか？なら・・・

「まあ、特にないな」

「強いて言うなら」

ぐっ、シャルが食いついてきた。でも、好みの女性のタイプなんてないしな

「そ、それよりお昼だし昼御飯を食べに行こうよ。シャル」

「はぐらかさないでよ映司。映司の好みは？」

「そつだ！臨海学校のあとに何かプレゼントしてやる。それでいいだ？」

「え、じ、じゃあわかった」

ふう・・・どうにか話をそらせた上に命の延命も出来た。ずっと触れてなかったけどセシリアが人の物影からものすごい視線を俺に浴びせていてヘタなことを言えば即死だった

夕食は昼御飯と同じく刺身だった

すると、一夏が本わさを見て感嘆の声を洩らしていた

「ねえ、映司。本わさってなに？」

隣のシャルが俺に本わさについて訊いてきたので一応答えた
すると、何を思ったのかわさびの山をぱくつと口の中に入れた
まあ、案の定わさびの辛さにやられてしまったけど

「う・・・くう・・・」

さらに、問題なのは隣の正座に苦しむセシリアだ
いっこうに料理に手をつけていない

「セシリア、足が痺れたなら椅子の方にいった方がいいんじゃないか？」

「大丈夫ですわ・・・この席を獲得するにかかった労力に比べれば、これくらい・・・」

「でも料理が冷めたらいけないだろ。どうするんだ？」

「本当に大丈夫ですわ・・・ちゃんと食べれますから・・・」

そう言っただけながら味噌汁を飲む

「なあ、セシリア・・・」

「移動は、しませんわ」

「わかった。もうその事にはなにも言わないが本当に食べれるのか？無理なら食べさせてやるけど・・・」

「え、映司・・・」

隣のシャルがわなわなという擬音語がピッタリな反応をする何か問題あるか？と言おうとしたらセシリアが

「それはほ、本当ですよ!？」

セシリアがずいずいっ迫ってきた

う、近い・・・ちよっと離れてくれないと

「セシリア、あまり近づくな。浴衣の中が見えるぞ」

そんなことあるはずのないことを言っただけでセシリアは胸元をしっかりガードして静かに正座する。なぜかその目はジト目で睨む

「映司のえっち」

セシリアとは反対側に座っていたシャルもそんなことを言う
なにか俺が悪いことでもしたか？
そう考えて謝るのかなと思うとセシリアが無言で箸を俺に渡してくる

「結局、食べさせてほしいのかよ」

箸を受け取り何が食べたいか訊く

「わさびはどつする？」

「わさびは少量で・・・」

セシリアもわさびは苦手らしい

「じゃあ」

「は、はい。あ・・・」

んと言おうとしたところで問題が起きた

「あああーっ！セシリアずるい！何してるのよ！」

「鷹代君に食べさせてもらってる！卑怯者！」

「ズルイ！インチキ！イカサマ！」

他の女子に見つかり口々にズルイと連呼

そんな状況にセシリアが何か言おうとしたが俺がそれを遮って言う

「みんなセシリアは足が痺れて料理が食べられないから仕方なく俺

に食べさせてほしいって言ったんだ」

言い終わると騒いでいた女子が「あ、私、足が痺れてきたみたい、鷹代君食べさせて」と言い始めた
ええい！面倒くさい！

「さっきまで楽しく話ながら食べてたろ！ダメだ！先着一名！一口のみそれ以外はまた今度！これでいいだろ！」

そう言つて女子たちを無理矢理納得させて席に座りセシリアに一口食べさせたあと、食事に戻った

現在、俺は館内の廊下をブラブラしていた
なぜか？やることがないから

「お、鷹代じゃねーか」

お風呂上がりの伊達先生に会った

「どうも」

そう挨拶したあと伊達先生が話があると言って部屋に連れていかれた

診察と口封じと見え隠れする影

「で？どうよ。体の具合は」

「今のところはなんとも」

現在、伊達先生の部屋では今朝の検査の続きをしていた

「もうオーズからのエネルギー逆流作用は起きてないな。まあ、これで大丈夫だろう」

伊達先生が持ってきた医療器具を仕舞いながら言った

「エネルギー逆流について何か分かりましたか？」

「それは絶賛後藤ちゃんが調べ中だ」

その後、伊達先生の部屋をあとにした

一方その頃

「」「」「」
「」「」「」
「」「」「」
「」「」「」
「」「」「」

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの順に恐怖の鬼教師、織斑千冬の部屋にいた

なぜこんな状況かと言うと映司の部屋を訪ねようとセシリアが歩いていると箒と鈴が一夏の部屋にへばりついて聞き耳を立てていたそれにセシリアも加わり聞き耳を立てると襖をドン！と叩き、その後織斑先生の命令によりシャルロット、ラウラの両名を呼び出し現在に至るのだった

誰もが無言のこの空間で織斑先生は言った

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その・・・」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと・・・」

「は、はじめてですし・・・」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり名前を呼ばれてビクツと肩をすくませたあと、言葉が出ずにいると千冬が旅館の冷蔵庫から清涼飲料を五人分取り出す

「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

しかし、箒・シャルロット・鈴・ラウラ・セシリアはそれぞれ受け取った物で満足だったため交換会は行われなかった

「い、いただきます」

全員が同じ言葉を口にして、飲み物を口のする

女子の喉がごくりと動いたのを見て、千冬はニヤリと笑った

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど・・・」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言うとまた冷蔵庫を開いて星マークのついた缶ビールを取り出してグビグビ飲み始めた

「・・・・・・・・」

全員が唾然としている中、千冬は上機嫌でベッドにかける

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが・・・それは我慢するか」

いつも規則と規律に正しく、全面敵戒態勢の『織斑先生』と目の前の人物が一致せずぽかんとしている。特にラウラは、さっきから何度も何度もまばたきをして、目の前の光景が信じられないかのようだった

「おかいしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。

それとも、私は作業用オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

ラウラはぼかんとしたままコーヒをぐくりと嚥下する

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

千冬がニヤリと笑うと、全員が手元をざっと見て「あっ」と声を漏らした

「さて前座はこれぐらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいいおとを響かせながら千冬が続ける

「篠ノ之だけはちがうみたいだが、お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ、とは一夏一（篠ノ之のみ）と映司を指しているとすぐにわかった

「わ、私は別に……以前より腕が落ちていることが腹立たしいだけですので」

ラムネを傾けながら箒

「あたしは、日頃の愚痴の捌け口なだけだし」

スポーツドリンクのフチをなぞりながら、もぐもぐと言つ鈴

「わ、わたくしはただのクラスメイトとして親睦を深めようとして
いるだけです」

「ふむ、そうか。ではそう一夏と映司に伝えておこう」

「「「言わなくていいです！」「」」

はっはっはつと笑い声で一蹴して、千冬は再びビールを傾ける

「僕 あの、私は・・・やさしいところ、です・・・」

「ほう。だが、あいつは誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね・・・。そこが悔しいかなあ」

あははと照れ笑いをしながら、熱くなった頬をぱたぱたと扇ぐシヤ
ルロット

「で、お前は？」

さつきから一言も発していないラウラに、千冬が話を振る。どうも
それ自体は警戒していないようびくつと身をすくませながらも言葉
を紡ぎはじめた

「つ、強いところが、でしょうか・・・」

「確かにあいつは強いな」

案外あっさりとか冬も映司の強さを肯定したが小声で五人に聞こえないように呟いた

「・・・だが、何か別のものもあいつから見え隠れしている気がする」

最初のIS事件もそうだったが映司は何かを守るためならすべてを破壊しても止まらない気がしていた

千冬はそれ以上深く考えれば映司の心の中にある黒いものの一端に触れる気がしたので考えるのをやめて言う

「まあ、あの二人は家事も料理もなかなだし、一夏に至ってはマッサージがうまい。付き合える女は得だな。欲しいか？」

え！？と全員が顔を上げる。それからおずおずと、ラウラが尋ねた

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

ええ〜・・・と心のなかで突っ込む女子一同

「女ならな、奪つくらい気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

診察と口封じと見え隠れする影（後書き）

福音編ではモチベーションが上がらすが完成が遅れています・・・

緊急事態と撃墜と三枚のメダル

合宿二日目。今日は丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる日だ。特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。まあ、俺には関係ないけどな。ちなみに、今日はめずらしくラウラが遅れてきて罰としてISのコア・ネットワークの説明をしていた

「日奈。新しいバースの装備が来ている。ベルトにその情報をダウンロードするから貸してくれ」

バース装着者、榊原日奈には後藤先生が付きつきりでバースの新装備の説明をしていた。どうやらバースの左肩に何か特殊な装備が施されるらしい。本編にはそんな装備は存在しないので若干楽しみだすると、織斑先生が篠ノ之箒を呼び出して何か言おうとしているのが目に入ったと思ったらウサギの耳みたいな物を付けた人影が織斑先生のアイアンクローを喰らわせていた
その後、篠ノ之箒に方に赴いたら日本刀の鞘で叩かれていた
その後、その人物が篠ノ之束と名乗った

「それで、頼んでおいたものは・・・？」

ややためらいがちに篠ノ之箒が訪ねると、篠ノ之束が目キラーンと光らせた

「つつつつつつ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

生徒全員が空を見上げると、

ズズーンッ！

銀色の金属の塊が砂浜に落下してきた

「なんだあれ・・・」

すると、銀色の金属の塊がパタンと開けていき中から赤いISが姿を覗かせていた

「じゃじゃーん！これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

さすが天才と俺は素直に思った。天才が作るISが現行ISを下回っていたら笑い物だからな

「さあ！篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐに終わるよん」

「・・・それでは、頼みます」

こうして篠ノ之箒と紅椿のフィッティングとパーソナライズが開始されたが、すぐに終了。さすが天才

そのあとも一夏の白式のデータを確認したり一夏の質問に答えたり機密事項を軽く喋り織斑先生に叩かれていた

「あ、あのっ！篠ノ之博士のご高名はかねがね承っていますっ。もしよろしければ私のISを見ていただけないでしょうか!？」

セシリアが目をきらきら輝かせて篠ノ之束に話し掛けるが

「はあ？誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は篝ちゃんとちーちゃんといっくと数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出てきているのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」

さっきまでの態度と違ってかわって冷たい口調と視線をセシリアに突き刺す。その態度にピクンと俺のなかで反応いた。悪い意味で

「え、あの・・・」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「う・・・」

セシリアがしょんぼり引き下がる

その姿と入れ代わりに俺は紅椿を見るためにやってきた
すると、篠ノ之束が俺に気づく

「ややつ！？君はもしかしててんちゃんが言っていたタカタカだね
！？」

「それがなにか？」

そう答えると篠ノ之束がポケットからある物を取り出す

「てんちゃんからの預かりものだよ。はいこれ」

差し出されたのは小型の端末機みたいなものパソコンのように折り

畳み式だ

それを受け取り天使もどきのことだから大切な物だろうと思いを操作しようとその場を離れた

そのしばらくあと、専用機持ち全員召集された

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間で織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、榊原日奈、そして、俺こと鷹代映司を含む専用機持ちと伊達、後藤を含めた教師陣がいた

照明を落とした薄暗い室内に、ぼうつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルハリキスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

軍用ISが暴走？立て続けにIS学園に関係する範囲で事件が起きすぎてないか？

映司はそんな不信感を覚えながら周りの国家代表候補生の質問や作戦の相談を聞いていた

いつもニヤニヤしている日奈も今回に限っては真剣そのものだ

そして、話は進んでいき一回しかないアプローチに一撃必殺の攻撃力を持った機体で倒すしかなくなりその役は一夏となった

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持

ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「ふむ……。それならば適任」

織斑先生が言い終わろうとしたとき、いきなり底抜けに明るい声が遮る

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

すると、部屋のど真ん中の天井から篠ノ之束の首がさかさになって出てきた

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とっつ」

くるりんと空中で一回転して着地。そして、次に出た言葉は任務には紅椿をおすすめすることだった

そして、篠ノ之束による紅椿のスペック説明の結果、白式と紅椿が

第四世代型の装備を積んだ第四世代型ISであることが判明。そして、その説明のあいあつてか作戦にはブルー・ティアーズではなく紅椿が適任と判断された

作戦開始時間は三〇分後の十一時半となった

作戦開始時間。

一夏と篠ノ之箒が白式と紅椿を呼び出し準備をした

「織斑、篠ノ之、聞こえるか？」

作戦室からISのオープンチャンネルを使って織斑先生が二人に話しかけた

「今回の作戦の要は一撃必殺。ワンアプローチ・ワンダウン短時間での決着を心がける」

『了解』

『織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？』

「そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使いはじめからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない」

『わかりました。できる範囲で支援します』

そのとき俺は篠ノ之箒の声色を聞いていつもの声色と違う気がしてなにかとんでもないことが起きる気がした。しかし、それは現実の

ものとなった

数十分後、作戦は失敗し一夏と篠ノ之箒は海から引き上げられた。その時にはすでに一夏の意識は一夏の専用機『白式』により昏睡状態になっていた

「『シルバリオスベル銀の福音』か……これを試してみる価値はあるな」

IS学園の生徒たちが宿泊する旅館の近くの森に夏にもかかわらず白いジャケットを身に纏った女性が銀色のコウモリをレリーフにしたメダルを手に遊ばせながらニット帽を深く被った女性とクマのぬいぐるみを抱えたゴスロリ衣装の少女に訊いた

「面白そうだし試してみようよ」

彼女もポケットから黄色のメダルを取り出す

「お姉様の役になるなら私もやる」

クマのぬいぐるみの背中からアルマジロのメダルを抜き取る

そして、次の瞬間には彼女たちの姿は消え現れたのは黒いISと黄色のISそして灰色のISだった

緊急事態と撃墜と三枚のメダル（後書き）

補足説明：今回でてきた小型端末の役目はオーズのクジャクウィングをタジャドルコンボ以外でも使用可能にする物です

決意と新たな翼と銀の福音（前書き）

最後がグダグダ・・・もっと良い会話をさせてあげたい・・・

決意と新たな翼と銀の福音

一夏は、すでに三時間以上も昏睡状態のままだった

「……」

俺は部屋に寝転びながら篠ノ之箒のことを考えていた

(新しく手にいれた力に溺れたか……)

今頃自分の情けなさを悔やんでいるだろうしああいうやつはいろいろやりにかない

「まあ、大丈夫か……」

立ち上がり俺は一夏の眠る部屋へ向かった

一夏は自分のせいでああなったと一人箒は自分の弱さを悔やんでいた
すると、ドアを乱暴に開ける音がした
そこには鈴がいた

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

「……」

「あのさあ、一夏がこうなったのって、あんたのせいでしょ?」

「……………」

「で、落ち込んでますってポーズ？　っざけんじゃないわよ！」

烈火のごとく怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった筭の胸ぐらを掴んで無理矢理に立たせた

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうISは……使わない……」

「ッ　　！！！」

バシンッ！

頬を打たれ、支えを失った筭は床に倒れる

そんな筭を再度鈴は締め上げるように振り向かせた

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは　　」

鈴の瞳が、筭の瞳を直視した

そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情。

「戦うべきに戦えない、臆病者が」

その言葉で筭の瞳、その奥底の闘志に火がついた

「ど……」

口から漏れた細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる。「どつしろと言っただ！もう敵の居所もわからない！戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の意志で立ち上がった筈を見て、鈴がふうつとため息をついた

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに」

「場所ならわかるわ。ラウラが」
言葉の途中でちょうどドアが開く。そこに立っていたのは、真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった

「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を確認した。スレスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを、鈴はにやりとした顔で迎える

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちの六人がその部屋に集結する
その部屋のドアに映司がもたれながら聞く
そして、鈴は箒に尋ねた

「で、あんたはどうするの?」

「私・・・私は」

ぎゅゅつと拳を握りしめる箒。それはさっきまでの後悔とは違う、
決意の表れだった

「戦う・・・戦って、勝つ!今度こそ、負けはしない!」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墜とすわ」

「ああ！」

その後、俺と日奈を交えて『銀の福音』シルバリオスヘルを倒すための作戦会議後
浜辺で先生にバレないようにISを全員展開した
そこで鈴が気づいた

「あれ？アンタのISって空飛べないはずだったわよね？」

「『『『『あ』』』』」

全員忘れていたとばかりに間抜けな声を漏らした

「じゃあ前みたいに私が運ぼうか？」

バースの日奈が仮面の奥で笑いながら言うてくる

「いらん。俺にはもうそんなのは必要ない」

タトバコンボの映司の腕輪から赤いメダル。クジャクメダルが飛び
出る

「む……あのメダルは……」

クジャクメダルが出るとラウラが渋い顔をした

まあ、前回使用したときラウラに対してあんなことをしたからな……
だけど、今はそんなこといいか

クジャクメダルをベルトにセットする

『タカ・クジャク・バツタ!』

オーズの胴体部分が赤く変わるトラアームがクジャクアームに変わり、左腕にタジャスピナーが装備された

「はああ・・・はっ!」

両腕をひろげて背中をつき出すように両腕を前に出して交差させる
すると、背中から赤い翼が現れた

「へえ、空飛べるようになったんだ。で、高所恐怖症は直った
の」

.....。

「あれ？凶星だった?」

日奈が仮面の奥でまたニヤニヤしながら言う

「日奈・・・ぶっ殺すぞ・・・」

冗談じゃく本気の声の日奈に向けてとばす

「はいはい。これ以上何も言いません」

俺はふうと息を整え手のひらに人を三回書いて飲み込み、自己暗示
をかける

よし。行くか

「すまん。遅れた」

やっとみんなの元に飛び上がるとラウラが手を差し出して言う

「嫁よ。高所恐怖症ならば私がしばらく手を取っていてやるわ」

えっ？と言いながら驚いたが内心ちょっと安心した自己暗示かけても体はまだ少し震えているからな。俺はラウラの厚意に甘えようとしたら

「ちょっと！ラウラはすぐそこで待機する予定よ！だから、あたしの手を取りなさい！」

「お待ちになって！なぜ鈴さんが映司さんの手をお取りになるのですの！？わたくしの手の方がいいに決まっています！」

なぜか

二人が手を握るか握らないことかでヒートアップしてる
そういう場合じゃないんだけど・・・

「二人ともいい加減にしろ。これから私たちは『シルバリオスベル銀の福音』と対峙するんだぞ！つかれてどうする！？」

篠ノ之箒が怒りながら止めてくれたおかげでこの話は一旦終わりに
なった

（だが、まあ鈴やセシリアのやりたいことは分かるが・・・）

そんなことを一人考える箒だったが、一夏の唐変木をみると一人悲

しくなるのだった
そして、とうとう俺たちはあのISと対峙する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4063w/>

ISとオーズと転生した男

2011年12月18日00時38分発行